

上
比
地
森
ノ
上
遺
跡

宍粟市所在

上比地森ノ上遺跡

(主) 相生宍粟線道路等活力基盤整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

兵庫県文化財調査報告
第373冊

兵庫県教育委員会

平成22(2010)年3月

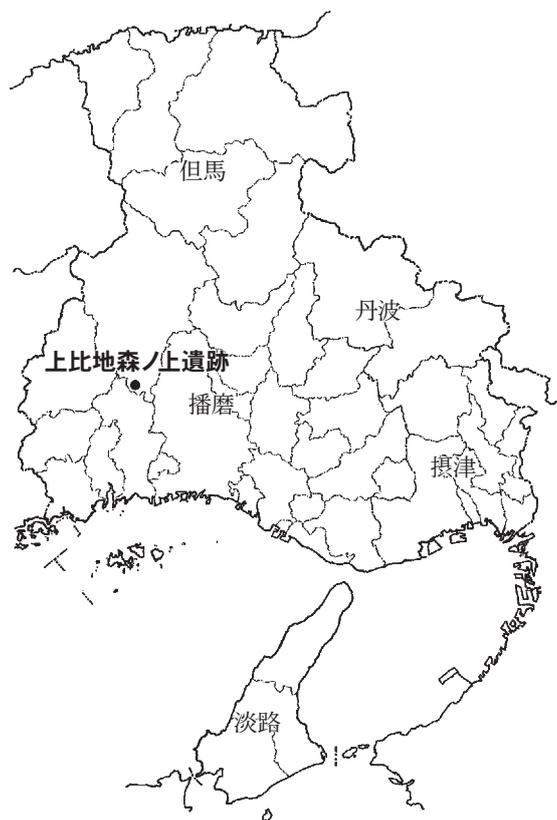
兵庫県教育委員会

宍粟市所在

上比地森ノ上遺跡

(主) 相生宍粟線道路等活力基盤整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書



平成 22 (2010) 年 3 月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景(東から)



遺跡遠景(東から)



遺跡遠景(南から)



遺跡遠景(南東から)



遺跡遠景(南西から)



遺跡遠景(東から)



A地区全景(北東から)



A地区全景(東から)

A地区



A地区全景



中央部(北東から)



SH02(北から)

B地区



B地区全景(南から)



B地区全景(東から)



B地区全景

B地区



SH02・03



SH07



SB06 (南から)



SB06 : SD01



SB06 : SD02

C地区



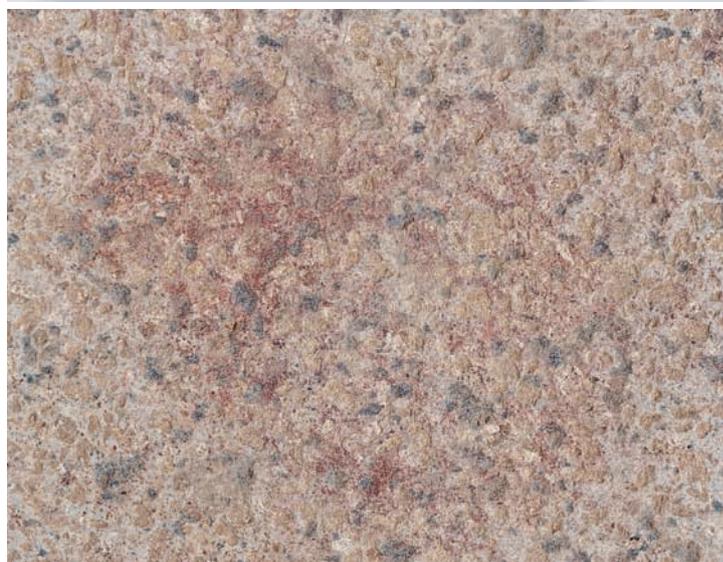
C地区全景(東から)



SH01



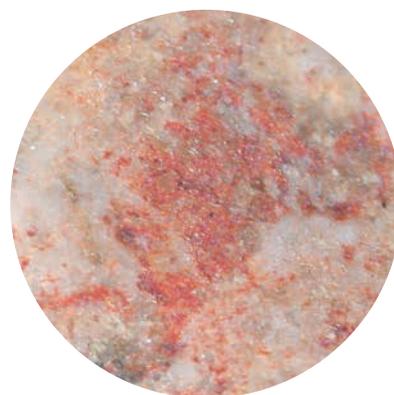
S X 0 1 出土土器



S H 0 2 出土石臼（下：赤色顔料付着部分拡大）



倍率任意



上の写真の約10倍

顕微鏡写真

例 言

1. 本書は宍粟市山崎町上比地に所在する上比地森ノ上遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所（山崎土木事務所：現宍粟事業所）が行う（主）相生宍粟線道路等活力基盤整備事業に伴って実施したものである。
3. 遺跡名については、平成16年発行の兵庫県遺跡地図では「上比地第1散布地」とされているが、宍粟市教育委員会と協議し、上比地森ノ上遺跡に変更した。
3. 発掘調査にあたっては、兵庫県教育委員会と兵庫県西播磨県民局が委託契約を締結し、兵庫県立考古博物館が実施したものであり、本発掘調査・整理調査に係る経費は兵庫県西播磨県民局が負担した。
4. 発掘作業は発掘調査工事として発注し、請負契約で実施した。
4. 遺物写真の撮影は外部委託で実施した。
5. 本書執筆は吉識雅仁・山田清朝・池田征弘・上田健太郎が担当し、分担は各文末に記した。本書の編集は、嘱託職員友久伸子・大西美緒の協力を得て吉識が行った。
6. 本発掘調査で作成した写真・図面等の記録類と出土した遺物類は全て兵庫県立考古博物館で保管している。
7. 本発掘調査に際しては、関係各機関をはじめ、以下の方々に御教示、御協力を頂いた。御芳名を記して深謝の意を表する。

田路 正幸・片山 昭悟（宍粟市教育委員会）

凡 例

1. 土器・土製品は区別なく通し番号としている。この他、鉄製品については番号の頭にFを付けて通し番号とし、石製品にはSを付している。
2. 土器実測図の内、断面黒塗りは須恵器、網掛けは陶器・磁器、白抜きは弥生土器・土師器を示す。
3. 第2図の「周辺の遺跡」及び遺跡地名表は平成16年発行の「兵庫県遺跡地図」から作成したが、その後遺跡名の変更があったものは新しい遺跡名を使用している。
3. 本書に記述した標高は東京湾平均海面（T.P.）からの高さで表し、国土座標値については世界測地系である。
4. また本書で使用している方位は座標北を示している。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 歴史的環境	5

第2章 A地区の遺構と遺物

第1節 遺構	9
第2節 遺物	13

第3章 B地区の遺構と遺物

第1節 遺構	17
第2節 遺物	22

第4章 C地区の遺構と遺物

第1節 遺構	25
第2節 遺物	26

第5章 まとめ

第1節 遺物	27
第2節 遺構	29

挿 図 目 次

第1図	確認調査グリッド配置図	4
第2図	周辺の遺跡	6

図 版 目 次

図版1	調査区配置図	図版18	B地区	SH04
図版2	A地区 全体図	図版19	B地区	SH04中央土坑
図版3	A地区 SH01・02	図版20	B地区	SH05
図版4	A地区 SH03・04	図版21	B地区	SH05・07中央土坑
図版5	A地区 SB01・02	図版22	B地区	SH07
図版6	A地区 柵列・土坑	図版23	B地区	SH09・10
図版7	A地区 谷部溝群	図版24	B地区	SB03
図版8	A地区 SD06～11・15・16	図版25	B地区	SB06
図版9	A地区 SD12～14、SX01	図版26	B地区	SH08他
図版10	A地区 出土遺物(1)	図版27	B地区	SH08内土坑・周辺土坑群
図版11	A地区 出土遺物(2)	図版28	B地区	SB01・02
図版12	A地区 出土遺物(3)	図版29	B地区	出土遺物(1)
図版13	A地区 出土遺物(4)	図版30	B地区	出土遺物(2)
図版14	A地区 出土遺物(5)	図版31	C地区	全体図
図版15	B地区 全体図	図版32	C地区	土層断面、SH01、SB02・03
図版16	B地区 SH01・03	図版33	C地区	SB01
図版17	B地区 SH02・03	図版34	C地区	出土遺物

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版1	遺跡遠景	巻頭カラー図版9	B地区	上 SH02・03
巻頭カラー図版2	遺跡遠景			下 SH07
巻頭カラー図版3	遺跡遠景	巻頭カラー図版10	B地区	上 SB06(南から)
巻頭カラー図版4	A地区 A地区全景			下 SB06:SD01・02
巻頭カラー図版5	A地区 A地区全景	巻頭カラー図版11	C地区	上 C地区全景(東から)
巻頭カラー図版6	A地区 上 中央部 (北東から)			下 SH01
	下 SH02 (北から)	巻頭カラー図版12	A地区	上 SX01出土土器
巻頭カラー図版7	B地区 B地区全景			中 SH02出土石臼
巻頭カラー図版8	B地区 B地区全景			下左 赤色顔料付着 部分拡大
				下右 顕微鏡写真

写真図版目次

写真図版 1	遺跡遠景				(南西から)
写真図版 2	A地区	A地区全景(空中写真)	写真図版11	A地区	上 SD12(東から)
写真図版 3	A地区	上左 A地区全景 (南西から)			中 SD13・14(東から)
		上右 A地区全景 (北東から)			下 SD13東端 須恵器 出土状況(北から)
		下 A地区北半 (南西から)	写真図版12	A地区	出土遺物(1)
写真図版 4	A地区	上 SH01(南西から)	写真図版13	A地区	出土遺物(2)
		中 SH01:SK01・03	写真図版14	A地区	出土遺物(3)
		下 SH01:P1・2	写真図版15	A地区	出土遺物(4)
写真図版 5	A地区	上 SH02(北から)	写真図版16	A地区	出土遺物(5)
		中 SH02 中央土坑	写真図版17	A地区	出土遺物(6)
		下 SH02:P1・2	写真図版18	A地区	出土遺物(7)
写真図版 6	A地区	上 SH03・04(南から)	写真図版19	B地区	B地区全景(空中写真)
		中左 SH03 中央炉焼土 (南から)	写真図版20	B地区	B地区全景
		中右 SH03 南壁際土坑	写真図版21	B地区	上 SH01(東から)
		下 SH03:P1・2			中 SH02・03(東から)
写真図版 7	A地区	上 SB01・SA01・SD12 ・13(東から)			下 SH02・03完掘 (東から)
		中 P31・46(SB01)	写真図版22	B地区	上 SH02 東壁際屋内 施設(西から)
		下 P45・32(SB01)			中 SH03 中央土坑 (東から)
写真図版 8	A地区	上 P51・53(SB02)			下 SH03 中央土坑断面 (東から)
		中左 P33(SA01)	写真図版23	B地区	上 SH03 屋内溝暗渠部 (南から)
		中右 SK03			中 SH03 屋内溝暗渠部 (北から)
		中下左 SK06			下 SH03 貼床断面 (東から)
		下左 SK08			
		下右 SX01(北東から)			
写真図版 9	A地区	上 谷部溝群(南から)	写真図版24	B地区	上 SH04(南から)
		中 谷部溝群(東から)			中左 SH04 中央土坑 (南から)
		下 SD01・02土層断面 (北東から)			中右 SH04 中央土坑断面
写真図版10	A地区	上 SD06・07(南から)			下 SH04 中央土坑周堤 断面
		中 SD06(南から)			
		下 SD09~11			

写真図版25	B地区	上	SH04 : P 4 ・ 3	写真図版32	B地区	上	SB03(南から)
		中上左	SH04 壁溝上黄色 粘土(北から)			中	SB03 : P 1 ・ 2
		中上右	SH04 壁溝上黄色 粘土断面	写真図版33	B地区		SB06(南から)
		下	SH04 土器出土状況	写真図版34	B地区	上左	SB06 : SD01
写真図版26	B地区	上	SH05(南から)			上右	SB06 : P 4
		中左	SH05 中央土坑(新) 断面			下左	SB06 : P 5
		中右	SH05 中央土坑(古) 断面	写真図版35	B地区	上左	SB06 : SD02
		下	SH05 : P 1 ・ 2			上右	SB06 : P 1
写真図版27	B地区	上	SH07(西から)			中	SB06 : P 1 ・ 2
		中	SH07 中央土坑 (東から)	写真図版36	B地区	上	SB06 : P 3
		下	SH07 中央土坑断面			中	SB06 : SD01断面
写真図版28	B地区	上左	SH07 中央土坑(古) 断面			下	SB06 : SD01とP4・ 5断面
		上右	SH07 : P 1	写真図版37	B地区	上	SB01(東から)
		中上	SH07 : P 2 ・ 3			下	SB02(南から)
		中下	SH07 : P 4 ・ 5	写真図版38	B地区		出土遺物(1)
		下	SH07 : P 6 ・ 8	写真図版39	B地区		出土遺物(2)
写真図版29	B地区	上左	SH07 屋内溝断面	写真図版40	B地区		出土遺物(3)
		上右	SH07 屋外溝断面	写真図版41	C地区		C地区全景
		中	SH07 器台形土器 (120)出土状況	写真図版42	C地区	上	SH01(東から)
		下	SH07 外側壁溝上 鉄器出土状況			中	SK05・06断面
写真図版30	B地区	上	SH08・SK05~08 (南から)			下	SK05・06
		中	SH08 : SK01	写真図版43	C地区	上	SB02(東から)
		下	SH08 : SK04			上左	SB02 : P 2
写真図版31	B地区	上	SK05・08			上右	SB02 : P 6
		中左	P 1			下	SB03(東から)
		中右	SH08 焼土	写真図版44	C地区	上	SB01(西から)
		下	SH09・10(南から)			中	SB01 : P 8 ・ 13
						下	SK03(北から)
				写真図版45	C地区		出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

兵庫県では人と自然と科学が調和する高次元機能都市として「播磨科学公園都市」の整備を進めている。中国縦貫自動車道山崎インターチェンジからこの都市へのアクセス道路として（主）相生宍粟線の整備を計画した。また山崎町上比地集落背後の国見山を中心とする山塊上から眺望がよく、山塊の谷間には「比地の滝」等があり、観光資源にも恵まれていることから、県民に文化・スポーツ・レクリエーションの場と機会の提供を目的として展開している「CRS事業」の一貫として、この山塊を「国見の森公園」として整備することを計画しており、その進入路としても（主）相生宍粟線を整備することとした。

平成16年度、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所（山崎土木事務所）から開発計画により照会を受けた兵庫県教育委員会では平成16年4月20日に分布調査を実施し、計画地内のほぼ全域で埋蔵文化財が散布している状況を認めた。そこで、龍野土木事務所に対し、埋蔵文化財が存在すること及び開発計画の遂行に当たっては確認調査が必要である旨を回答し、工事を担当する山崎土木事務所との間で確認調査の実施に向け協議に入った。

協議の結果、「国見の森公園」は平成18年度に開園する計画に合わせて道路整備を急ぐことから、開発計画地内の用地買収が終了後、直ちに確認調査を実施することになった。平成16年度の末になり、山崎土木事務所から県教育委員会に対し、用地買収が一部完了していないものの、完了した部分での確認調査実施の依頼があった。これを受けた県教育委員会では平成17年3月に確認調査を実施し、さらに用地買収が進展した平成17年4月に第2次確認調査を実施した。これら2次に渡る調査で段丘上に当たる地区で遺構を確認し、埋蔵文化財の存在が確実となったため、その範囲を明示し、開発には事前の本発掘調査が必要な旨を山崎土木事務所に回答した。また、用地買収未了部分についても完了後に確認調査を実施するべく協議を続けた。

2次に渡る確認調査の結果を受けた山崎土木事務所は、国見の森公園の開園に合わせて工事を急ぐ必要があったことから、用地買収が完了した部分の本発掘調査実施を県教育委員会に要望した。協議の結果、県教育委員会では開園に合わせた道路供用に協力することが必要と判断し、平成18年1月から本発掘調査を開始し、3月には第1次本発掘調査は終了した。

本発掘調査中の平成18年2月になり、ほぼ用地買収を終了させた山崎土木事務所から確認調査の依頼があり、第3次確認調査を実施した。この確認調査では遺構等は検出されず、その旨を回答した。この調査で、確認調査が必要なのは、B地区として本発掘調査を実施した西側の部分のみとなった。

この地区の用地買収は遅れ、山崎土木事務所が目指した国見の森公園開園時には全線の供用開始には至らず、ようやく平成19年度になって用地買収を完了した。平成20年1月に確認調査の依頼があり、第4次確認調査を実施した。この調査では予想通り、遺構が確認されたことから、平成20年6月から第2次本発掘調査を実施し、7月に終了させた。この本発掘調査の終了により（主）相生宍粟線地方道路改良に伴う埋蔵文化財の調査は終了した。

第2節 調査の経過

1. 第1次確認調査

平成17年3月15日に実施した。対象地は沖積地の西端とそれに面した段丘上であり、未買収で確認調査が実施できない部分が含まれていた。調査は基本的には2×2mのグリッドによる調査とし、段丘上に当たる地区に6カ所、沖積地に当たる地区で4カ所、計40㎡の調査を実施した。調査は機械により表土以下を掘削し、包含層の掘削、遺構面の精査、壁面の清掃は人力で行い、調査終了後は機械による埋め戻しを行った。

調査の結果、段丘上の1-2・1-3・1-5・1-6Gにおいて、表土直下で、弥生時代～中世に至る時期の遺構や包含層が確認された。従ってこれらのグリッド周辺にはこの時期の集落が存在しているものと判断され、集落が2地区に分かれて存在する可能性が高い。ただし、2地区の間は、用地の関係で、1-4Gの1カ所しか調査が実施できていないため、確定的な判断はできなかった。用地買収が完了した段階での調査にゆだねることとなった。

沖積低地に設定した1-7～1-10Gについては、河川堆積物が厚く堆積し、周辺から流入したと思われる須恵器等の遺物が散見する以外遺構等はなく、埋蔵文化財が所在している可能性は極めて低い。

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 吉識雅仁

調査面積 40㎡

2. 第2次確認調査

平成17年4月6日に実施した。第1次確認調査で遺構が検出された2地区の間の部分が対象であり、2地区で検出された遺構がこの部分にまで広がってくるのか、第1次確認調査の結果のように2地区に分かれるのかが調査の目的である。調査は2×2mのグリッドによったが、グリッドは遺構が検出されている2地区よりに設定した。

調査の結果、2-1Gで遺構が確認されたが、2-2・2-3Gでは表土直下が地山となり、遺構は検出されなかった。

この結果から、1-4・2-2・2-3G付近には集落跡は広がっていないことが判明し、道路計画予定地内の1-2・1-3G付近の段丘上でも一段高い地区と、段丘の先端にあたる1-5・1-6・2-1G付近の2地区に分かれて存在することが確実となった。

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 吉識雅仁

調査面積 12㎡

3. 第3次確認調査

第1次本発掘調査中の平成18年2月16日に実施した。調査対象は段丘から離れた沖積低地の中央部である。2×2mのグリッドを6カ所(3-1～3-6)、計24㎡の調査を行った。調査では表土以下を機械掘削し、包含層・遺構が確認されれば人力掘削に切り替える予定で行ったが、遺物・遺構は確認されなかったため、グリッド床面と断面整形を人力で行った。

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 池田征弘

調査面積 24㎡

4. 第4次確認調査

平成20年1月16日に実施した。第1次・第2次確認調査の際には用地が未買収のため調査が実施できなかった地区であるが、第1次本発掘調査のB地区と第2次確認調査で遺構が確認された2-1Gの間のため、集落跡が広がっている可能性が高い地区である。しかし、後世の削平が大きく、遺構が遺存しているかどうかの確認のために調査を実施した。

調査の結果、包含層は存在しないものの、柱穴等の遺構が確認された。

調査担当者 兵庫県立考古博物館 企画調整班 深江英憲

調査面積 12㎡

5. 第1次本発掘調査

第1次・第2次確認調査の結果を受け、平成18年1月19日から3月24日の間に実施した。2次に渡る確認調査では1-2・1-3G周辺の地区と1-5・1-6G周辺の地区に遺構が検出されているため、前の地区をA地区、後の地区をB地区と呼称して調査を実施した。

調査は平成18年1月19日、A地区側から開始し、耕作土・床土を機械力で除去した。この結果、A地区西半では遺構面が露呈し、中央の谷部から東側では包含層の堆積が認められたため、人力によりこれを掘削、遺物の回収に努めた。包含層掘削後は遺構の検出を行い、人力で遺構掘削を行った。

A地区の機械掘削終了後、機械をB地区に移動して機械掘削を実施した。B地区では耕作土・床土を除去したところで遺構検出面が露呈し、包含層はほとんど認められなかった。

両地区の遺構掘削がほぼ終了した3月7日にはヘリコプターにより航空写真測量を行うとともに、スカイマスターにより遺跡全体の写真撮影を行った。

写真撮影終了後は各遺構の断ち割り作業を行って遺構の検認に努め、最終的に調査が終了したのは年度末も近い3月24日であった。

なお、全体図の作成は航空写真を図化する方法で行い、詳細図や断面図の作成は人力で実施した。

調査担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 吉識雅仁 池田征弘

調査面積 2,235㎡

6. 第2次本発掘調査

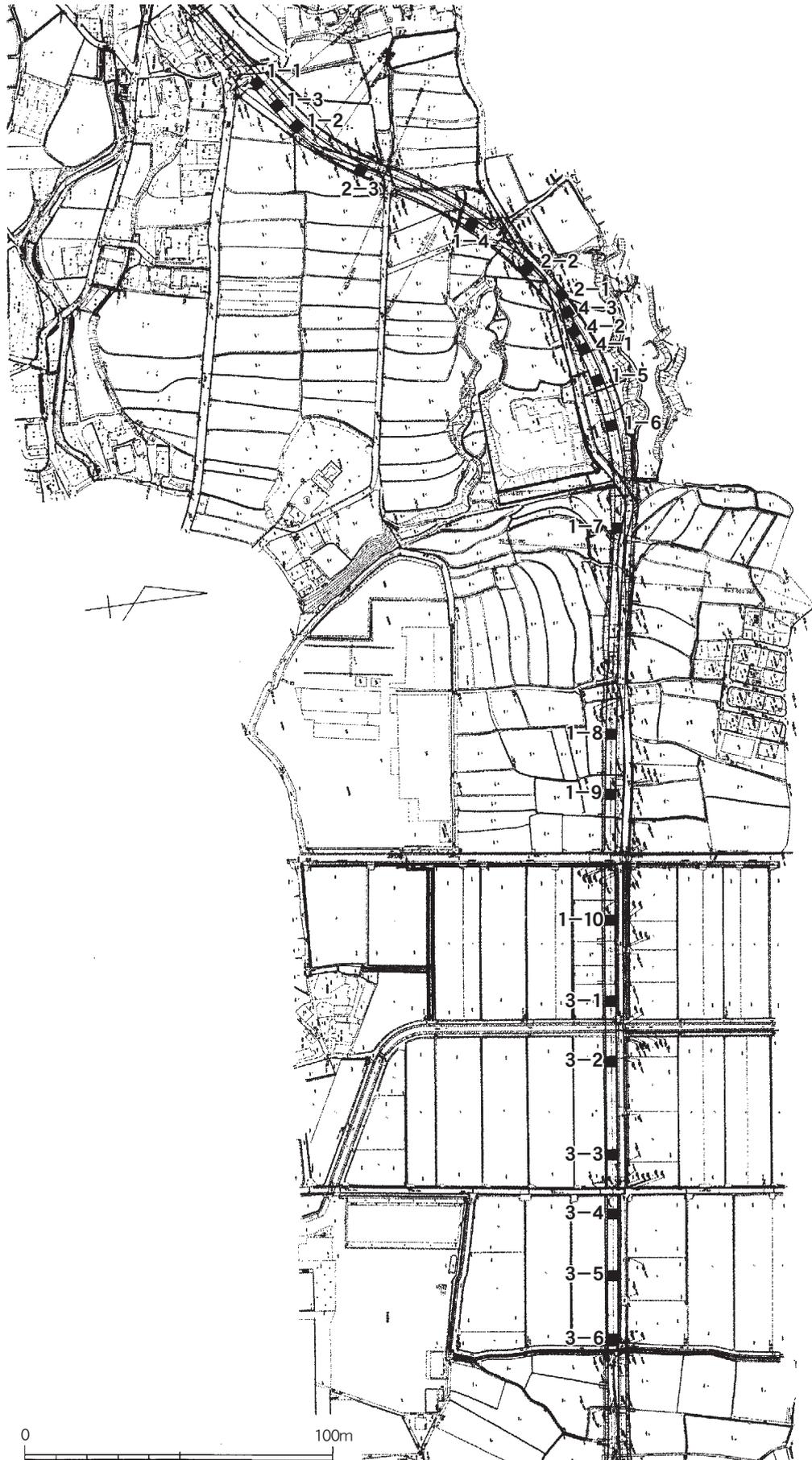
第2次・第4次の確認調査結果を受けて、C地区として実施した調査である。位置的にはB地区の西側に当たり、本来はB地区遺構群と連続していたと考えられるが、水田化の削平により、完全に切り離された状態となっている。

調査は平成20年6月18日から開始し、まず機械力により耕作土と床土を除去した。この作業で大半の地区では遺構検出面が露呈したが、調査区の東端では僅かに包含層が確認されたため、これを人力で掘削して遺物を回収した。

遺構検出作業は6月23日から人力により行い、検出した遺構を掘削した後、7月2日にはスカイマスターを使用して写真撮影を行った。写真撮影終了後、人力により遺構図及び全体図を作成し、各遺構の断ち割り作業を行って、平成20年7月17日に調査を終了した。

調査担当者 兵庫県立考古博物館 調査第1班 吉識雅仁 山田清朝

調査面積 489㎡



第1図 確認調査グリッド配置図

第3節 歴史的環境

遺跡が所在する宍粟市山崎町は兵庫県の中西部、揖保川の中流域に位置し、周囲を山地に囲まれた山崎盆地内に位置する。盆地内の遺跡は大まかには山麓の段丘上、沖積地内の自然堤防等の微高地上に位置しており、その多くが本遺跡から北側の盆地幅が最も広がった地域に分布している。

本遺跡は盆地の南西隅部の段丘上に位置し、弥生時代中・後期、平安時代、中世の遺構や遺物が出土していることから、ここでは盆地内の弥生時代以降の遺跡を概観する。

盆地内においては今のところ弥生時代前期の遺跡は知られていない。盆地内に集落等が営まれ始めるのは弥生時代中期中頃以降であり、本遺跡をはじめ、鹿沢遺跡群、神谷戒現行遺跡、田井遺跡がある。鹿沢遺跡群は後の鹿沢城（山崎城）の下層遺跡であり、これまでに竪穴住居跡、溝、土坑等が調査されている。神谷戒現行遺跡では竪穴住居跡と方形周溝墓かと思われる溝が検出されている。田井遺跡では中期後半の銅鐸形土製品が出土している。本遺跡ではA地区から神社方向に向かう市道建設に伴う調査で竪穴住居跡が検出され、弥生第Ⅲ様式の土器が出土している。この他、本遺跡北側の段丘上に位置する金谷第1～8散布地では磨製石斧などが採集されている。

弥生時代後期の遺跡としては川戸遺跡、河東南遺跡、生谷西垣内遺跡、田井遺跡で、竪穴住居跡が確認されている。他に揖保川の形成した自然堤防上に位置する船元第1散布地や矢原遺跡で、後期の鉢形土器や壺形土器の出土が知られている。

この他、盆地東端の山崎町須賀沢と、盆地西端の山崎町青木では銅鐸が出土している。須賀沢銅鐸は突線紐袈裟文銅鐸、青木銅鐸は外縁付紐4区袈裟文銅鐸である。

古墳時代には前方後円墳や大型円墳が築かれることはなく、小規模な円墳のみが築造され推移している。盆地内の前期古墳は知られていないが、本遺跡対岸の山の尾根筋に築かれた川戸山古墳群は前期以前に遡る可能性があると言われている。また確実に中期に属する古墳も知られていないが、本遺跡北方の金谷山部古墳は、径20mの円墳で、中期に遡る可能性のある古墳とされている。

横穴式石室を採用した後期古墳は地域的なまとまりを持ち、群集するものが多い。下流側からみれば、山崎町宇原では谷周囲の山裾に14基で構成される宇原古墳群が存在している。この地域は谷口を南流する揖保川によって塞がれ、谷内部には揖保川の堆積物により沖積地が形成されて、沖積地のほぼ全域が宇原散布地として、須恵器や土師器の散布が知られている。

本遺跡周囲の山崎町上比地・金谷では段丘の入り込んだ山裾に、上比地1号墳と金谷古墳群が存在している。金谷古墳群は4基の古墳で構成される。本遺跡では古墳時代後期の遺構や遺物が出土しており、両古墳群と関連する可能性がある。

山崎町街の西側の谷口に5基の横穴式石室の古墳で構成される春安古墳群が、谷を入った山裾には7基からなる加生古墳群が、山崎町街の北の谷口には三津古墳群や上寺古墳群、横須古墳が存在している。揖保川左岸側の山崎町中・神谷等の平野部の南には岸田・矢原古墳群が、町街東側の谷口には須賀沢古墳群が所在している。

古墳時代の集落跡は本遺跡の他、川戸遺跡、神谷戒現行遺跡、河東南遺跡で、竪穴住居跡等が確認されている。

律令期に入ると山崎盆地は宍粟郡に編入される。宍粟郡は孝徳期に揖保郡を分けて置かれた郡とされ、郡内には比治、高家、柏野、安師、石作、雲箇、御方の7里が組み込まれている。この内、山崎盆地内

遺跡番号	遺跡の名称	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡番号	遺跡の名称
430317	香山平見散布地	530134	高下第2散布地	530210	川戸条里
430318	家氏古墳	530135	高下第3散布地	530211	宇原条里
430319	家氏経塚遺跡	530136	高下第4散布地	530212	須賀沢第1散布地
430320	香山家氏散布地	530137	高下第5散布地	530213	須賀沢第2散布地
430346	福栖大日南庵寺	530138	春安第2散布地	530214	春安第3散布地
430347	篠首十石庵寺	530147	河東南遺跡	530215	春安第4散布地
430348	柏原城	530148	神谷山田遺跡	530216	段第1散布地
430367	平見古墳	530150	三津1号墳	530217	段第2散布地
430368	家氏池東古墳	530153	宇野遺跡	530218	段第3散布地
430369	篠首・中村古墳	530154	下町遺跡	530219	段第4散布地
430370	香山・北山墳丘墓	530155	生谷西垣内遺跡	530220	段第5散布地
530042	矢原1号墳	530156	生谷古墳	530221	中井第1散布地
530046	矢原5号墳	530157	門前1号墳	530222	中井第2散布地
530047	中1号墳	530158	鹿沢松原町遺跡	530223	下広瀬第1散布地
530048	高所古墳	530159	鹿沢本多町遺跡2	530224	船元第1散布地
530050	河東条里	530160	鹿沢城跡(御勘定所周辺)	530225	野第1散布地
530077	矢原第1散布地	530161	鹿沢城跡(武家屋敷跡)	530226	千本屋第1散布地
530078	矢原第2散布地	530162	鹿沢城跡(外堀付近)	530227	千本屋第2散布地
530079	神谷第1散布地	530163	鹿沢城跡(内堀付近)	530228	千本屋第3散布地
530080	神谷戒現行遺跡	530164	鹿沢城跡(町家外堀付近)	530229	金谷第1散布地
530081	神谷第3散布地	530165	聖山城跡	530230	金谷第2散布地
530082	神谷第4散布地	530166	出石第1散布地	530231	金谷第3散布地
530083	神谷第5散布地	530167	須賀沢3号墳	530232	金谷第4散布地
530085	中第1散布地	530168	春安第1散布地	530233	金谷第5散布地
530086	中第2散布地	530169	須賀沢1号墳	530234	金谷第6散布地
530087	中第3散布地	530170	須賀沢2号墳	530235	金谷第7散布地
530088	高所第1散布地	530171	須賀沢4号墳	530236	金谷第8散布地
530089	高所第2散布地	530172	春安1号墳	530237	御名第1散布地
530090	高所第3散布地	530173	春安2号墳	530238	上比地第1散布地
530091	高所第4散布地	530174	春安3号墳	530239	上比地第2散布地
530096	宇野古墳	530175	春安4号墳	530240	上比地第3散布地
530097	生谷1号墳	530176	春安5号墳	530241	上比地第4散布地
530098	三津1号墳	530177	段1号墳	530242	中比地第1散布地
530099	横須古墳	530178	金谷山部古墳	530243	中比地第2散布地
530100	上寺1号墳	530179	金谷1号墳	530244	中比地第3散布地
530101	上寺2号墳	530180	金谷2号墳	530245	中比地第4散布地
530102	加生1号墳	530181	金谷3号墳	530246	川戸遺跡
530103	加生2号墳	530182	金谷4号墳	530247	川戸第2散布地
530104	加生3号墳	530183	上比地1号墳	530248	川戸第3散布地
530105	加生4号墳	530184	川戸山1号墳	530249	川戸第4散布地
530106	加生5号墳	530185	川戸山2号墳	530250	川戸第5散布地
530107	加生6号墳	530186	川戸山3号墳	530251	川戸第6散布地
530108	加生7号墳	530187	川戸山4号墳	530252	宇原第1散布地
530110	下三津製鉄址	530188	川戸山5号墳	530253	宇原第2散布地
530112	篠ノ丸城址	530189	川戸山6号墳	530254	宇原第3散布地
530113	鹿沢城跡	530190	宇原南1号墳	530255	宇原第4散布地
530114	三津第1散布地	530191	宇原1号墳	530256	宇原第5散布地
530115	三津第2散布地	530192	宇原2号墳	530257	宇原第6散布地
530116	三津第3散布地	530193	宇原3号墳	530258	宇原第7散布地
530117	三津第4散布地	530194	宇原4号墳	530259	宇原第8散布地
530118	下町第1散布地	530195	宇原5号墳	530260	山田第1散布地
530119	下町第2散布地	530196	宇原6号墳	530261	中広瀬第1散布地
530120	横須第1散布地	530197	宇原7号墳	530262	鹿沢本多町遺跡1
530121	生谷第1散布地	530198	宇原8号墳	530263	鹿沢城跡(本丸跡周辺)
530122	生谷第2散布地	530199	宇原9号墳	530264	鹿沢城跡(西御屋敷跡)
530123	上寺第1散布地	530200	宇原10号墳	530265	鹿沢城跡(裏御門跡周辺)
530124	上寺第2散布地	530201	宇原11号墳	530266	鹿沢城跡(鶴木門跡周辺)
530125	上寺第3散布地	530202	宇原12号墳	530267	播磨千本屋庵寺跡
530126	元山崎第1散布地	530203	宇原13号墳	530268	金谷蟻留筋遺跡
530127	矢原遺跡	530204	宇原14号墳	530271	三津2号墳
530128	門前・加生第1散布地	530205	柏原城跡	530272	三津3号墳
530129	門前・加生第2散布地	530206	長谷山遊鶴寺跡	530273	三津4号墳
530130	木谷第1散布地	530207	宇原山頂寺院址	530274	三津5号墳
530131	市場第1散布地	530208	中井条里		
530132	市場第2散布地	530209	比地条里		

に比定されているのは、比治と高家、それに安師の3里である。比治里内には宇波良、比良美、川音、庭音村の記載があることから、地名の残る山崎町上比地・中比地・下比地を中心とし、対岸の川戸、宇原、それに新宮町平見を加えた範囲が比定されている。高家里内には塩村の一村しか記載がなく、遺称地もないが、山崎町史では現在の町街から北側が比定されている。石作里は山崎町五十波から一宮町南部を含む地域に、安師里は基本的には山崎盆地を東にでた姫路市安富町安志が遺称地とされるが、山崎町須賀沢が含まれるという考え方も一部にある。

平安時代に編纂された「倭名類聚抄」には比地、高屋、安志の郷があり、これらの郷は前代の里から引き続き存続している。

現在、宍粟郡内では郡衙等の官衙遺跡の所在は知られていないが、寺院跡や瓦の出土が知られている。播磨は里単位に寺院が建立されたと言われるほどに、仏教文化が積極的に受け入れられ花開いた地域である。しかし、播磨内陸部では里単位と言えるほどの建立はみられず、山崎盆地においては千本屋廃寺のみが白鳳期の寺院跡として知られている。この寺が比治里、高家里のどちらに入るかは定かではない。他に、山崎町門前遺跡でも白鳳期の瓦が出土しているが、その性格は明らかにされていない。

一方、この時期、宍粟郡では「山部」を称する人名がみられる。風土記には比治里の里長には山部比治、安師里の里長には山部三馬が記されているほか、藤原宮や平城宮出土木簡には柏野里に山部子人・山部人足、山守里には山部赤人・山部加之ツ支等が見え、宍粟郡内で山部が活躍していたことが窺える。

律令体制による地方支配が弱りを見せ始めると各地には荘園が成立していく。平安時代の終わりには山崎盆地内でも安志荘や石作荘等が成立していたとされている。

鎌倉時代以降、高家荘・柏野荘等が成立して、盆地内はほぼ荘園化される。比地については比地荘が成立していたと言われているが、詳細は不明である。

また、中世前期頃には山岳寺院が建立され、比地の谷を奥深く入った遺跡の西方の山頂付近には長谷山遊鶴寺が建立されている。 (吉識)

参考文献

- 山崎町史編集委員会『山崎町史』1977
- 山崎町教育委員会『千本屋廃寺』1982
- 山崎町教育委員会『三津群集墳』1987
- 兵庫県教育委員会『川戸遺跡』2007

第2章 A地区の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 概要

A地区は北東側の国見山から南側へ延びる丘陵の裾近く、南東側の谷の口付近に位置している。谷に沿って上比地の集落が位置し、調査区周囲のなだらかな緩斜面は水田に利用されている。

調査区は北東から南西に向けて長細く、ほぼ標高98.0mの等高線に沿って設定されている。調査区の西部は大きく削平されていることから遺構はほとんど残存せず、東端は東へ下がる斜面で、遺構はほとんど存在しない。主に遺構は中央部の谷の周辺及びその東側で検出された。

遺構は主に弥生時代～古墳時代前半、奈良・平安時代のものが検出された。弥生時代～古墳時代前半の遺構は調査区中央部で竪穴住居跡4棟が検出された。2棟が円形(SH02・04)、1棟が長方形(SH03)、1棟が方形(SH01)である。

奈良・平安時代の遺構には掘立柱建物跡(SB01・02)、柵列(SA01)、土坑、溝などがある。中央部の谷は水田として利用され、幾度かの改修がなされている。谷の東側で掘立柱建物跡、柵列、溝などの遺構が検出された。谷の西側は大きく削平されているため、わずかに落ち込み(SX01)、土坑などが検出されたのみである。

2. 弥生時代～古墳時代前半の遺構

SH01 (図版3 写真図版4)

谷のすぐ西側で検出された竪穴住居跡である。西側は調査区外で、東側は谷のSD01に切られて残存していない。遺構面もかなり削平を受けているとみられるが、かろうじて床面は残存しているようである。平面形は方形と考えられ、5.6m×5.1mの規模と推定される。主柱穴は3本検出され、深さは55～40cmである。4本柱と推測される。周壁溝は南西側のみ検出でき、幅15cm、深さ5cmである。床面中央とやや南側には浅い土坑が存在する。中央の土坑(SK03)は長さ75cm、幅55cmの不整形で、深さは10cmである。坑内に焼土が認められる。南側の土坑(SK01)は長径60cm、短径50cmの楕円形で、深さは8cmである。坑内と土坑の縁に焼土が認められる。床面付近の埋土から高坏(1)が出土している。

SH02 (図版3 写真図版5)

谷の東側で検出された竪穴住居跡である。SH03の南側に位置し、SB02、SD10・11に切られる。平面形は直径5.2mの円形で、検出面からの深さは37cmである。主柱穴は4本で、深さは60～40cmである。南壁側にのみ幅30～40cm、高さ12cmの屋内高床部を有している。周壁溝はほぼ全周しているが、屋内高床部のみ一部断続している。中央土坑は10型で、1土坑は長径83cm、短径58cmの平面楕円形で、深さは12cmである。周囲には床面の地山と同様の黄色土を盛り上げた土堤が廻るが、0土坑との接合部では途切れている。埋土には炭・焼土が多く含まれている。0土坑は2段掘りで、上段は平面が長さ50cm、幅40cmの長方形で、深さ13cmである。土坑の南縁に2箇所小さいピットが存在している。下段は平面が長径30cm、短径25cmの楕円形で、深さは検出面から43cmである。住居の北側に沿って壁溝状の溝が存在している。中央土坑の北側と西側の床面には石臼(S2)・台石(S3)が置かれており、西側の石臼の周

甕は焼けている。埋土上層からは壺・甕・高坏・器台等の土器(2~27)と刀子(F 1)が出土している。

SH03 (図版4 写真図版6)

谷の東側で検出された竪穴住居跡である。SH02の北側に位置し、SD15に切られ、SH04を切る。平面形は胴張りの長方形で、2回の建て替えが行われている。遺構面は削平されており、床面がかろうじて残存している。当初は長さ3.55m、幅3.4mで、P1とP3を支柱穴とし、P2東側の焼土が炉の痕跡と考えられる。屋内に土坑は認められない。1回目の建て替えはほぼ同じ位置で行われ、長さのみ3.7mとわずかに大きくなっている。2回目の建て替えは西側に大きく拡張している。長さ4.6m、幅3.9mで、P1とP2を支柱穴としている。床面の中央は長さ1.7m、幅1.25m、深さ10cmの平面長方形に窪められ、その中央に直径35cm、深さ10cmの円形土坑が設けられている。円形土坑内と北側は強く焼けている。南壁中央には土坑が設けられている。長径67cm、短径56cmの平面楕円形で、深さは37cmである。床面西部には当初・1回目建て替え時の周壁溝を覆って貼り床がなされている。床面付近の埋土から甕・碗等の土器(28~33)が出土している。

SH04 (図版4 写真図版6)

谷の東側で検出された竪穴住居跡である。SH03とほぼ同じ位置で検出された。SH03・SD12・15に切られ、西北側1/2は調査区外である。床面は削平され、他の遺構に切られた部分も多いため、残存状況は悪い。周壁溝を検出できた部分は少ないが、平面形は直径6.3mの円形と考えられる。検出できた支柱穴は2本である。深さは60~43cmである。配置からすると5本柱である可能性が高い。中央土坑は10型で、1土坑は長さ115cm、幅45cmの平面楕円形で、深さは10cmである。埋土には炭が多く含まれていた。0土坑は長さ70cm以上、幅65cm以上の平面楕円形で、深さは30cmである。0土坑から甕(34)が出土している。

P20

谷の東側に位置するピットである。SB02のP51に切られる。直径26cm、深さ43cmである。埋土から甕(35)が出土している。

P29

谷の東側に位置するピットである。SD15に切られると思われる。直径35cm、深さ46cmである。埋土から甕(36)が出土している。

3. 奈良・平安時代の遺構

SB01 (図版5 写真図版7)

谷の東側に位置する側柱の掘立柱建物跡である。SD13を切っている。規模は桁行3間(5.4m)以上、梁行2間(4.2m)である。建物の方位はN10°Eである。柱の抜き取り穴に石を入れたものが多い。柱穴より出土した土器は土師器の細片のみである。

SB02 (図版5 写真図版8)

谷の東側に位置する側柱の掘立柱建物跡である。SH02を切り、規模は桁行3間(6.7m)、梁行2間(4.5m)である。桁行の柱間は中央が広く(3.1m)、両脇が狭い(1.8m)。建物の方位はN10°Eである。柱穴より出土した土器は弥生土器・土師器の細片のみである。

SA01 (図版6 写真図版7)

谷の東側に位置する側柱の柵列である。SB01の東側に位置している。柱穴を4本検出した(延長11

m)。S D12・13部分に柱穴が存在したとすれば、5間の柵列と考えられる。P 27から須恵器碗(37)が出土している。

P 2 3

谷の東側に位置するピットである。S H02の北側に位置している。直径33cm、深さ26cmである。埋土から土師器甕(38)が出土している。

P 2 6

谷の東側に位置するピットである。S H03の南東隅付近に位置し、S H03を切っていると思われる。直径28cm、深さ12cmである。埋土から須恵器杯B(39)が出土している。

P 5 0

谷の東側に位置するピットである。S A01の南端付近に位置している。直径42cm、深さ11cmである。埋土から土師器甕(40)が出土している。

S K 0 3 (図版6 写真図版8)

谷の東側に位置する土坑である。S D07に切られている。直径85cmの平面円形で、深さは8cmである。底部には焼けた部分があり、その周りには直径70cmの範囲で炭化物を多く含んだ土が広がっていた。埋土からは土師器の細片が出土したのみである。

S K 0 6 (図版6 写真図版8)

谷の西側に位置する土坑である。長径95cm、短径85cmの平面楕円形で、深さは25cmである。埋土からは須恵器鍋(41)が出土している。

S K 0 8 (図版6 写真図版8)

谷の東側に位置する土坑である。南東部は擁壁の掘方に切られている。長径125cmの平面円形と考えられ、深さは32cmである。埋土からは須恵器稜碗(42)が出土している。

S X 0 1 (図版9 写真図版8)

調査区の南端で検出された落ち込みである。南側に約40cmの段差をもって落ち込んでいる。段の際には径20cm以下の礫が堆積した部分があり、中央の谷部のS D01・04と類似している。埋土からは須恵器碗・杯A・杯B・皿・壺、土師器杯、土錘など(43～51)が出土している。

谷部溝群 (図版7 写真図版9)

中央部の谷では南北方向の溝S D01、東西方向の溝S D04に挟まれた範囲が約40cmの段差をもって地形が下がっている。その段差の縁に沿って、内側からS D17、S D02、S D03・05、S D01・04と4重に溝が認められる。S D17は最も内側に位置する溝で残存状況は良くない。深さは5cmである。S D02は幅1.1m、深さ15cmである。S D03・05の南北方向の部分はS D01と重複している。幅1.2m、深さ8cmである。S D01は南北方向の溝で、幅1.5m、深さ5cmである。北端には径25cm以下の礫が集められていた。S D04は東西方向の溝で、他の矩形の溝とは異なり西側へも続いている。幅1.8m、深さ5cmである。径25cm以下の礫を多く含む土で埋められている。谷の南部ではS D01に直交して2列の柱列が検出されている。柱列不均一な2間で、長さは4.5m、柱列間の幅1.4mである。谷上への昇降施設と思われる。S D01・04から須恵器杯B・皿・杯A・碗・壺、土師器杯・皿・甕、鉄滓(52～59・62～74・F10～13)など、S D02からは須恵器杯A(60)、土師器杯(61)、鉄塊(F8)が出土している。

S D 0 6 (図版8 写真図版10)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。北側は調査区外で、南側は谷部に切られている。幅1.4

m、深さ45cmである。埋土から須恵器蓋(75)、製塩土器(76)が出土している。

SD07 (図版8 写真図版10)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。北側は削平により途切れており、南側は谷部に切られている。幅2.1m、深さ15cmである。埋土から製塩土器(77)が出土している。

SD08 (図版8)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。SD07との切り合いははっきりしない。幅50cm、深さ10cmである。埋土から土師器細片が出土している。

SD09 (図版8 写真図版10)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。SD11に切られている。幅57cm、深さ10cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SD10 (図版8 写真図版10)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。SH02を切り、SD11に切られている。幅50cm、深さ10cmである。溝の方向からSD15と一連の溝の可能性はある。遺構に伴って遺物は出土していない。

SD11 (図版8 写真図版10)

谷の東側で検出された南北方向からかなり東へ振った溝である。SH02・SD10・11を切っている。幅35cm、深さ10cmである。埋土から須恵器碗(78)が出土している。

SD15 (図版8)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。SH03・SD12を切り、SD13も切っていると思われる。幅70cm、深さ8cmである。溝の方向からSD10と一連の溝の可能性はある。埋土から土師器細片が出土している。

SD16 (図版8)

谷の東側で検出された南北方向の溝である。北側は調査区外で、南側はSD04に切られている。幅1.1m、深さ30cmである。埋土から須恵器底部(84)が出土している。

SD12 (図版9 写真図版11)

谷の東側で検出された東西方向の溝である。幅1.1m、深さ50cmである。埋土から土師器甕(79)が出土している。

SD13 (図版9 写真図版11)

谷の東側で検出された東西方向の溝である。幅2.1m、深さ80cmで、深くV字に切れ込んでいる。底には径20cm以下の礫が堆積していた。埋土から須恵器壺(80)、土師器甕(81~83)が出土している。

SD14 (図版9 写真図版11)

谷の東側で検出された東西方向の溝である。幅100~25cm、深さ10cmである。遺構に伴う遺物は出土していない。
(池田)

第2節 遺物

1. 弥生時代～古墳時代中期の土器

SH01 (図版10)

高坏(1)が1個体出土している。磨滅のため、内外面の調整は観察できない。口径15.9cm、残存高4.5cm。

SH02 (図版10 写真図版12・13)

壺・甕・鉢・高坏・器台・蓋の各器種が出土している。

壺は、広口壺(2～4)と底部～体部片(5～7)が出土している。広口壺は口縁部を中心に残存するが、いずれも内外面とも磨滅のため、調整は観察できない。2は、口径16.2cm・残存高4.2cm。3は、口径15.7cm・残存高3.3cm。4は、口径13.4cm・残存高5.6cm。底部を中心に残存する個体は、いずれも外面がハケ調整により仕上げられている。内面は、5がナデ調整、6がヘラ削りにより仕上げられ、7は磨滅のため観察できない。

甕は、底部片も含めて7個体(8～14)出土している。基本的には、外面ハケ調整を基本とするもので、いわゆるV様式系の甕は出土していない。8は、形態的に壺に近いものであるが、体部内面は縦方向のナデ調整により仕上げられている。11については近畿北部系の甕で、口縁部を上方につまみあげ、外面に擬凹線が施されている。体部外面は叩き整形後ハケ調整、内面はヘラ削りにより仕上げられている。口径14.0cm、器高19.5cm。この他、9と10の体部内面にはヘラ削り痕が認められる。底部の12～14は、内面がいずれもナデ調整により仕上げられている。

鉢は、4個体(15～18)出土している。いずれもナデ調整を基本に仕上げられている。このなかで、16については、外面が叩き整形により仕上げられている。底部については、上下方向から穿孔が試みられているが、貫通していない。

高坏は、有稜高坏が2個体(19・20)出土している。いずれも口縁部を中心に残存するもので、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。外面については観察できない。口径は、19が29.0cm、20が25.0cmである。21は、高坏の脚部と考えられるが、調整は観察できない。底径15.2cm。この他、25と26の脚部についても、高坏の一部の可能性が高い。

器台は、3個体(22～24)出土している。22は筒部の上半で、2段にわたり円孔(径1.2cm)があげられている。内面は、ナデ調整とハケ調整により仕上げられている。23と24は、受け部を中心に残存する。両個体とも調整は観察できないが、24の口縁端部外面には擬凹線の痕跡がわずかに観察できる。口径は、23が33.6cm、24が25.2cmである。

蓋は27の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

SH03 (図版11 写真図版13)

甕と椀が出土している。甕は、5個体出土しており、28～30はV様式系甕に分類されるものである。33については、前者より新しい傾向が認められる。32は椀で、胎土の特徴から当該期に位置付けられるものである。口径は9.4cm、器高は2.5cmである。

SH04 (図版11)

V様式系の甕1個体(34)が出土している。口径は13.5cmである。

P20 (図版11)

甕(35)の口縁部が出土している。内外面とも磨滅しているが、庄内式に近い形態的特徴を有する。

P 2 9 (図版11 写真図版13)

V様式系の底部片(36)が出土している。底部も叩き整形が施されている。(山田)

2. 古墳時代後期～中世の土器

S A 0 1 (図版11 写真図版14)

37は須恵器碗である。口縁部は体部よりやや屈曲して外反している。P27から出土した。

P 2 3 (図版11 写真図版14)

38は土師器甕である。口縁部は頸部から弧状に外反し、端部に丸味をもっている。

P 2 6 (図版11 写真図版14)

39は須恵器杯Bの底部である。底部はヘラ切りである。底径は9.4cmである。

P 5 0 (図版11 写真図版14)

40は土師器甕である。体部は直立して立ち上がる。口縁部はくの字に開き、端部内縁がつまみ上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はナデが施されている。体部内面には炭化物が付着している。口径は30cmである。

S K 0 6 (図版11 写真図版14)

41は須恵器鍋である。口縁部は受け口状に屈曲する。口縁部内外面はヨコナデが施されている。

S K 0 8 (図版11 写真図版14)

42は須恵器稜碗と考えられる。口縁部内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。

S X 0 1 (図版11 写真図版13・15)

43・44は須恵器杯Bである。43は器高が高く、口縁部が大きく開く。口径14.1cm、底径6.8cm、器高6.1cmである。44は器高が低く、やや厚ぼったい。底部はヘラ切りである。口径12.4cm、底径7.7cm、器高4.4cmである。45・46は須恵器杯Aである。底部はヘラ切りの後、粗くナデが施されている。底径は45が7.3cm、46が7.5cmである。47は須恵器台付皿である。底部は平高台で、回転糸切りである。口径14.0cm、器高2.6cm、底径6.4cmである。48は須恵器壺である。体部は球形で、底部は輪高台である。体部は内外面とも回転ナデ、底部は軽く回転ヘラケズリが施されている。底径は6.0cmである。49は土師器杯である。口縁部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデが施されている。底部外面には指頭痕が付いている。口径12.8cm、器高3.3cmである。50は土師器底部で、高い輪高台をもっている。底部内外面はナデ、高台内外面はヨコナデが施されている。底径9.0cmである。58のような皿の可能性が高い。51は土師質土錘である。重量は3.5gである。

S D 0 1 (図版11 写真図版14・15)

52・53は須恵器杯Bである。体部がやや開き気味であるが、底径は大きい。底部は回転ヘラ切りである。52は器高が高く、口径14.6cm、底径9.3cm、器高6.0cmである。53は器高が低く、口径13.1cm、底径7.6cm、器高4.7cmである。55は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。口径は13.5cm、底径は8.1cm、器高は3.9cmである。54・56は須恵器底部である。いずれも台付皿の可能性が高い。54は輪高台で、56は回転糸切りの平高台である。56は底径5.8cmである。57は土師器杯である。表面は磨滅している。58は土師器台付皿である。高い輪高台をもつ。表面は磨滅している。底径は6.4cmである。59は土師器底部である。高い輪高台をもち、表面は磨滅している。底径は8.7cmである。

SD02 (図版11 写真図版15)

60は須恵器杯Aである。底部はヘラ切りである。61は土師器杯である。表面は摩滅している。

SD04 (図版11 写真図版15)

62は須恵器台付皿である。底部は回転糸切りの平高台である。63は須恵器短頸壺である。64・65は土師器杯である。表面は摩滅しており、65はわずかに指頭痕の凹みのみがみられる。64は口径12.0cm、器高3.2cm、65は口径12.8cm、器高3.3cmである。

SD01・04 (図版12 写真図版14・16)

SD01・04の合流点付近で出土したものである。66～68は須恵器碗である。66は体部に段状の沈線をもち、口縁部はわずかに外反している。67・68は回転糸切りの平高台である。67は底径7.1cm、68は底径7.2cmである。69は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りである。底径は8.0cmである。70は須恵器台付皿と考えられる。口縁部が外反する。71・72は須恵器壺である。底部に輪高台をもつ。71は底径7.0cmである。73は土師器底部である。高い輪高台をもつ。底部内面及び高台部内外面は回転ナデが施され、底部外面は回転ヘラ切りである。底径は10.1cmである。74は土師器甕である。口縁部は短く、くの字に折れ曲がる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデが施されている。

SD06 (図版12 写真図版16)

75は須恵器杯B蓋である。外面は回転ヘラ切り後回転ナデ、内面は回転ナデが施されている。76は土師器製塩土器である。内外面ともナデが施されている。径3mm以下の白色砂粒が顕著に含まれている。

SD07 (図版12 写真図版16)

77は土師器製塩土器である。内外面ともナデが施されている。白色砂粒が顕著に含まれている。

SD11 (図版12 写真図版16)

78は須恵器碗である。底部は低い平高台で、回転糸切りである。

SD12 (図版12 写真図版16)

79は土師器甕である。口縁部は短く、くの字に折れ、端部内縁を上方につまみ上げている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面にはヨコハケが施されている。

SD13 (図版12 写真図版14・16)

80は須恵器台付長頸壺と考えられる。肩部が張って稜をもち、底部には輪高台をもっている。内面は回転ナデ、体部外面上位及び体部外面下位は回転ヘラケズリ、体部外面中位は回転ナデ、底部外面には回転ヘラ切り後ナデが施されている。腹径17.1cm、底径10.8cmである。81～83は土師器甕である。81は口縁部が体部から湾曲して外反し、端部は内側に巻き込んだようになっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はタテハケ後ヘラケズリが施されている。82は口縁部が体部から屈曲して大きく外反している。表面は摩滅している。83は口縁部が体部からくの字に屈曲する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。体部外面は摩滅している。

SD16 (図版12 写真図版16)

84は須恵器底部である。底部は平高台で、回転糸切りである。底径は7.1cmである。

包含層 (図版12 写真図版17)

85・86は須恵器杯B蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。85は口縁部端部が屈曲する。87は須恵器皿Aである。底部は回転ヘラケズリが施されている。88・89は須恵器碗である。底部はしっかり突出した平高台をもち、回転糸切りである。器高は88が4.2cm、89が7.3cmである。90は土師

器甕である。口縁部は体部からくの字に屈曲し、端部は面をもっている。体部外面にはタテハケが施されている。91は須恵器鍋である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケが施されている。92は須恵器羽釜である。外面はヨコナデ、内面はヨコハケが施されている。93・94は土師器製塩土器である。内外面ともナデが施されている。93は径1mm以下の白色砂粒、94は径2mm以下の白色・石英砂粒が顕著に含まれている。95は黒色土器碗である。内面は炭素が吸着し、内面外面ともヘラミガキが施されている。96は龍泉窯系青磁無文碗である。

3. 金属製品 (図版13 写真図版17・18)

金属製品はSH02出土の刀子(F1)以外は谷部溝群の溝や直上の包含層(図版7:D断面の5層)から出土したものである。鉄釘、火打金以外にも鉄塊、鉄滓などが出土しており、近辺で金属器生産が行われたと考えられる。

F1は刀子である。SH02の埋土から出土した。関は両関で、刃部の残存長8.0cmである。

F2～F6は鉄釘である。谷部溝群直上の包含層から出土した。断面が正方形のもの(F2・3・6)と長方形のもの(F4・5)がある。

F7は火打金の反りあがる端部と考えられる。谷部溝群直上の包含層から出土した。下端の厚さは6mmである。

F8・9は鉄塊である。F8は厚さ9mmの餅状で、重量20.1gである。SD02から出土した。F9は不整形の塊状で、重量14.8gである。谷部溝群直上の包含層から出土した。

F10～14は鉄滓である。F10は精錬鍛冶滓で、上面は径1mm以下の気泡が見られ、砂粒が付着している。下部は飴状である。重量は235.4gである。F11～14は鍛錬鍛冶滓である。F11は碗形の滓で、全体的に径2mm以下の気泡が見られる。重量は117.1gである。F12は上面が飴状で、下部は気泡が吹き出しささくれだっている。重量は40.2gである。F13は全面に気泡が吹き出し、表面はささくれだっている。重量は30.9gである。F14は上面に気泡が吹き出している。底部には炉床部の粘土が残存している。重量は29.2gである。(池田)

4. 石製品 (図版14 写真図版18 巻頭カラー図版12)

S1は安山岩質の石材を用いた磨り石で、やや扁平気味な球形を呈する。表裏両側にやや平滑な面をなすが、一方の面(図正面側)がより磨耗している。また、図正面下端部分にも平坦面を形成し、わずかに磨耗している。周囲もかろうじて帯状に平滑化がなされ、その範囲にわずかながら磨耗が観察され、使用されている可能性がある。SD01より出土した。

S2は石英斑岩を用いた石臼で、SH02床面からの出土である。図正面の平坦面において、中央付近よりやや上寄りを境に上下に2つの磨面が区別される。このうち下方の磨面のやや下寄りにごく浅いくぼみ丸く存在する。この浅いくぼみ付近に赤色顔料の付着が認められ、肉眼での発色具合からの判断ではベンガラが付着したものと思われる。一方、上方の磨面もよく磨耗するが、全体がゆるい凸面状となり、くぼみや肉眼で識別する限りでの赤色顔料の付着は認められない。なお、図左側の面も全体的に磨耗しており、くぼみ部分もよく磨耗するが、肉眼では明らかな赤色範囲は認められない。

S3は石英閃緑岩を用いた台石で、約半分を欠損すると思われる。S2と同じSH02床面からの出土である。表裏両面に平坦面を持つが、特に図正面側の磨耗が顕著でよく使用されている。(上田)

第3章 B地区の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 概要

遺跡の北東隅に当たる調査区で、沖積地に面した段丘縁に位置し、調査区の北側には細い開析谷が東西に入る。そのため、地区の東縁と北縁は急な崖面となって沖積地や谷内部に落ち込む。地区の西側はC地区と連続する。

地区の調査前の状況は3枚の水田で、遺構の検出面は耕作土直下の黄灰色、黄橙色を呈すシルト質極細砂の所謂地山面であり、西から東に段をなして下がっていた。これは調査前の水田の状態と同様であり、遺構検出面は開墾時に大きく削平されたものと判断される。調査区中央のSH07とSB02付近の段上に古墳時代の須恵器を含む黄灰色極細砂、調査区東端の崖上で弥生時代末～古墳時代前半の土器を含む黒褐色極細砂が認められたが、これら包含層の遺存は一部のことである。

検出された遺構は弥生時代末から古墳時代前半の竪穴住居跡8棟、掘立柱建物2棟、古墳時代後期の竪穴住居跡1棟、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物2棟である。これらの遺構は段丘縁に寄った位置から多く検出され、台地中央にあたる調査区南西隅は遺構の空白域となっている。これは開墾時の削平が影響しているものと思われるが、本来は遺構が存在していたものと考えている。

弥生時代末から古墳時代前半の竪穴住居跡や掘立柱建物には拡張や建替えが認められており、一定期間は存続していたものと思われるが、床面等に残された遺物は極めて少ない。

中世の掘立柱建物は2棟であるが、他に柱穴もなく、極めて短期間の存続であった可能性が高い。

以下、時期ごとに遺構番号順に記述していく。

2. 弥生時代末～古墳時代前半の遺構

SH01 (図版16 写真図版21)

調査区の東端近くで、調査区壁にかかった状態で検出された竪穴住居跡である。SB06を切って検出されている。南壁が検出されていないが、平面形は東西4.3m、南北2.9m以上のやや歪な方形を呈する。壁は最高20cmまで遺存し、壁下には幅約15cm、深さ5cmの壁溝が全周する。床面上から柱穴は検出されていない。

埋土にはふい黄褐色や暗灰黄色シルト質極細砂であり、床面上には炭化物層が確認できた。この炭化物層は均一に炭化した状態であり、木材の痕跡も認められなかったことから、焼失住居には当たらないと推測している。この他、壁面に沿ってオリーブ褐色のシルト質極細砂が認められ、壁材の痕跡に当たる可能性がある。炭化物とともに97・98の壺等が出土している。

SH02 (図版17 写真図版21・22)

SH03・SB03を切って検出された方形の竪穴住居跡である。北壁は段丘崖とともに崩落して失われている。東壁には拡張が見られ、当初東西5.85mの住居を約35cm拡張して、最終的な住居規模は東西6.2m、南北5.2m以上としている。壁は最高18cmが遺存していた。壁下には幅約15cm、深さ7cmの壁溝が全周して検出された。西壁側では壁溝が住居壁に食い込むように掘られて、住居壁が内側に傾斜するよ

うになっている。主柱穴は4本であり、大きさは径35～55cm、柱穴内では径15～22cmの柱痕跡が確認されている。中央の土坑はなく、東壁際に方形の浅い土坑が確認されている。規模は南北75cm、東西50cmを測り、周囲には壁溝に連続する形で溝が巡らされている。この土坑の南約50cmには壁と直交する形で細溝が1.2mまで確認されており、土坑と溝は一体のものである可能性が高い。99の土錘、100・101の土器底部が出土している。

SH03 (図版16・17 写真図版21～23)

SH02に切られて検出された隅丸方形の竪穴住居跡で、一度の建替えが行われており、当初の住居をSH03-1、建替え後の住居をSH03-2として記述する

SH03-1 東西6.0m、南北6.2mの規模で、平面形は隅丸方形を呈する。壁は拡張の際に壊されて遺存していないが、壁溝がほぼ全周して検出されている。壁溝は幅約22cm、深さ12cmで、南西隅の屋内溝が取り付く付近は幅広くなり、屋内溝が屋外に出て行く部分では途切れている。床面はSH02の床面とほぼ同じ高さとなっている。主柱穴は4本で、大きさは径25～37cmであり、柱穴内からは径15～17cmの柱痕跡が確認されている。

床面の中央には平面形が長方形の土坑が設けられており、土坑の規模は東西1.24m、南北0.98mを測る。土坑は上面から深さ12～15cmほど下がったところでテラスを設け、その中央に一辺80cmの正方形に近いプランで深さ約30cmに掘り下げている。したがって土坑全体の深さは約45cmとなっている。

屋内溝は幅25cm、深さ22cmを測り、壁溝の住居南西隅のやや東寄りから中央土坑に連結され、中央土坑から住居北東隅やや西寄りに向けて伸ばされた後、住居内で暗渠となって屋外に出、約1.3m伸びて段丘崖面で途切れる。埋土から102の器台が出土している。

SH03-2 胴の張った隅丸方形の住居跡で、一辺約6.9mの規模である。SH03-1を外側に最大50cm拡張し、SH03-1のコーナー部の外側に接するように拡張している。検出できた壁下には幅17cm、深さ7cmの壁溝が全周する。床面はSH03-1より10cm高く、拡張した際に出た土でSH03-1の床面を埋めて貼床にしている。床面には台石が1点残されていた(S5)。床面からは中央土坑や柱穴は検出されず、SH03-1のものをそのまま利用したと思われる。そのため、コーナー部の拡張が制約を受け、SH03-1に近接する形となったのであろう。

SH04 (図版18・19 写真図版24・25)

SH02・03の西側で検出された南北5.3m・東西5.0mの方形の竪穴住居跡で、北東隅は流失している。壁は最高12cmが遺存し、壁下には幅17～25cm、深さ6～15cmの壁溝が全周している。床面は中央に南北1.8m・東西1.9mの範囲を周囲より5cm程度高く掘り残し、その東西端に盛土による土手状の高まりを付けたスペースが設けられている。その内部の東寄りには中央土坑を、西端の土手の内側には細溝を設け、中央土坑と細溝の間は空間となっている。細溝は幅10cm、深さ6cmで、間仕切り等の溝の可能性が考えられる。中央土坑は径65cm、深さ65cmを測り、上面から深さ45cmの位置で東側に段を設けている。中央土坑の埋土には焼土や炭化物が多く含まれていた。主柱穴は4本で中央の高まりの4隅付近に設けられ、南西隅の柱穴には中央の高まりの西端の土手がそのまま延長されていた。柱穴は径23～40cm、深さ50～65cmあり、内部から径15cmの柱痕跡が確認されている。床面上から103～108の甕・壺・高坏等が出土し、北西隅近くの壁溝上には黄色粘土が残されていた。

SH05 (図版20・21 写真図版26)

南東部壁際の床面が方形に高く掘り残され、その部分が外に突出したような歪な円形を呈する竪穴住

居跡である。壁及び床面の北1/3は流失しており、遺存する部分での規模は径9mを測る。西壁の一部が最も良く遺存し、その部分では50cmを測るが、大部分の壁は水田開発時に削平されており、最高20cmが遺存しているに過ぎない。壁溝は幅15～25cm、深さ3～10cmで、床面が一段高く残された部分を除く壁下に設けられている。

床面は2層あり、下層は砂礫層上面、上層は砂礫層上に黄橙色細砂を積んだ貼床上面となっている。下層の床面上からは径25～55cmの柱穴10個が検出され、内9個から径12～25cmの柱痕跡が確認されている。この内、P1～4は主柱穴になると思われる。中央土坑（古）は2段に掘られ、上段は南北94cm・東西72cmの長方形を呈し、深さ15～20cmで平坦となり、その中央に下段が掘り込まれる。下段は径60cm・深さ30cmを測り、中央土坑全体の深さは50cmとなる。黒褐色シルト・灰色砂礫が埋まって皿状に浅くなった段階で、貼床の黄橙色シルトで埋め戻されている。黄橙色シルトの上には褐灰色シルトが堆積しているが、これは貼床が窪んだ所に堆積したものである。

上層の床面は下層床面上に黄橙色細砂を厚さ5cmで敷き均して床面としたものである。この床面から検出された柱穴は下層の柱穴の柱痕跡であり、P4の断面では掘方は下層床上で、柱痕跡は上層の床面上で確認されている。したがって、貼床は柱を残したままの状態で行われたと思われる。

上層の中央土坑（新）は下層の中央土坑（古）を埋めて東隣にあたる位置に掘り直されている。2段に掘られ、上段は南北85cm・東西65cmの長方形を呈し、深さ15cmで平坦面を作っている。その中央に径42cm、深さ38cmの下段が掘り込まれており、中央土坑全体の深さは53cmとなる。

埋土及び中央土坑からは109～118の壺・甕・高坏等が出土している。

SH07（図版21・22 写真図版27～29）

調査区のはほぼ中央で検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。後に拡張が行われており、当初の住居をSH07-1、建替え後の住居をSH07-2として記述する。

SH07-1 東西6.1m、南北5.6mの規模で、平面形は隅丸方形を呈する。南・東壁はSH07-2の拡張の際に壊されている。西・北壁は最高18cmが遺存しているが、拡張の際に壁溝が掘り直されていることから、当初の壁のままであるかは不明である。壁溝は南・東壁下の部分が遺存しており、幅27cm、深さ13cmを測る。主柱穴は4本であり、北西隅の柱穴はSH07-2の屋内溝に切られている。中央土坑は拡張後の屋内溝と中央土坑に切られて不明な点もあるが、上下2段に掘られ、上段は南北60cm以上、東西45cm以上、深さ約6cm、その中央に円形の下段が掘り込まれ。下段は径35cm、深さ19cmを測り、中央土坑全体の深さは約25cmとなっている。

SH07-2 SH07-1を東に1.2～1.3m、南に1.3～1.4m拡張して、全体の規模を東西7.25m、南北6.9mとした隅丸方形の住居跡である。壁は最高25cmが遺存し、壁溝は壁下を全周して検出されている。壁溝の幅は20～30cmを測り、深さは6～12cmを測る。主柱穴は4本で、SH07-1の主柱穴を南東方向に移動させた位置となっている。主柱穴は径25～50cm、深さ45～55cmを測り、内部に径15～17cmの柱痕跡が確認されている。中央土坑も南東方向に移動させており、上段は一辺が1.05mのやや歪な方形に約10cm掘られ、下段は径60～80cm、深さ約60cm、中央土坑全体の深さは約70cmを測る。下段は不定形な形状を呈しており、断面観察でも掘り直しの痕跡が確認されている。中央土坑の北西隅から住居北西隅の壁溝を繋ぐ形で屋内溝が設けられ、住居北西隅からは屋外に向けて屋外溝が伸ばされている。屋内溝は中央土坑の下段に取り付けられ、壁溝の底と同一レベルとなっている。幅35cm、深さ22cmを測る。屋外溝は住居との接合部が幅35cm、崖面で終息する部分で幅90cmとなっている。住居との接合部は黄橙色の

地山状の埋土となっており、本来は暗渠構造であったものと思われる。床面上には120の器台とF15の鉄鎌が遺存していた。

SH09 (図版23 写真図版31)

中央土坑と主柱穴4本が検出されたもので、壁及び壁溝は削平により失われている。中央土坑は東西60cm、南北45cmの長方形で、深さは15cmである。主柱穴4本は径25cm、深さ10～15cmを測る。

SH10 (図版23 写真図版31)

SH09の北側で3カ所から2個一対の状態で見出され、掘立柱建物状の配置にならないことから、竪穴住居状の建物と判断している。柱穴は径25～30cm、深さ10～15cmを測る。

SB03 (図版24 写真図版32)

SH02に切られて見出された桁行2間(4.3m)、梁行1間(3.7m)、床面積約15.9㎡、棟方位をN15°Eとする掘立柱建物である。北端は段丘崖となっており、桁行はさらに北に延びる可能性もある。桁行の柱間は約2.1mを測る。北西隅の柱穴はSH02のため失われており見出できなかった。見出できた柱穴は50～90cmの不正形な方形の掘方で、深さ5～50cmを測るが、桁行西側の柱穴P4・5はSH02の床面上から見出され、僅かに痕跡が見出された程度の深さとなっている。122の高坏が出土している。

SB06 (図版25 写真図版33～36)

SB03の東側に並行し、SH01に切られた状態で見出された掘立柱建物である。段丘崖近くに占地しており、沖積地側から目立つ建物であったものと思われる。建物は一度改築が行われており、SB06-1、SB06-2として記述する。

SB06-1 桁行2間(5.0m)、梁行1間(2.8m)、床面積14㎡、棟方位をN15°Eとする建物で、桁行の柱間は2.5mとなっている。柱穴は布掘りで溝の中に掘られており、西側の溝(SD01)は幅60cm、深さ15cm、東側の溝(SD02)は幅50cm、深さ15cmを測る。溝内に板状の痕跡等は確認できなかった。柱穴の大きさは東側では溝方向を長軸とした長さ0.8～1.2m、幅50cmの長方形の掘方で、深さは55～60cmであり、西側は改築時に改変されて正確に把握することはできなかった。P2・P3では柱穴の底から径20cmの柱痕跡が確認されている。

SB06-2 SB06-1を東に50cm拡張したもので、桁行2間(5.0m)、梁行1間(3.3m)、床面積16.5㎡を測る。改築に当たってはそれまでの布掘りを放棄し、東側柱列の外側に東西方向に主軸を置く柱穴を新たに掘っている。新たに掘られた柱穴は東西1.0～1.4m、南北0.6～0.7mの長方形を呈し、深さは55～62cmとなっている。柱穴内からは径20～30cmの柱痕跡が確認されている。西側柱列の柱穴は溝埋土の上から掘り直されており、掘方は南北70～100cm、東西35～50cmの長方形で、深さは60cmを測る。

SK05～08 (図版26・27 写真図版30・31)

これらの土坑は長さ55～70cm、幅50cmの長方形を呈している。調査では土坑として扱ったが、埋土には全体に地山ブロックが含まれており、またSK05・08で柱痕跡状が確認され、SK06にも中央に柱抜き取りの痕跡とも考えられる堆積が認められている。こうしたことからこれらはP101・102とともに桁行2間、梁間1間、独立棟持柱付掘立柱建物になる可能性がある。その場合、建物規模は桁行4.2m、梁行3.3m、床面積13.9㎡であり、桁行の柱間2.1m、棟持柱の出は東側1.5m、西側1.3mとなる。棟方位はN65°Wであり、SB03・06と直交する方位を採っていることになる。

3. 古墳時代後期の遺構

SH08 (図版26・27 写真図版30・31)

遺構面が最も高い調査区西半の北端で土坑9基や柱穴約30個が集中して検出され、SK04からSK01にかけて方形住居の隅状の落ち込みが確認され、焼土も検出されたことから住居跡としたものであり、焼土を中心にSK01・SK04と柱穴で構成されているものと判断している。

SH08の焼土は段丘崖際で検出され、一辺約40cmの範囲が焼土化し、中央は深さ約3cmに窪む。SK01は壁際の土坑にあたるものと判断しており、規模は東西約1.2m、南北0.8mの楕円形を呈し、深さ約35cmを測る。内部から127～134の須恵器杯や土師器甕などが出土している。SK04は南北1.3m以上、東西80cm、深さ23cmの長方形の土坑で、西壁と北壁は崩壊している。内部から136の須恵器杯蓋が出土している。主柱穴は2本ずつ計4本を候補としており、規模は径20～25cm、深さ約30cmである。

SK02・03 (図版26)

切り合ったような状態で検出された2基の土坑であるが、前後関係は把握できなかった。SK02は長軸1.7m、短軸約1.4mの楕円形状で、深さ約20cmを測る。SK03は径1.3mの不正形な円形の土坑で、深さは20cmを測る。埋土はともに黒褐色シルトであった。これらの土坑はSK09とともに竪穴住居の壁際土坑にあたる可能性を考えているが、柱穴との関係が把握できず、今回は住居として扱っていない。135の土師器甕がやや底から浮き、破片の状態で出土している。

SK09 (図版26)

SK04の東側で段丘崖にかかった状態で検出された土坑であり、南北80cm以上、東西1m以上を測る。埋土は黒褐色シルトであった。SK02・03とともに竪穴住居に伴う屋内土坑である可能性が高い。

P1 (図版26・27 写真図版31)

長軸44cm、短軸36cm、深さ10cmの楕円形のピットである。埋土は黒褐色シルトで、土師器甕がやや底から浮き、破片の状態で出土している。

4. 平安時代末～鎌倉時代の遺構

SB01 (図版28 写真図版37)

棟方位をN84°Wとする、桁行3間(6m)、梁行2間(4.4m)、床面積26.4㎡の総柱建物である。柱間は桁行2.0m、梁行2.2mの等間となっている。柱穴は径18～38cm、深さ1～20cmであり、南桁行柱穴は削平により痕跡が残る程度となっている。したがって、梁行が南に伸びる可能性も残されている。西側には建物と2.0mの間隔を開け、桁通りからは南にややずれた位置に、2個の柱穴が配置されている。建物に付随する施設の可能性が高い。138・139の須恵器碗・土師器碗が出土している。

SB02 (図版28 写真図版37)

SH07上から東側にかけて検出された、棟方位をN82°Wとする、桁行2間(4.7m)、梁行2間(4.4m)の総柱建物である。桁行の柱間は東側が狭く2.1～2.3m、西側が2.5～2.7mとなっている。梁行の柱間はほぼ2.2mで揃っている。柱穴は径30cm、深さ15cmを測る。遺物は出土していないが棟方位をSB01とほぼ同じくしていることから、同時期の建物と判断している。(吉識)

第2節 遺物

1. 弥生時代末～古墳時代前半の遺物

SH01 (図版29 写真図版38)

壺が出土している。壺は、広口壺(97)・直口壺(98)が出土している。97は、床面から出土したもので、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。口径19.7cm。98も床面から出土したもので、口縁部は内外面ともナデ調整により、体部内面は横方向のヘラ削りにより、仕上げられている。口径15.3cm。

SH02 (図版29 写真図版38)

土錘と甕が出土している。土錘は99の1点が出土している。一端を欠くが、ほぼ完存する。残存長6.55cm、径1.8cm、孔径5mm。甕は100と101の底部片で、調整等は観察できない。V様式系甕の底部と考えられる。

SH03 (図版29 写真図版38)

器台が出土している。器台は102の1個体であり、鼓形器台の受け部と考えられる。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。残存高4.0cm。

SH04 (図版29 写真図版38)

壺・甕・鉢・高坏が出土している。

壺は、小型丸底壺(103)・複合口縁壺(107)が出土している。103は、底部をのぞいてはほぼ完形に復元できる個体である。体部外面はハケ調整とナデ調整、体部内面はナデ調整、口縁部外面は横ナデ調整、口縁部内面はハケ調整後横ナデ調整により、仕上げられている。口径9.8cm、体部最大径12.4cm、残存高12.4cm。107は、小型有稜高坏の可能性も考えられるが、共存する土器の時期から判断して、複合口縁壺と判断したものである。内外面の調整は不明である。口径20.3cm。

甕は、2個体(104・106)出土している。104もV様式系の甕と考えられるが、外面に叩き痕は観察できない。体部外面はハケとナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。口径14.4cm、体部最大径17.1cm、残存高14.7cm。106は、庄内式の甕である。ただし胎土は在地産である。体部外面には叩き痕は認められず、縦方向のハケ調整により仕上げられている。体部下内面はヘラ削り、上半内面はナデ調整により仕上げられ、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。口径18.8cm、体部最大径25.2cm、器高26.5cm。

鉢は105の1個体が出土している。小型の鉢で、口縁部をわずかに欠く以外、ほぼ完存する。外面を叩き整形後、内外面がナデ調整により仕上げられている。残存高5.8cm。

高坏は108の1個体が出土している。脚部のみで、外面はヘラミガキにより仕上げられている。残存高7.3cm。

SH05 (図版29 写真図版39)

壺・甕・鉢・高坏が出土している。

壺は、複合口縁壺(109・114)と小型丸底壺(110)が出土している。109は、中央土坑内から出土したもので、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。口径18.0cm、残存高7.5cm。114は、大型の複合口縁壺で、口径27.5cmを測る。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。形態的に山陰地方の特徴が認められる。小型丸底壺の110は、体部のみ残存する。外面はヘラミガキにより仕上げられている。最大径9.0cm、残存高4.7cm。

甕は、口縁部片(111・112)と底部片(113)が出土している。111は庄内式の甕で、胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。口径14.3cm。112は、基本的にはV様式系の甕であるが、庄内式甕の影響を受け体部内面がヘラ削りにより仕上げられている。口径12.0cm、残存高4.3cm。113は、外面が叩き整形後ナデ調整により、内面がハケ調整により仕上げられている。

鉢は、118の1個体である。外面はヘラミガキにより、内面はナデ調整により、仕上げられている。

高坏は、3個体(115～117)出土している。115は、坏部を中心に残存し、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。外面口縁部と体部境には断面三角形の突帯が貼り付けられている。口径22.3cm、残存高8.2cm。116は椀形高坏の脚部と考えられる。外面はヘラミガキにより仕上げられている。117も外面はヘラミガキにより仕上げられている。底径12.3cm、残存高7.9cm。

SH07 (図版29 写真図版39)

高坏(119)と器台(120)が出土している。119は、脚部のみ残存する。外面はハケ調整後ヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。底径14.0cm。器台の120は完形に復元できる個体である。口縁部と裾部の区別が不明確で、逆の可能性も考えられる。口縁部・裾部ともに横ナデ調整により仕上げられている。筒部は、外面上部がハケ調整、同下部がナデ調整により仕上げられている。内面については、口縁部と裾部付近がハケ調整により仕上げられ、その後中央部を中心にナデ調整により仕上げられている。口径14.4cm、底径16.1cm、筒部径12.7cm、器高29.0cm。

SB03 (図版29)

122の高坏1個体が出土している。脚部のみ残存で、外面はハケ調整後ヘラミガキにより仕上げられている。残存高5.6cm。

P11 (図版29)

121の鉢1個体が出土している。直口鉢の口縁部と考えられる。内外面ともヘラミガキにより仕上げられ、口縁端部を中心に横ナデ調整が加えられている。口径18.6cm、残存高3.7cm。

包含層 (図版29 写真図版39)

甕(124)・鉢(123・125)・小型丸底鉢(126)が出土している。124はV様式系甕の底部と考えられる。123は、鉢の底部と考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。125は有孔鉢の底部と考えられ、径8mmの円孔が穿たれている。外面はヘラナデにより仕上げられている。126は、小型丸底鉢で、完形に復元できる個体である。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。口径11.1cm、器高7.5cm。
(山田)

2. 古墳時代後期の土器

SH08 (図版30 写真図版40)

127～134はSK01、135はSK02・03、136はSK04、137は床面から出土した。127は須恵器杯蓋である。外面に稜は認められず、口縁部内面には面をもつ。天井部の回転ヘラケズリは2/3程度の範囲に施されている。口径14.7cm、器高4.0cmである。128～131は須恵器杯身である。口縁端部に面をもたず、底部は回転ヘラケズリが施されている。128のように器高や立ち上がりが高いものと、130のように器高や立ち上がり低いものがある。132は須恵器短頸壺で、口縁端部は丸味をもっている。133・134は土師器甕である。口縁部は短く外反して開き、頸部がぶ厚い。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はナデ、体部内面にはヘラケズリが施されている。135は土師器甕である。口縁部は直立して立ち上がる。口縁

部内外面は横ナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。136は須恵器杯蓋である。外面は突出せず、稜の下は凹線状に窪んでいる。口縁部内面の面は不明瞭である。天井部の回転ヘラケズリは2/3程度の範囲に施されている。口径14.4cm、器高4.8cmである。137は須恵器提瓶である。口縁部は強く外反して開き、端部は丸味をもっている。体部内面には同心円当て具痕が残存している。

3. 平安時代末～鎌倉時代の土器

S B 0 1 (図版30 写真図版40)

138はP 1、139はP 4から出土した。138は須恵器碗である。口縁部は直線的で丸味をもたない。139は土師器底部である。底部は回転糸切りである。

4. 金属製品 (図版30 写真図版40)

F 15は鎌である。S H07-2の壁溝上から出土した。左側は切損し、右端は折り返されている。刃部は弧状にくぼんでいる。内面には木質が付着している。幅は13.7cm以上で、高さは右端で4.25cmである。

F 16は鉄鏃である。これもS H07-2の壁溝から出土した。刃部は扁平で、鎗をもたない。茎部が折損しているため明瞭ではないが、無関である可能性が高い。(池田)

5. 石製品 (図版30 写真図版40)

S 4は珪質極細粒砂岩を用いた砥石である。S H07から出土した。水平方向に入った層理に沿って割れた一面を利用している。研磨面は、石材の緻密さゆえに極めて平滑で、層理がマーブル状に現われ美しい。周縁部には概ね3方向のやや荒い研磨痕が観察されるが、面の大部分は研磨痕が微細で肉眼で観察するのが困難なほどである。金属製の利器の仕上げ砥ぎに用いられた可能性が高い。

S 5は流紋岩質安山岩を用いた台石で、S H03の床面から若干浮いた状態で出土した。やや厚みのある板石状を呈し、両平坦面を使用するが図正面側の磨耗が顕著でよく使用している。(上田)

第4章 C地区の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 概要

調査区は、西側から東側にかけて扇形に広がる。地形的にも、西側から東側へ傾斜している。調査地は傾斜地に立地する水田であったため、段地となっており、西側で一部旧地形の削平が認められた。このため、主な遺構は調査区の東半部に集中する傾向にある。この東端部においても、削平を受けていたが、柱穴を中心とした遺構を検出している。検出した主な遺構は、竪穴住居跡(S H01)・掘立柱建物跡(S B01～S B03)等である。

土層は上層から、①耕作土層、②旧耕作土・床土層、③土壌層、④基盤層の層序が認められる。耕作土層(1層)は、調査区西部で約40cmの段差が認められる。旧耕作土・床土層(3層・4層)は、1層が耕作土となる以前に、耕作土およびそれとセットをなす床土層であった層である。基本的には、客土によって形成され、出土土器から判断して、中世以降に形成された層と考えられる。土壌層(5層・6層)は、いわゆる遺物包含層である。特に6層の土壌化が顕著である。当地区で出土した土器の大半は、当層から出土したものである。基盤層は、基本的に同時堆積により形成された層であるが、東側ほどその粒度が細くなっていることから、西側から東側への堆積により形成された層と考えられる。基盤層上面は遺構検出面であり、西側から東側へ傾斜し、標高は西端部で94.50m、東端部で91.20mである。

2. 遺構

S H 0 1 (図版32 写真図版42)

調査区中央部に位置する。竪穴住居跡と考えているが、住居跡の立ち上がり・周壁溝等は検出されず、2基の土坑と2穴の柱穴を検出したのみである。土坑の平面形が、溝状のものと隅丸長方形を呈することから、いわゆる10型中央土坑と判断し、これらを竪穴住居の一部と判断したものである。2基の土坑の内、南側の溝状を呈する土坑(S K05)の下層(2層)は、炭を多く含む層である。他は、人為的に埋められていた。土坑の規模は、長軸方向で84cm、その直角方向で30cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。他方の土坑(S K06)は、主軸方向で85cm、その直角方向で56cmを測る。横断面は逆台形をなし、検出面からの深さは20cmである。柱穴は、円形からなり、その規模は30cmを測り、検出面からの深さは40cmである。また、柱穴間の距離は2.60mである。

S B 0 1 (図版33 写真図版44)

調査区東部中央に位置する。S B02と平面的に一部重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。桁行4間×梁行3間の総柱建物であるが、北西隅の1穴が調査区外にあたり、未検出である。南北方向に桁行をとり、東桁行(P15-P19)での規模は9.15mを測る。また、南梁行(P1-P15)における規模は6.85mである。これらの規模から復元される、当建物の平面積は62.67㎡である。また、東桁行を基準とした棟方位は、N5°Eを示している。柱穴は、その平面形はすべて円形からなり、その規模は23cm～33cmである。また、検出面からの深さは、18cm～29cmである。また、全ての柱穴において柱痕を検出することができ、その規模は15cmである。このほか、P8とP13において、柱痕底

部から完形に近い形で土器(140・141)が出土している。土器の出土状態から判断して、柱抜き取り後に置かれたものと考えられる。

S B 0 2 (図版32 写真図版43)

調査区東部中央に位置する。S B 01と平面的に一部重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。梁行1間×桁行2間の側柱建物である。南北方向に桁行をとり、東桁行(P 4 - P 6)での規模は3.20mを測る。また、南梁行(P 1 - P 6)における規模は2.60mである。これらの規模から復元される、当建物の平面積は8.32㎡である。また、東桁行を基準とした棟方位は、N 8° Eを示している。柱穴は、その平面形はすべて円形からなり、その規模は23cm～32cmである。また、検出面からの深さは、20cm～29cmである。また、全ての柱穴において柱痕を検出することができ、その規模は13cmである。

S B 0 3 (図版32 写真図版43)

調査区中央部に位置する。S B 02の西側に位置するが、棟軸方向をやや異にする。S B 02同様、梁行1間×桁行2間の側柱建物である。東桁行と西桁行が平行しないため、南北の梁行の規模が異なり、平面形が台形状を呈している。南北方向に桁行をとり、東桁行(P 4 - P 6)での規模は3.15mを測る。また、南梁行(P 1 - P 6)における規模は2.65mである。これらの規模から復元される、当建物の平面積は8.34㎡である。また、東桁行を基準とした棟軸方向は、N 12° Eを示している。柱穴は、その平面形はすべて円形からなり、その規模は20cm～22cmである。また、検出面からの深さは、16cm～20cmである。また、全ての柱穴において柱痕を検出することができ、その規模は12cmである。

その他の遺構

この他、土坑状の落ち込み・溝状の遺構が検出されているが、時期は特定できない。(山田)

第2節 遺物

1. 土器

S B 0 1 (図版34 写真図版45)

140はP 8、141はP 13から出土した。140は須恵器碗である。体部は丸味をもち、見込みに凹みをもっている。底部は回転糸切りである。高台脇は切り離しのままで調整はなされていない。口径16.3cm、底径6.4cm、器高5.4cmである。141は土師器杯である。底部の切り離しは摩滅により不明である。口径14.8cm、底径7.6cm、器高4.4cmである。

S K 0 3 (図版34 写真図版45)

142は土師器小皿である。底部は回転糸切りである。

包含層 (図版34 写真図版45)

143は須恵器杯蓋である。外面の稜は鋭く、ヘラケズリの範囲は8割と広い。144・145は須恵器杯身である。144は受部径が16.3cmと大きく、底部は平坦である。145は受部径が14.6cmと小さい。146は須恵器杯Bである。体部は開き気味で、底径は8.2cmである。147は須恵器碗である。底部は見込みに凹みをもたず、回転糸切りである。148は緑釉陶器底部である。底部は削り出しの蛇の目高台である。胎土は硬質、釉色は10GY5/4で、釉は薄い。京都系と考えられる。149は森田・横田分類龍泉窯系青磁碗I - 2類である。150は備前焼播鉢である。内面には1単位14本の櫛目が入れている。(池田)

第5章 まとめ

第1節 遺物

1. 弥生時代後期から古墳時代前半の土器

A地区

S H01は、高坏の特徴から、布留式に位置付けられる。S H02は、体部内面上部を横方向のヘラ削りを行なう甕、および有稜高坏・器台の形態的特徴から、後期初頭に位置付けられる。S H03は、甕の特徴から後期後半以降に位置付けられる。特に、33の甕の特徴から庄内式から布留式初頭に位置付けられる。S H04は、甕の特徴から、後期中葉以降に位置付けられる。P 20は、甕の特徴から庄内式併行期に位置付けられる。P 29についても、同様の時期に位置付けられるものと考えられる。

B地区

S H01～S H05は、庄内式併行期に位置付けられる。S H04は庄内式甕の存在から、庄内併行期に位置付けられる。S H05についても、庄内甕の出土から、庄内式併行期に位置付けられる。S H07については、後期後半以降に位置付けられることは間違いないが、120は類例を欠く資料であり、具体的位置付けは困難である。また、S H05出土の庄内甕は、当地における庄内甕の分布を示す、貴重な資料と考えられる。(山田)

2. 古墳時代後期の土器

古墳時代後期についてはB地区のS H08より須恵器蓋杯や土師器甕などが出土している。須恵器杯蓋は稜をかろうじて残すもの(136)と稜がなくなったもの(127)が存在している。それぞれTK10型式、MT85型式に相当するものと思われる。杯身もほぼそれに対応する時期のものと考えられるが、口縁の立ち上がりのやや低いもの(130)も認められる。総体としてはMT85型式を前後する時期と考えられる。土師器の甕は頸部が厚く、口縁が短く外反することが特徴的である。

B地区に隣接するC地区ではMT15型式の杯蓋(143)、MT85型式の杯身(144)、TK43～TK209型式の杯身(145)が出土している。近辺にはB地区のS H08に前後する時期の遺構も存在するのであろう。

3. 奈良時代～平安時代前期の土器

奈良時代についてはA地区でS D13などからわずかに須恵器・土師器が出土しているにすぎない。A地区のS D13から須恵器台付長頸壺(80)、土師器甕(81～83)が出土している。81の土師器甕は口縁部が長く、端部を内側に巻き込むような形態である。82はB地区S H08出土のものに近く、やや古いものかもしれない。その他、P 26から須恵器杯B(39)、包含層から須恵器杯B蓋(85・86)、皿A(87)、土師器甕(90)などが出土し、製塩土器もS D06(76)・07(77)や包含層(93・94)から出土している。

平安時代前期の土器はA地区の谷部溝(S D01・02・04)やS X01から比較的まとまって出土している。ただし、いずれも水田に関わる遺構と思われるため时期的にはやや幅のあるものである。須恵器は杯B(43・44・52・53)、杯A(45・46・60・69)、台付皿(47・54・62・70)、碗(66～68)、壺(48・63・71・72)、土師器は杯(49・57・61・64・65)や高い輪高台をもつ皿もしくは碗(58・59・73)などがある。

須恵器はその形態から相生窯跡群（あるいはその系列）の製品と考えられるものである（森内1995）。杯Bは器高が低いもの(44・53)、器高が高く底径が大きいもの(52)が第1段階a・b期、器高が高く底径が小さいもの(43)が第2段階a期と考えられる。台付皿は輪高台のもの(54)が第2段階、平高台のもの(47・62・70)が第3段階a・b-1期に存在する。碗は底部が糸切りで、高台と体部の境が明瞭、体部に沈線をもつものもある。第3段階aと考えられる。平安時代前期の土器は第2段階（9世紀中葉）、第3段階a期（9世紀後半）を中心とし、その前後の時期を若干含む可能性がある。C地区の包含層からも同時期の須恵器杯B(146)や京都系の緑釉陶器(148)が出土しており、C地区以東の部分を含めて比較的広い範囲で開発がおこなわれたことが推測される。

4. 平安時代後期以降の土器

平安時代後期の土器の良好な個体は建物に伴ってしか出土していない。C地区S B01P 8から出土した須恵器碗(140)は相生窯跡群（あるいはその系列）の製品で、落矢ヶ谷3号窯（第3段階b-3期）の製品に近い。11世紀後半～12世紀前半頃のものと考えられる。B地区S B01P 1から出土した須恵器碗(138)は東播系の製品で、12世紀後半以降のものと考えられる。（池田）

5. 石臼について

周辺の類例として、中期後半のたつの市養久山・前地遺跡（岸本1995）、後期後半の曾我井・野入遺跡（宮原2000）、後期末の滋賀県守山市金森東遺跡（大岡2005）からの出土例がある。いずれも水銀朱（曾我井・野入遺跡例では共伴した石杵からの検出にとどまる）の精製に用いられたとされるが、これらは板状の石材が利用され、中央部分がくぼむないしは中央付近に赤色顔料の付着が認められる。これに対し当遺跡例では、くぼみ及び赤色顔料付着部分が石器平面形の中心部分より偏り、他の磨面においても磨耗が認められる。また、使用されている石材も、当遺跡での他の台石類の石材とともに例えば佐用町延吉遺跡の縄文時代の石皿にも多用されている半深成岩系の石材であり、西播磨地域において縄文時代から弥生時代にわたって石皿・台石に普遍的に利用されているようである。以上の点から本遺跡の石臼は当初から石臼としての機能が意図されたものではなく、台石ないしは石皿として利用されていたものが転用された可能性を考えたい。（上田）

石臼類例一覧

遺跡名	所在地	時期	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	赤色顔料付着	備考
養久山・前地遺跡	兵庫県たつの市	中期後半	凝灰質砂岩	48	46	15	42	水銀朱	
曾我井・野入遺跡	兵庫県多可町	後期後半	花崗岩	38	27	3	—	なし	共伴する石杵には水銀朱付着
金森東遺跡	滋賀県守山市	後期後半 古墳初頭	記載なし	32.3	29.2	8.7	15.5	水銀朱	共伴する石杵にも水銀朱付着

第2節 遺構

1. 概要

本遺跡は国見山山麓の2面からなる段丘上に位置する。段丘上には弥生時代からの遺跡が数多く所在し、本遺跡もそうした遺跡の一つである。金谷集落の南に入り込んだ谷と比地川の流れる谷によって分断された段丘上に位置し、調査区内、B・C地区は下面に、A地区の中央谷部は下面に、両サイドの一段高い部分は上面の段丘裾にあたる。

段丘上は水田開発の際に削平されていたが、弥生時代後期、弥生時代後期末～古墳時代前半、古墳時代後期、奈良時代～平安時代前半、平安時代後期の5時期の遺構が検出されている。

2. 弥生時代後期

竪穴住居跡A地区SH02が該当するほか、A地区SH04とC地区SH01もこの時期に含まれる可能性がある。A地区SH02の平面形は円形であり、床面中央の施設は細長く浅い土坑と中央土坑がセットとなったいわゆる10型を採用している。細長い土坑は周囲に土手状の高まりが巡らされており、こうした類例は少ない。中央土坑は上段が方形、下段が円形に掘られた2段掘りの構造となっている。

A地区SH04とC地区SH01は出土土器がほとんどないため詳細な時期は不明であるが、A地区SH02と同様に床面中央の施設に10型を採用している住居跡である。ただともに中央土坑は長方形の1段掘りであり、細長い土坑側の土手状高まりはC地区SH01では削平で確認できず、SH04では設けられていない等の相違点がある。

時期的な位置付けは、A地区SH02以外は出土遺物がほとんどないため困難であるが、一応SH02を後期初頭から後期中葉頃までとし、A地区SH02とSH04では出土遺物やや時期差が認められるようであるが、少量であり、位置的な関係から、ほぼ同時期としておきたい。

3. 弥生時代後期末～古墳時代前半の遺構

この時期の遺構はA・B両地区で検出され、竪穴住居跡8棟と掘立柱建物2棟で構成される。竪穴住居跡としてはA地区のSH01・03とB地区のSH01～05・07の8棟が、掘立柱建物としてはB地区のSB03・06の2棟が該当し、他に竪穴住居跡ではB地区SH09・10、掘立柱建物ではC地区SB02・03及びB地区SK05～08・P101・102が建物になるとすれば該当する可能性がある。

各遺構の時期は、B地区SH01～05・07・SB03が庄内式併行期に、A地区SH01・03が庄内式～布留式併行期に位置付けでき、特にA地区SH01は確実に布留式段階にまで下がるものである。また、庄内期としたB地区SH02・03は切り合い関係があり、SH03よりSH02が後出する。SH02はすでに中央土坑を消失した床面構造となっており、同様の床面構造を採るB地区SH01に近い時期が考えられる。SH01では庄内期の壺が出土しており、SH01・SH02はともに庄内期の範疇で捉えられる。SB06は出土遺物がなく、土器からの時期決定は困難であるが、SB03と並行した配置になっていることから、庄内式併行期としておく。B地区SH09については後述するが中央土坑が設けられていることから庄内併行期に位置付けできる。SH10については主柱穴のみであり、時期の特定は困難である。

4. 古墳時代後期の遺構

この時期の遺構として確実なのはB地区SH08である。出土須恵器はTK10～MT85の前後を示しており、SH08はその前後の年代が与えられる。この他、B地区P1も土器の揭示はできなかったが、この時期に該当する遺構である。また、この時期の遺物がB・C地区の包含層から出土しており、C地区SB02・03が該当する可能性がある。

このように、この時期の遺構は遺跡北端のB・C地区で展開され、A地区までは及んでいないようである。(吉識)

5. 奈良時代～平安時代前半の遺構

この時期の遺構はA地区で展開される。奈良時代には谷部の東で東西方向の深い溝SD13、南北方向の深い溝SD06が見られ、A地区にまで開発が及ぶようになったようである。

9世紀に入ると掘立柱建物跡、溝などが見られるようになる。谷の東部では東西方向の深い溝SD12、南北方向の深い溝SD16が奈良時代とやや位置を違えて同様に見られる。掘立柱建物跡(SB01・02)もこの溝と方位をほぼ同じくしている。SA01は建物とやや方位を異にし、SD12を切っていることから、この時期でもやや新しい段階か後続する時期に属すると思われる。谷部では3重の矩形を描くように溝が認められるが、谷を広げながら耕地を広げていったことを示している。調査区西端のSX01も同様な耕作地の縁であろう。この谷部の溝やSX01からは9世紀中葉・後半を中心とする時期の土器や、鉄滓・鉄塊・釘などの製鉄を行ったことを示す遺物も一定量出土しており、この時期に最も開発が進んだと思われる。

この後、谷の東側ではSD08・10・15とSD07・11の少なくとも2時期の南北方向の浅い溝が見られ、後者は12世紀頃の須恵器底部(78)が出土している。10～12世紀頃は耕作地となったようである。(池田)

6. 平安時代末～鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は遺跡北端のB・C地区で展開され、B地区SB01・02、C地区SB01の掘立柱建物3棟と土坑がある。建物は全て総柱建物で、規模的には南北棟のC地区SB01が最も大きく、調査した範囲では中心となる建物である。B地区SB02は2間×2間の建物で、倉や倉庫状の建物とも考えられ、C地区SB01を中心とした建物配置があった可能性もある。

7. 竪穴住居床面の構造

検出された竪穴住居跡は拡張分も含めると16棟であり、この内の15棟は弥生時代後期から古墳時代前半に属するものである。ここではこれらを取り上げ、竪穴住居跡の床面構造の変遷を検討する。

15棟の竪穴住居跡の平面形は、円形を呈するもの3棟(A地区SH02・04、B地区SH05)、方形を呈するもの6棟(A地区SH01、B地区SH01～04・07)、長方形を呈するもの1棟(A地区SH03)がある。円形を呈する3棟の時期からみて、円形の竪穴住居は弥生時代後期～庄内期まで存続する。対岸の川戸遺跡でも後期の竪穴住居が検出されており、周辺では後期を通じて円形竪穴住居を中心とした展開であったようである。方形の住居6棟は庄内併行期から布留式段階に属しており、庄内併行期は竪穴住居のほとんどが方形に変化するが、まだ円形の住居も残る段階と言える。また庄内併行期にはA地区SH03のような長方形で2本柱という竪穴住居も存在している。

床面構造では①中央土坑と溝状の土坑がセットになったいわゆる10型中央土坑（多賀1996）を採用したもの、②2段掘りの中央土坑を設けたもの、③単純な1段掘りの中央土坑を設けたもの、④焼土を伴う中央炉を設けたもの、⑤何らの中央施設を設けないものが存在している。

①の構造を採る住居跡はA地区SH02・04とC地区SH01である。C地区SH01の時期は断定できていないが、その他の2棟の時期は弥生時代後期初頭から中頃まで位置付けされている。A地区SH04では溝状の土坑側を土手状に囲む少ない例であり、また中央土坑を土手状に囲む例では古い例である。

②の構造では、上段を長方形とし、上段底の中央に円形や方形の下段を設けて2段掘りの中央土坑としたB地区SH03・05-1・05-2・07-1・07-2と、上下とも円形の2段掘りとしたB地区SH04がある。規模では長方形としたものは上段が80～120cm、下段が30～80cm、上段を円形としたものは60cmであり、これは上段を長方形としたものの2段目に近い規模となっている。深さの点では上段を長方形としたものでは25～60cm、上段を円形としたものも約60cmであり、それほど変わりはない。この中で特殊な床面中央施設をもつものとしてB地区SH04がある。この住居跡では床面の中央を一段高く掘り残して一辺に細溝を設け、中央土坑を細溝とは反対側に寄せて設けており、中央土坑と細溝の間に空間を創り出している。この空間の用途を解明できるような資料は見あたらないが、細溝は板状材を用いた間仕切りが考えられ、中央土坑との間の空間は作業スペースとみられる。

この構造をとる住居跡の内、B地区SH07の詳細な時期は特定できないが、B地区SH03～05は庄内式併行期に位置付けられており、この構造を採用する竪穴住居は庄内併行期とすることができる。

③の構造はB地区SH09が該当するが、この住居跡は大きく削平を受けて床面を失ったものであり、中央土坑も浅く遺存するのみである。したがって、触れるのみにする。

④の構造は、床面中央に底面が焼土化した浅い土坑を設けているものであり、A地区SH01・03とB地区SH08が該当する。A地区SH01は布留式段階に、A地区SH03は庄内式～布留式初頭に、B地区SH08は古墳時代後期に位置付けられており、②の床面構造は庄内式～布留式初頭段階に採用され、古墳時代後期まで継続している構造である。

A地区SH03では壁際に土坑が出現しており、中央炉+壁際土坑という、以後の竪穴住居の基本的なスタイルを完成させている。また、A地区SH01では中央炉以外に西側柱列の中央にもう1つ底面の焼けた土坑が設けられている。他の住居跡との切り合いの可能性もあるが、柱列上の位置というのが気になるところである。

⑤の構造を採るのはB地区SH01・02である。床面中央には何らの施設もなく、SH02では東壁際に浅い土坑が設けられ、土坑の壁下には細溝が全周している。この土坑内部からは出土遺物もなく、土坑の性格は不明と言わざるを得ないが、細溝内に板を立て、土坑を板で囲ったような施設が推測される。とすれば、この土坑は壁際土坑のような用途を持っていた可能性がある。

B地区SH01は庄内期の壺が出土していることから庄内併行期に位置付けできる。B地区SH02は出土遺物が少なく、土器からの時期決定は困難であるが、庄内期で床面構造①のB地区SH03や同時期のSB03を切って建築されていることから、庄内期よりは新しく位置付けできるが、竪穴住居跡の位置関係から見て、庄内期のB地区SH01やB地区SH04に近い時期が考えられる。したがって、こうした床面構造を採る時期は庄内期の中にあり、①の構造の竪穴住居より新しい時期の住居に採用された床面構造と考えられる。

今回検出した竪穴住居に採用された床面の中央施設を概観した。本遺跡での竪穴住居では弥生時代後期には①とした10型の中央土坑を採用し、庄内併行期には住居の大半が方形に変化するとともに②の構造を採るようになる。また、庄内併行期の中で⑤の中央施設のないものが現れ、庄内併行期～布留式段階に④の中央炉＋壁際土坑といった古墳時代を通じての基本的な構造が成立し、古墳時代後期に継続する。

(吉識)

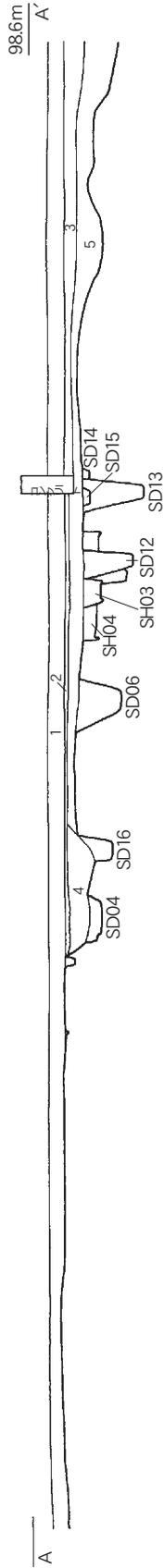
参考文献

- 大岡由記子2005 『金森東遺跡(第30次)・金森遺跡(第2次)発掘調査概要報告書』守山市教育委員会
- 岸本道昭1995 『養久山・前地遺跡』龍野市教育委員会
- 篠宮正他2007 『川戸遺跡』兵庫県教育委員会
- 多賀茂治1996 「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡第6分冊』兵庫県教育委員会
- 宮原文隆(編)2000 『曾我井・野入遺跡Ⅰ・多哥寺遺跡Ⅲ』中町教育委員会
- 森内秀造1995 「相生窯址群における平安期の須恵器について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県教育委員会

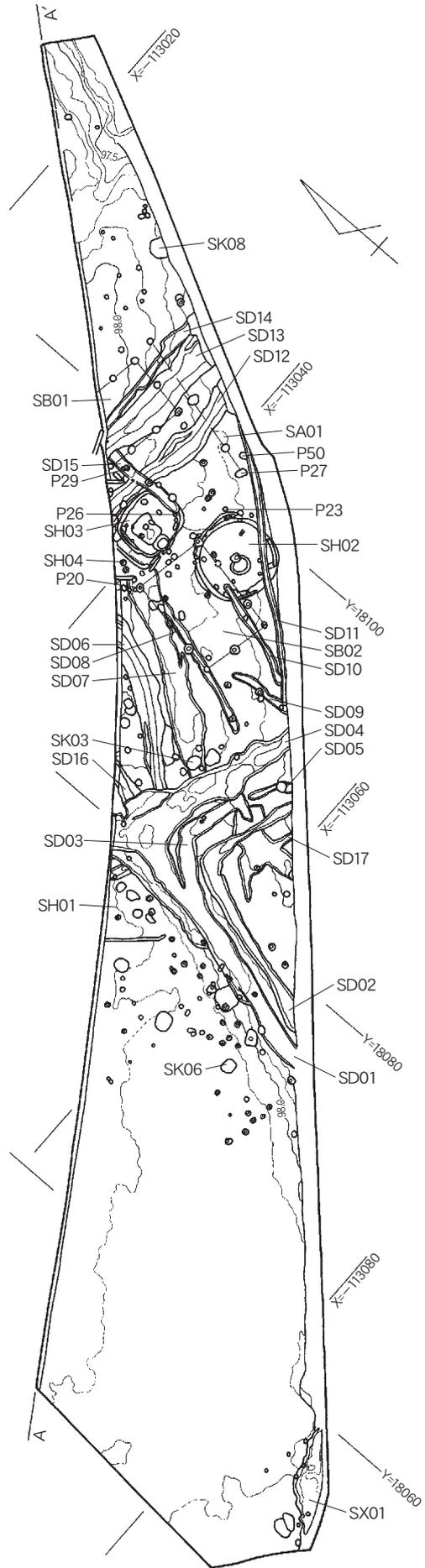
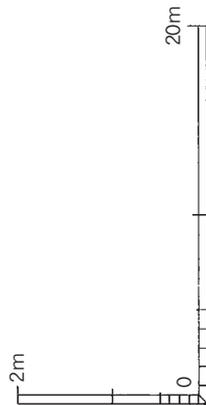
版 圖



調査区配置図

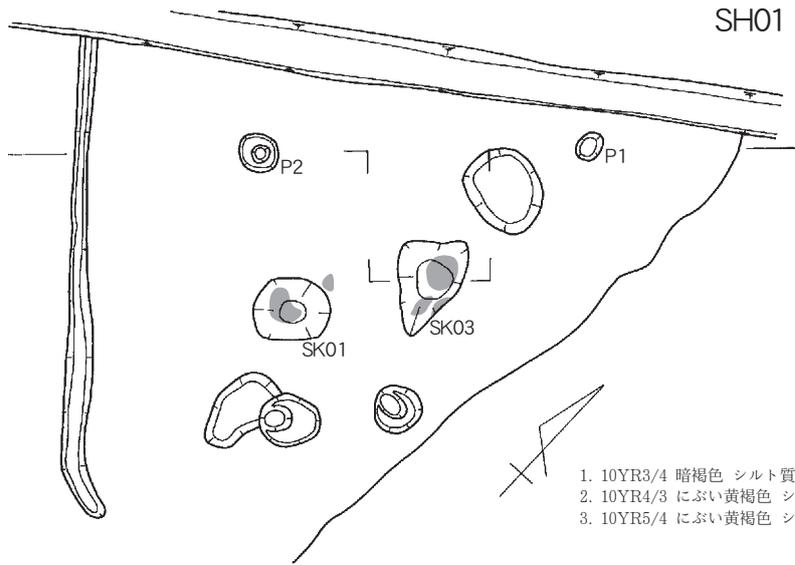


1. 表土
2. 床土
3. 盛土
4. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～中礫を含む)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂 (粗砂～小礫を含む)



全体図

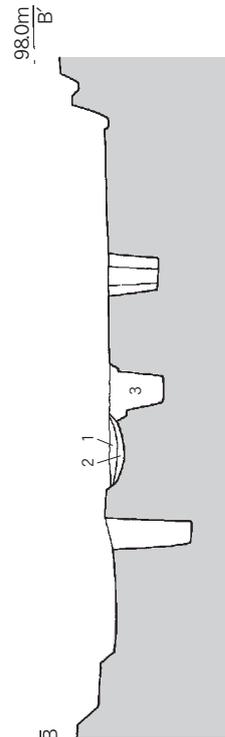
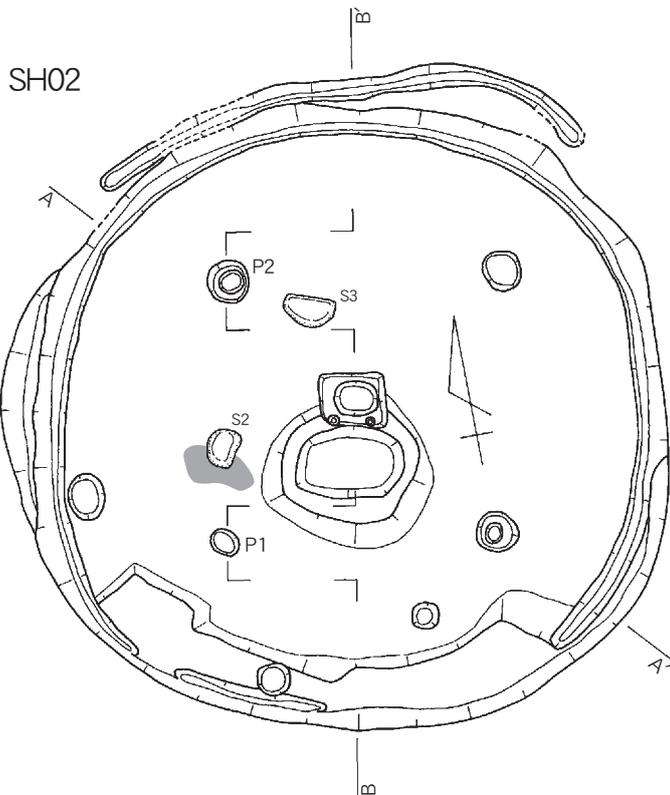
A地区



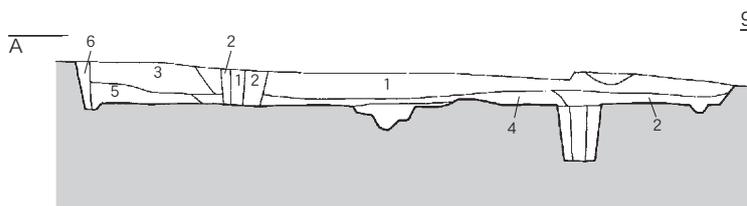
- 1. 10YR3/4 暗褐色 シルト質極細砂 (小礫・炭を含む)
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
- 3. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)



■ 焼土



- 1. 7.5YR4/3 褐色 シルト質極細砂 (粗砂・小礫・炭・焼土を含む)
- 2. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (炭・焼土を多く含む)
- 3. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂を含む。炭・焼土を少量含む)



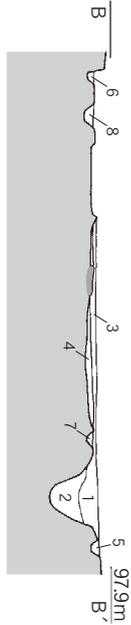
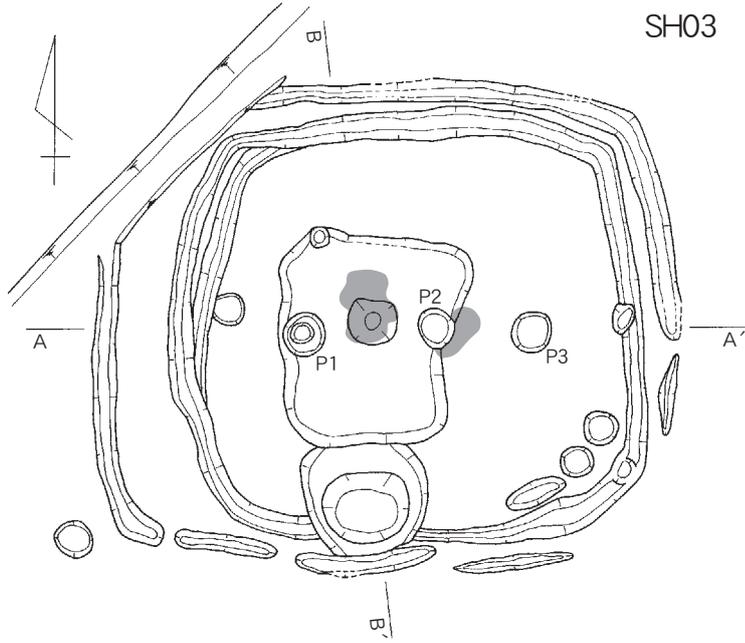
98.0m
A'

- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～大礫を含む。土器を多く含む)
- 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (小礫を含む)
- 3. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (小礫を含む)
- 4. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂・炭・焼土を含む)
- 5. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂 (小礫を少量含む)
- 6. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂



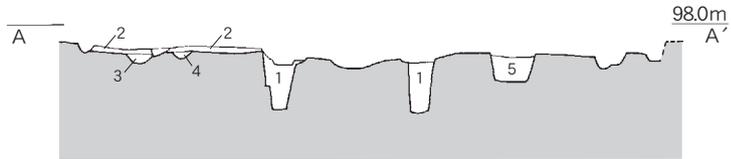
SH01・02

SH03



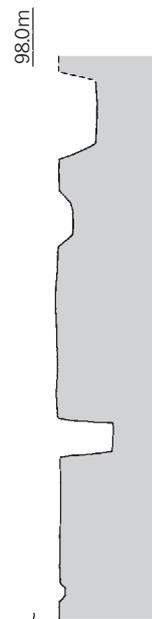
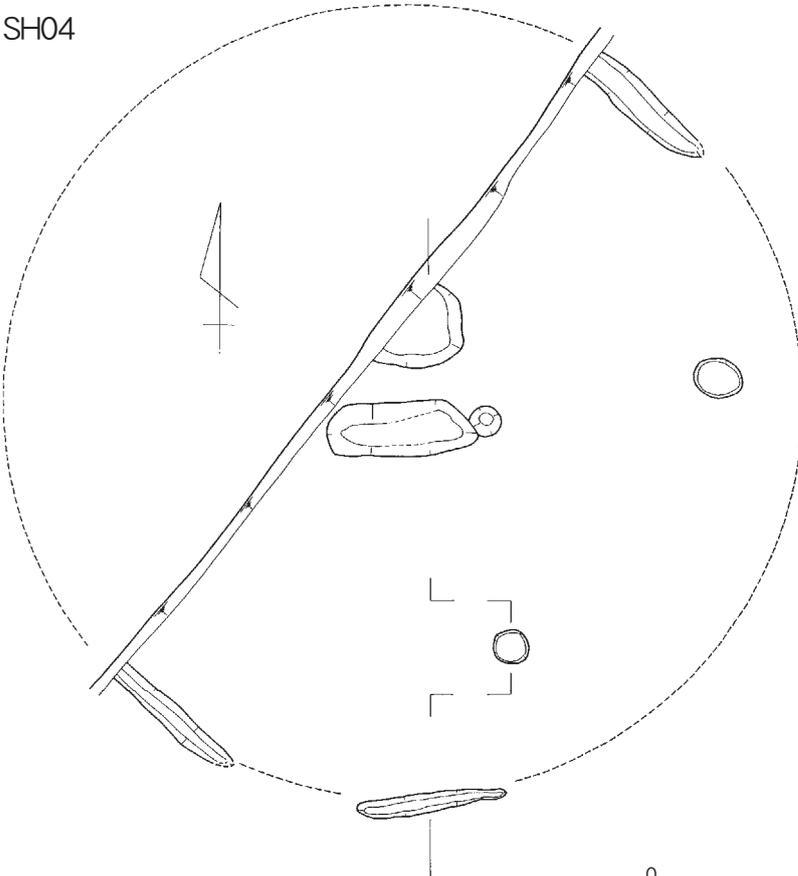
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (粗砂・炭を含む)
3. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (小礫を含む。炭・焼土を多く含む)
4. 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト質極細砂 (小礫・炭・焼土を含む)
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂 周壁溝外
6. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂 (炭を少量含む)
7. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (炭を多く含む)周壁溝内
8. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (黄色土ブロックを多く含む)周壁溝内

■ 焼土



1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 (粗砂・炭を含む)ピット
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)貼り床
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (炭を含む)ピット
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (炭を含む)壁溝
5. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (黄色土ブロックを多く含む)ピット

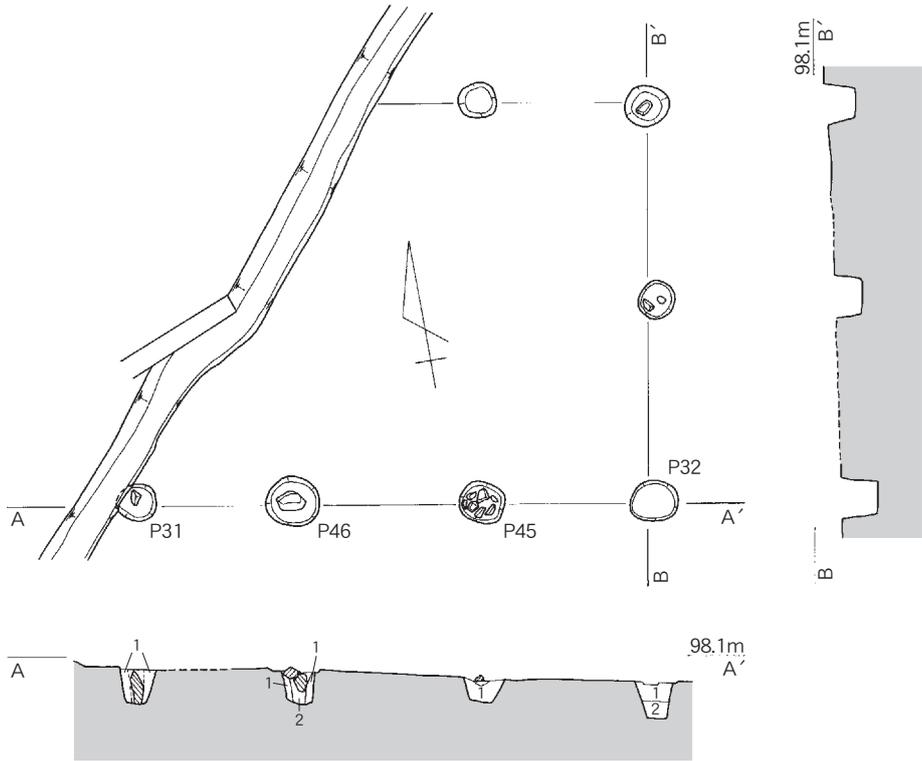
SH04



SH03・04

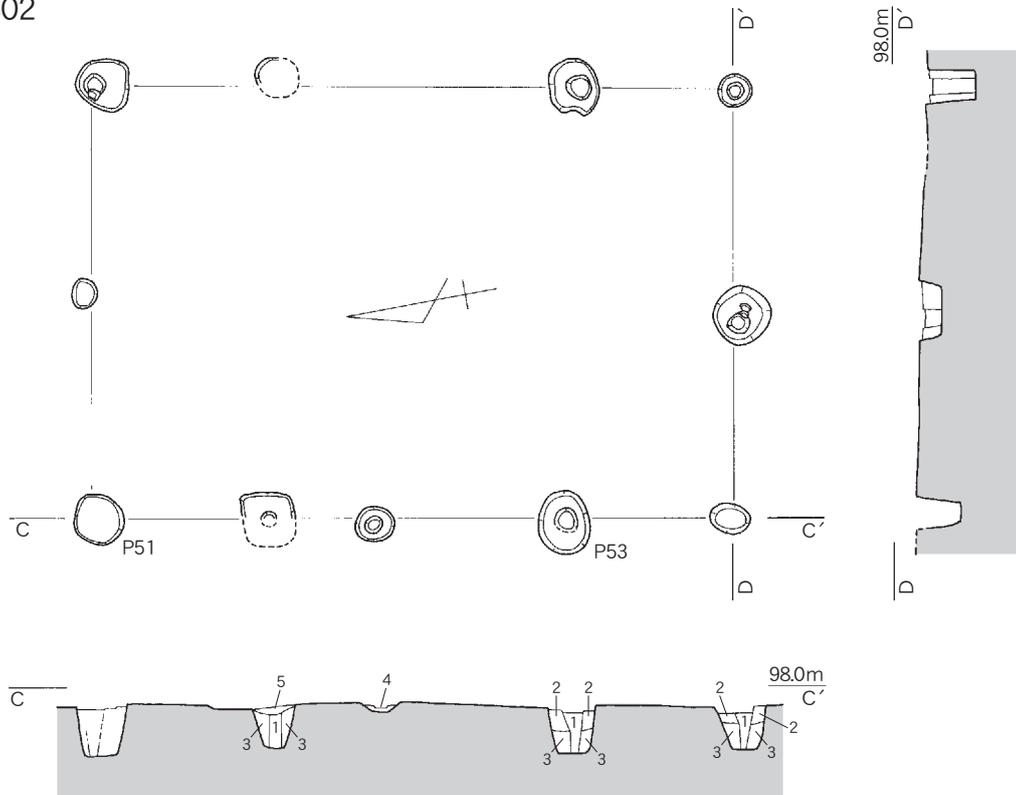
A地区

SB01



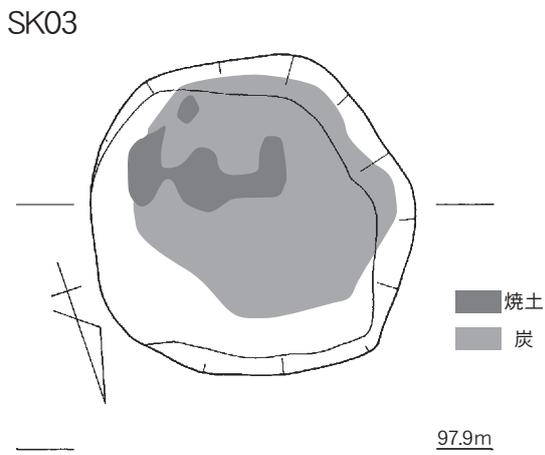
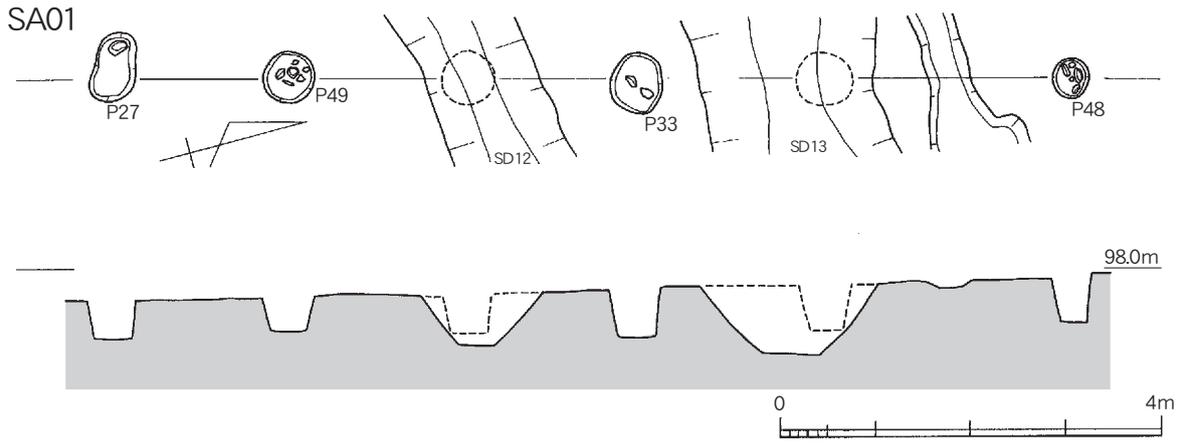
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を少量含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (黄色土ブロックを多く含む)

SB02

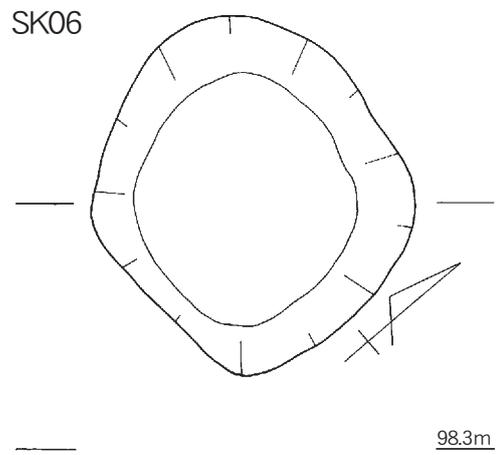


1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
4. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫・炭を含む)
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～中礫を含む)

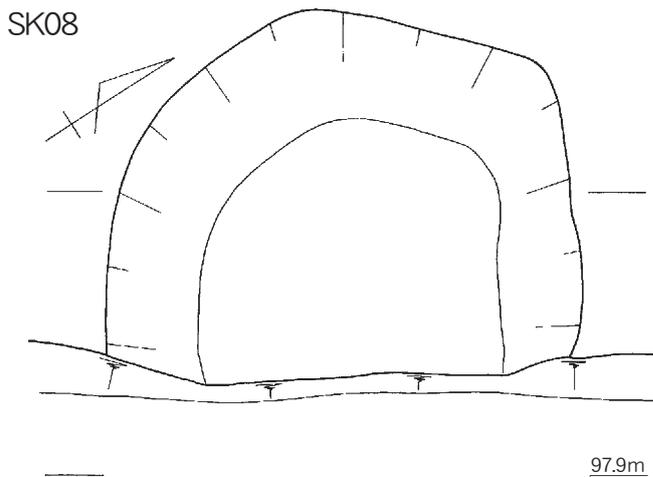




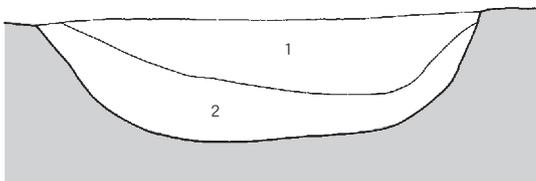
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 (炭を多く含む。焼土粒を含む)



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂~中礫・焼土粒を多く含む)



1. 7.5YR4/3 褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫・炭を含む)
2. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫を少量含む)



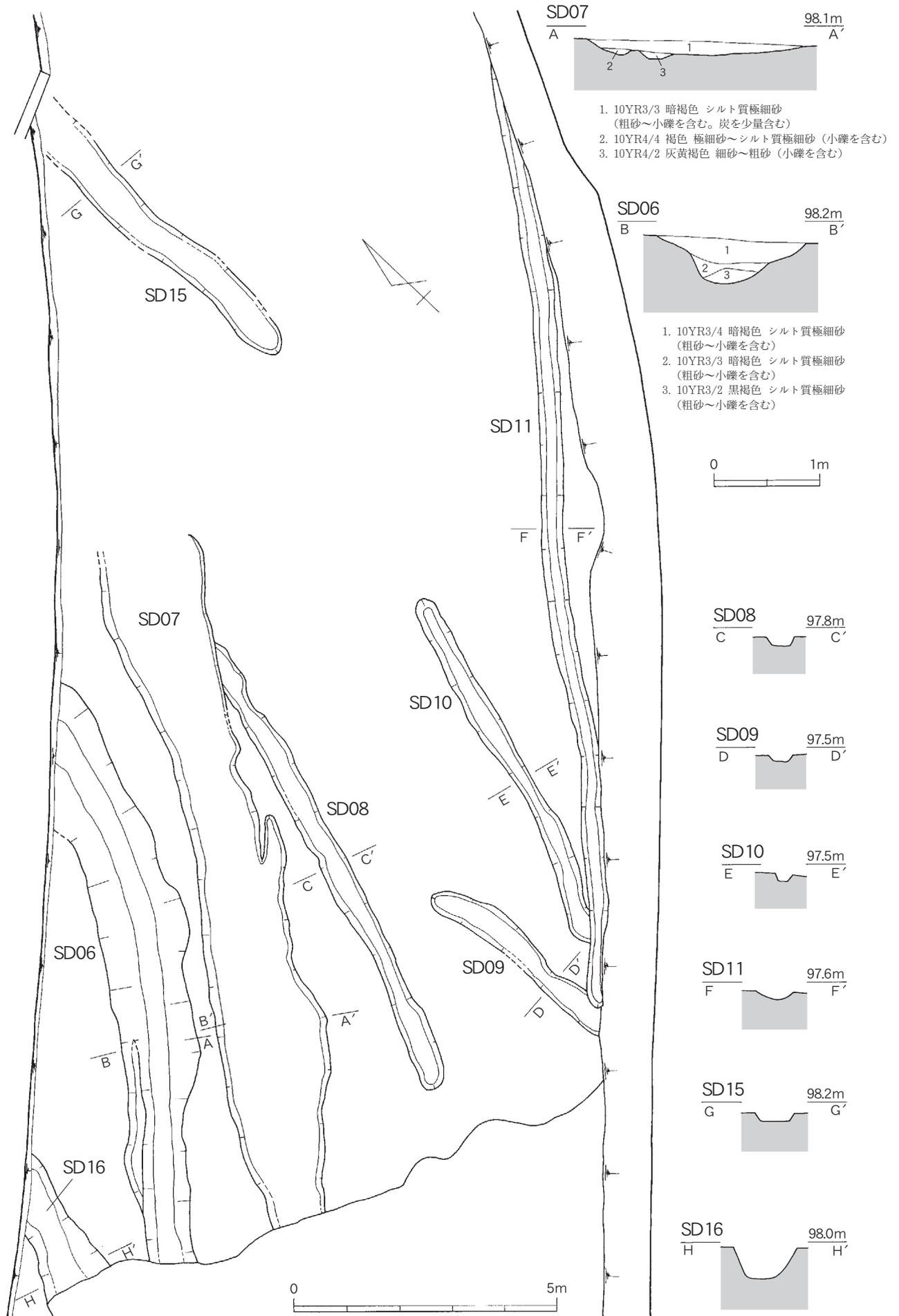
A地区



1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂 (粗砂～小礫を含む) 床土黄色土を含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂 (粗砂～小礫を含む) 包含層上層
3. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む。中礫を少量含む) 包含層上層
4. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む) 包含層上層
5. 10YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (粗砂～中礫を含む) 包含層下層
6. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
7. 10YR3/4 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂～シルト質極細砂 (粗砂～小礫を多く含む)



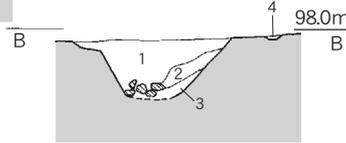
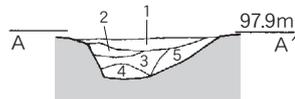
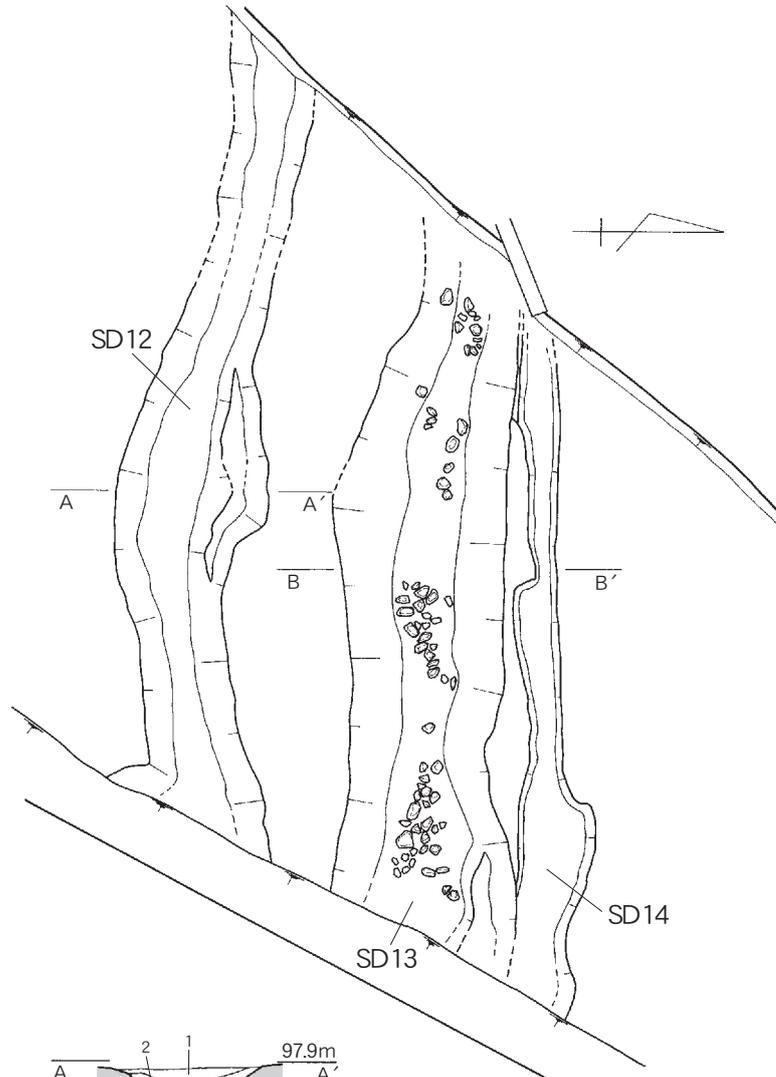
谷部溝群



SD06～11・15・16

A地区

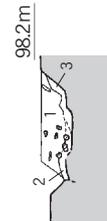
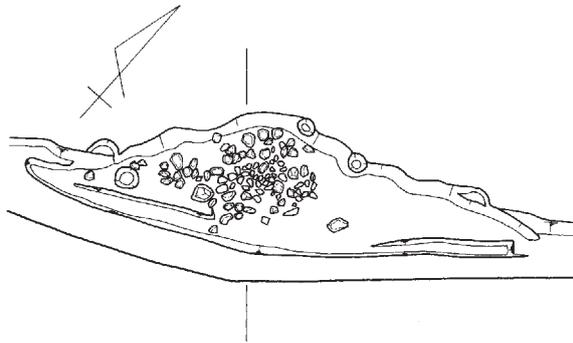
SD12~14



- 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫を含む)
- 2. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫・黄色土ブロックを含む)
- 3. 10YR3/4 暗褐色 シルト質極細砂~極細砂 (粗砂を含む。炭を少量含む)
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂~粗砂 (小礫を含む)
- 5. 10YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 (風倒木に攪乱土)

- 1. 10YR3/4 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫・炭を含む)
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫を含む)
- 3. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂を少量含む)
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫を含む)

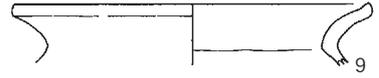
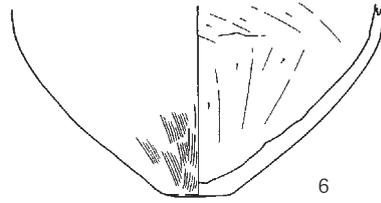
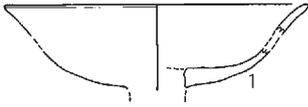
SX01



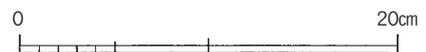
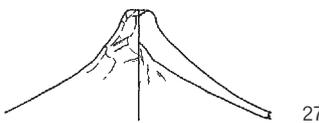
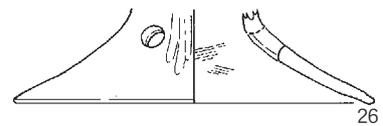
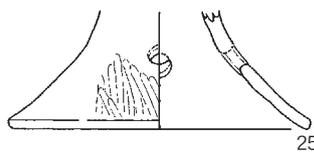
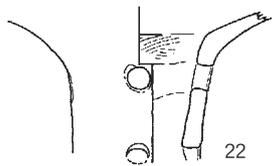
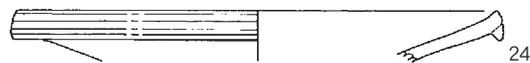
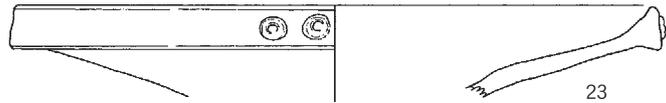
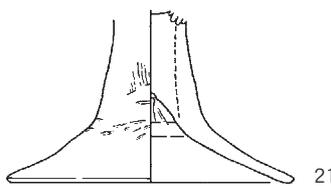
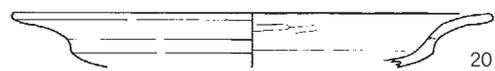
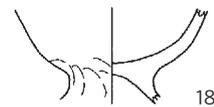
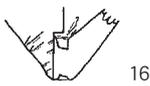
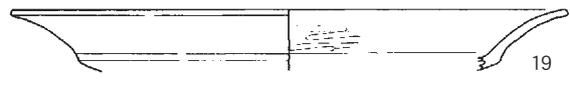
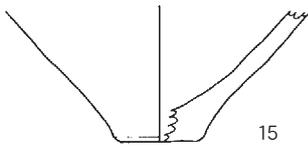
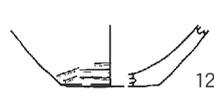
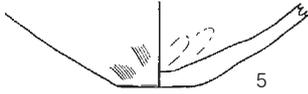
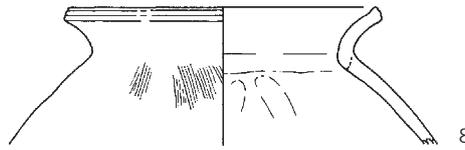
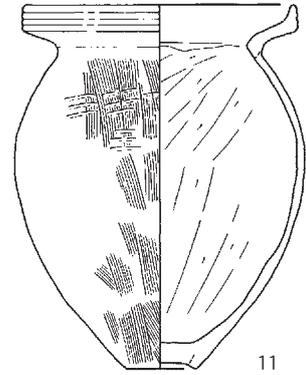
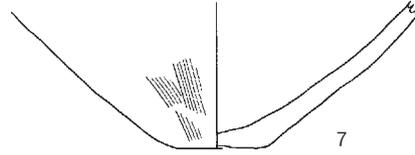
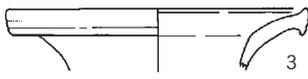
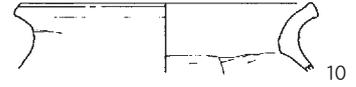
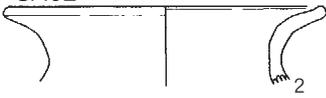
- 1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 (中~大礫を多く含む。焼土粒・炭を含む)
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂
- 3. 10YR4/4 褐色 中礫~粗砂

SD12~14、SX01

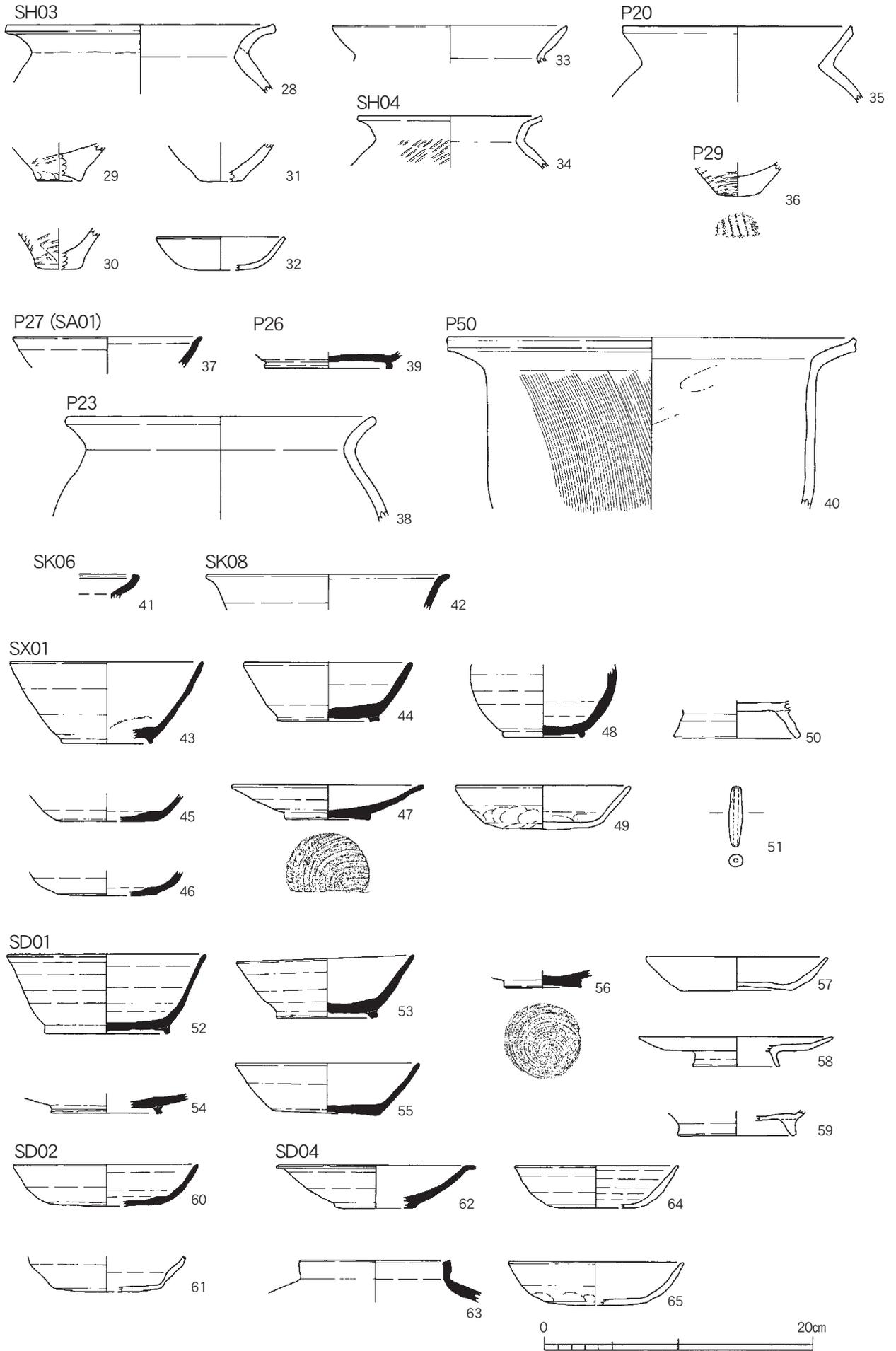
SH01



SH02

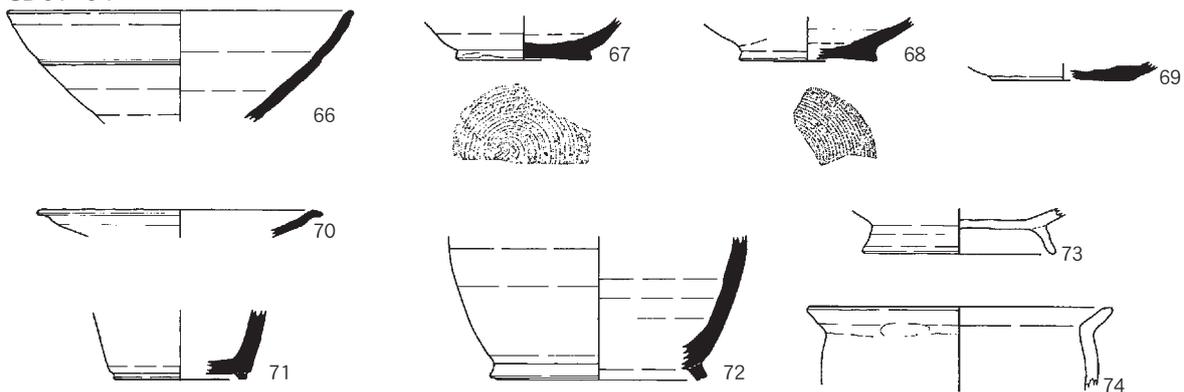


A地区

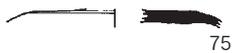


出土遺物(2)

SD01·04



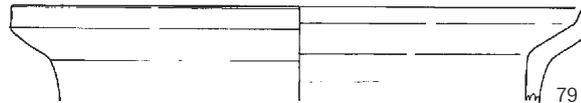
SD06



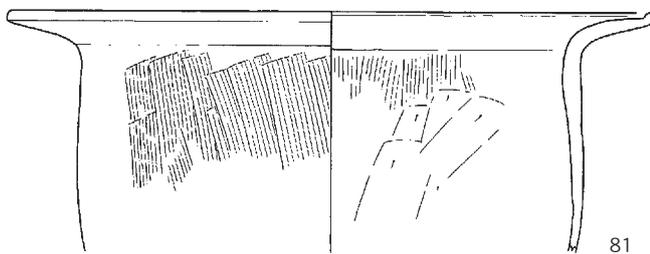
SD07



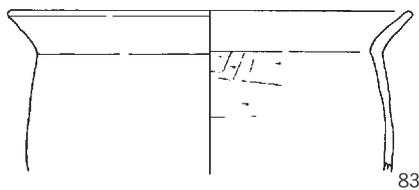
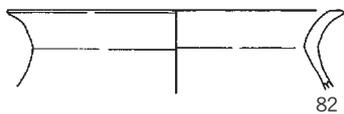
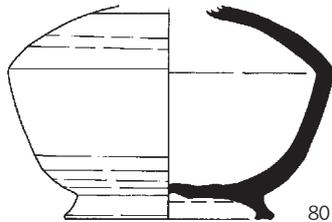
SD12



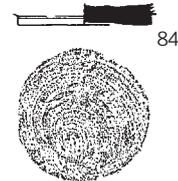
SD11



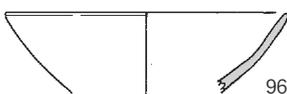
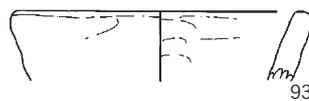
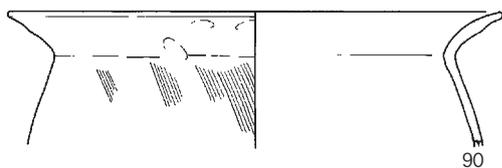
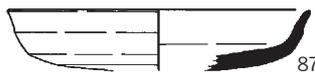
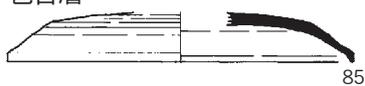
SD13



SD16



包含層



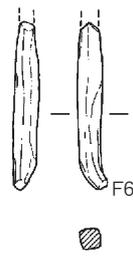
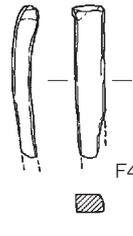
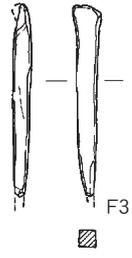
出土遺物(3)

A地区

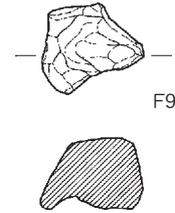
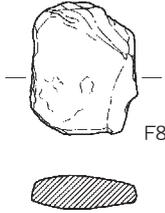
刀子



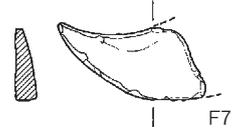
鉄釘



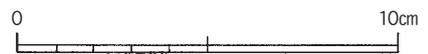
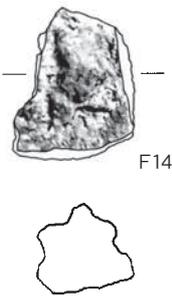
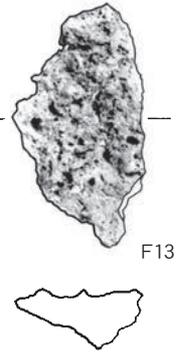
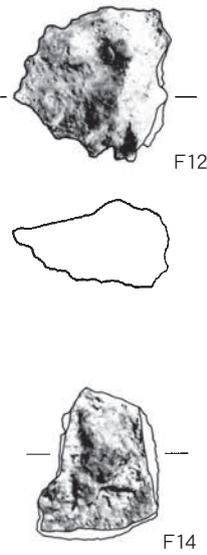
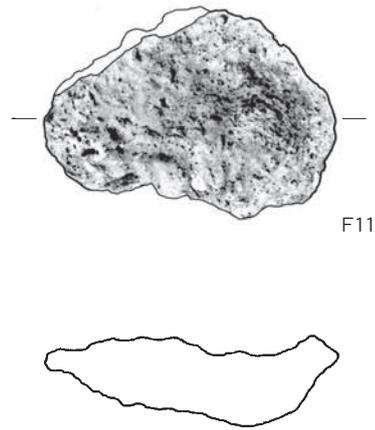
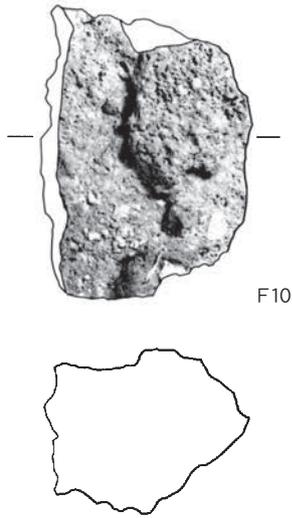
鉄塊



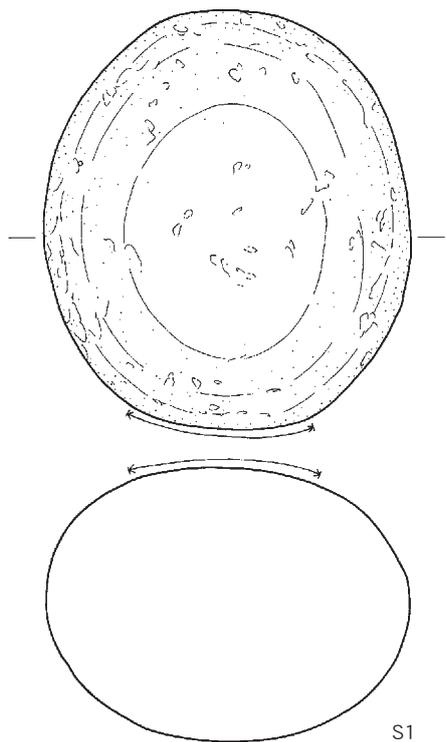
火打金



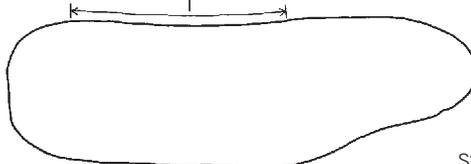
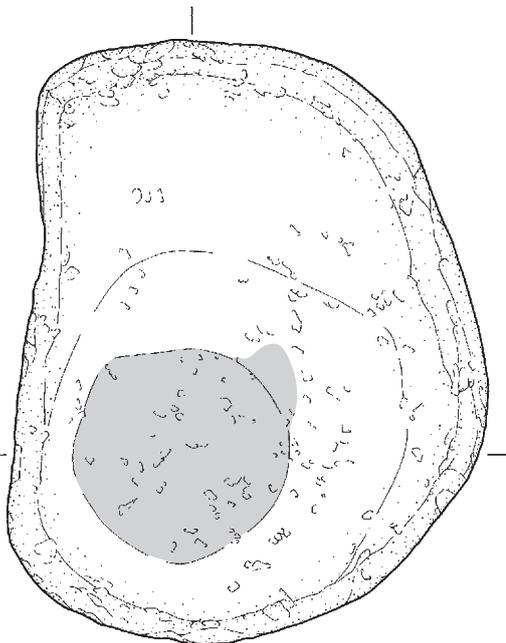
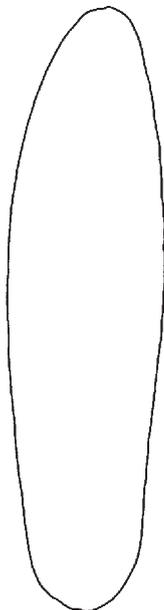
鉄滓



磨り石

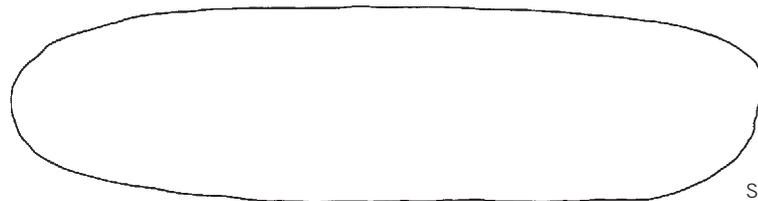
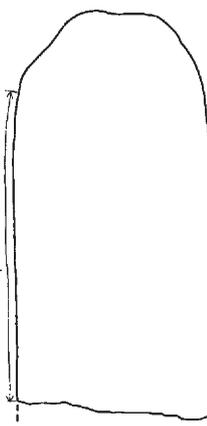
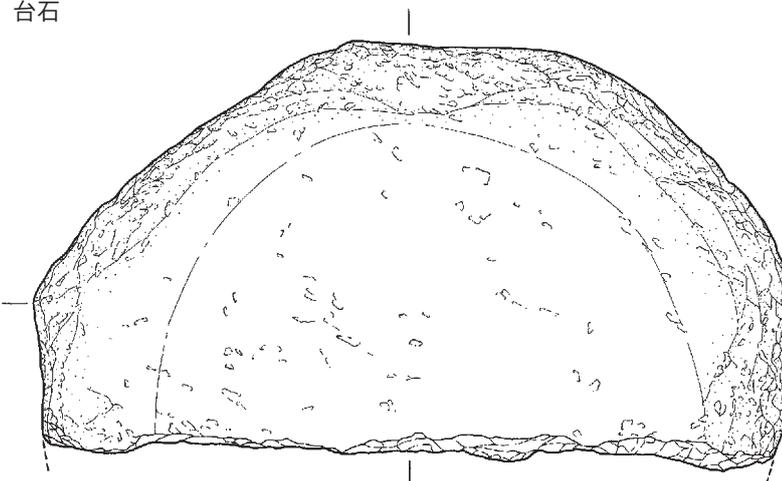


石臼

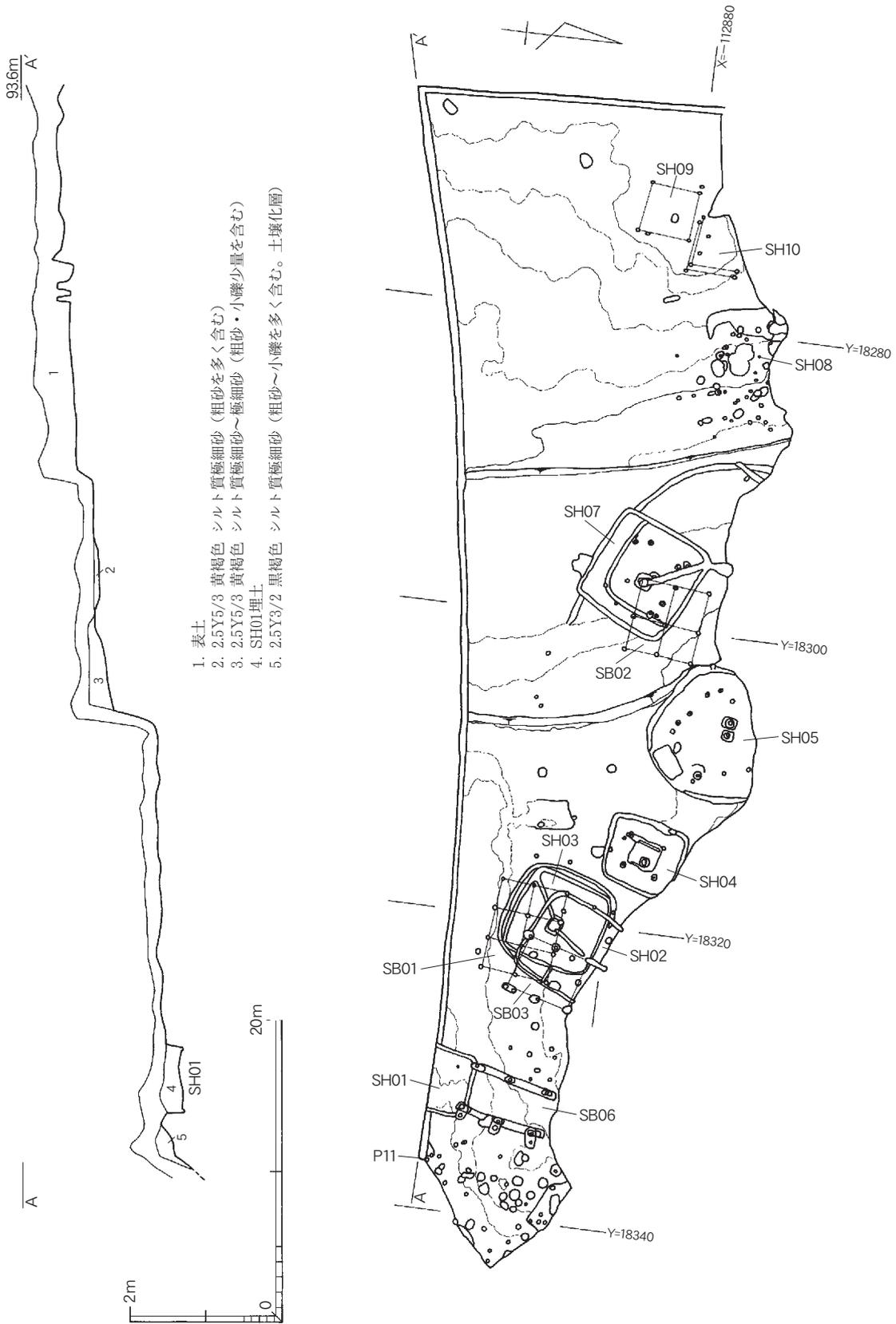


赤色顔料付着部分

台石

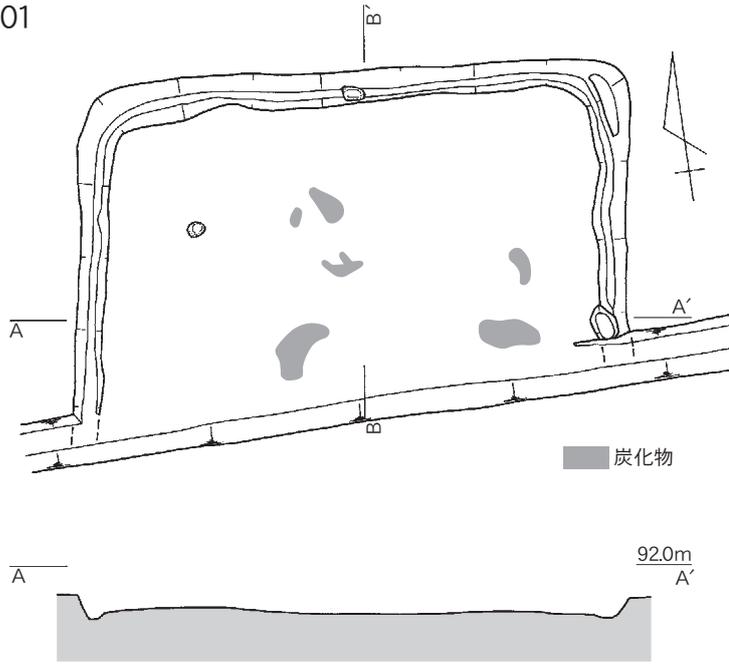


B地区



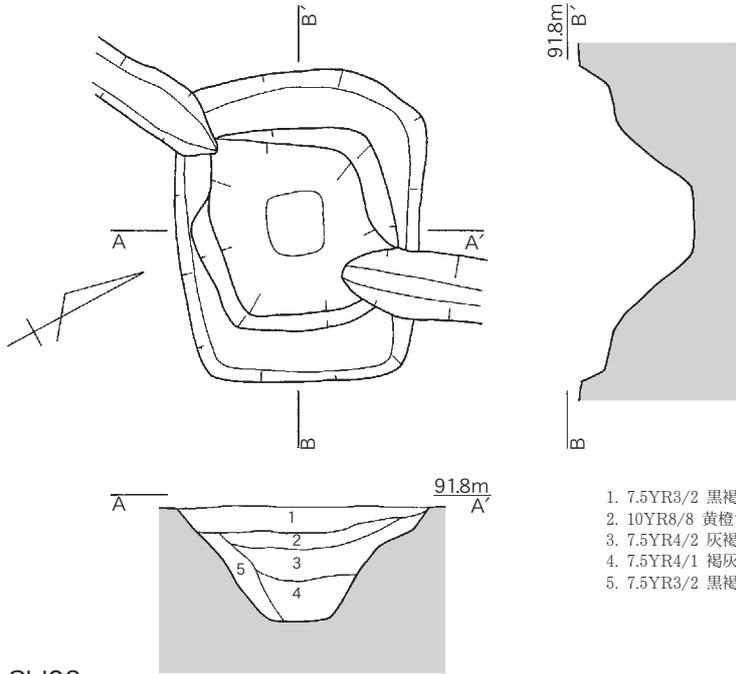
全体図

SH01



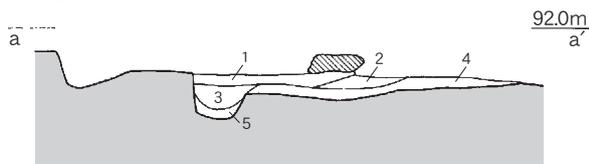
1. 10YR4/3 濃い黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫・地山ブロックを含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (小礫を含む)
3. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (小礫を含む)
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト質極細砂
5. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (炭化物多く含む)

SH03 中央土坑

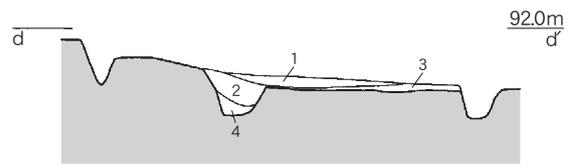


1. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト (小礫・黄色岩粒・粗砂含む)
2. 10YR8/8 黄褐色 シルト (黒色シルトブロック・小礫含む)
3. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (黄橙・黒褐色シルトブロック・小礫含む)
4. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂~粗砂 (径5cm大の礫含む)
5. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質極細砂~粗砂 (径5cm大の礫含む)

SH03



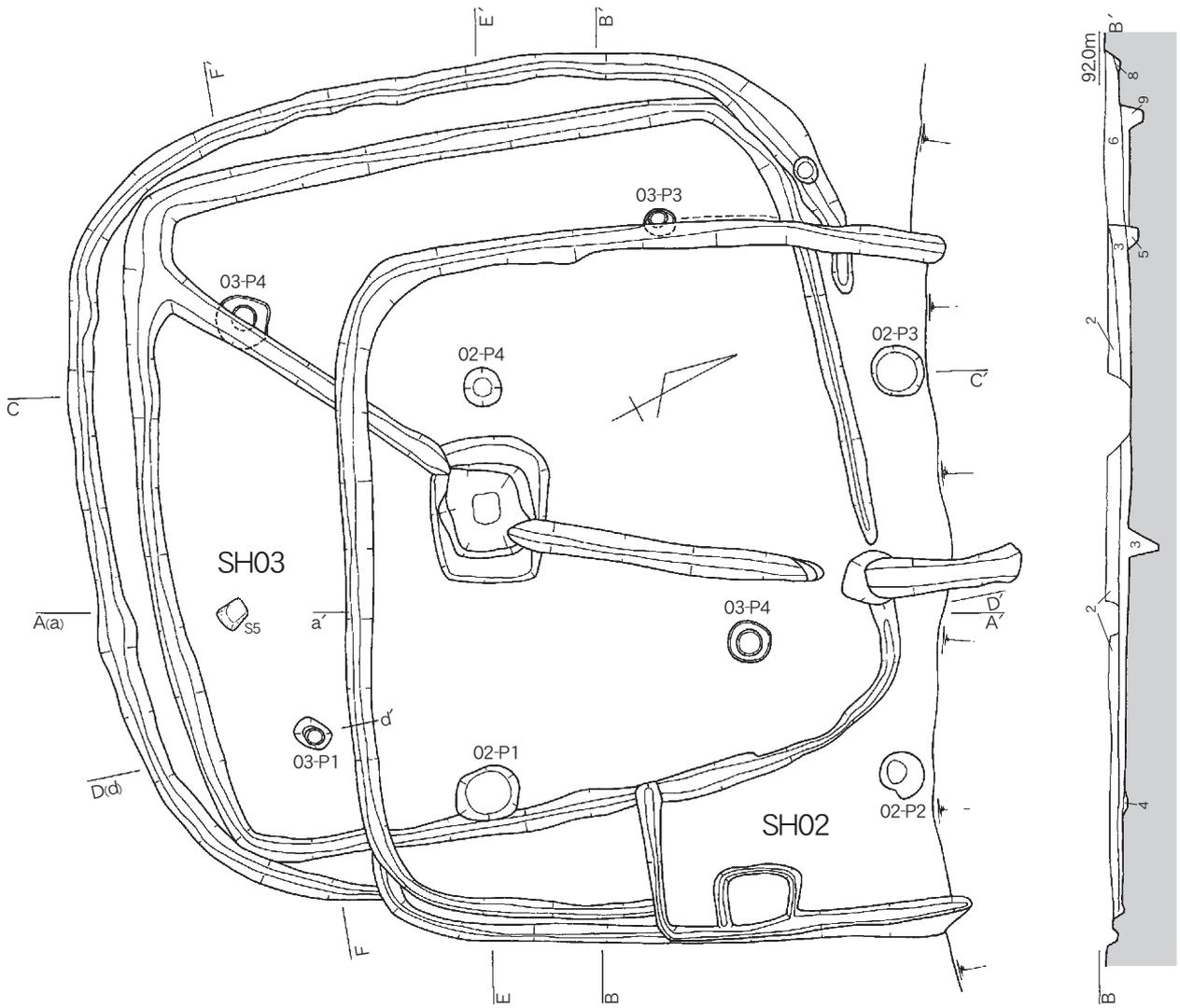
1. 10YR8/6 黄褐色 シルト ブロック状 (径2cm大の礫少量含む(貼床))
2. 10YR4/2 褐灰色 シルト (黄色シルト含む)
3. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄色シルトブロック含む)
4. 10YR2/1 黒色 シルト (黄橙色岩粒含む)
5. 2.5Y5/1 黄灰色 シルト (極細砂多く含む)



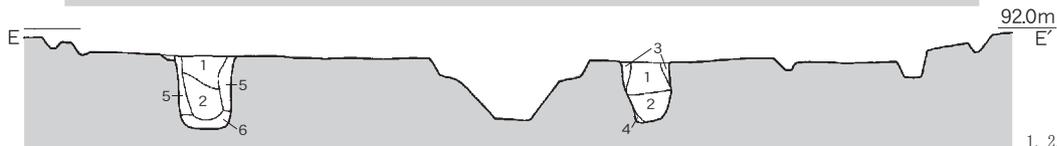
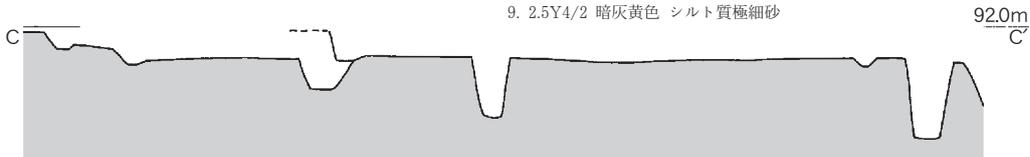
1. 10YR8/6 黄褐色 シルト質極細砂 (褐灰シルト含む(貼床))
2. 10YR8/6 黄褐色 シルト質極細砂 (褐灰シルト含む)
3. 10YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂
4. 10YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂 (黄褐色シルト粒含む)



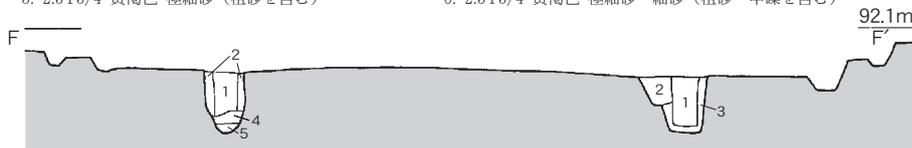
B地区



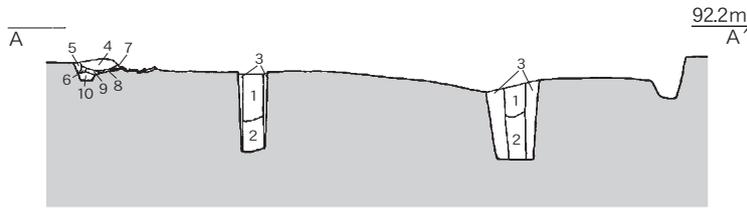
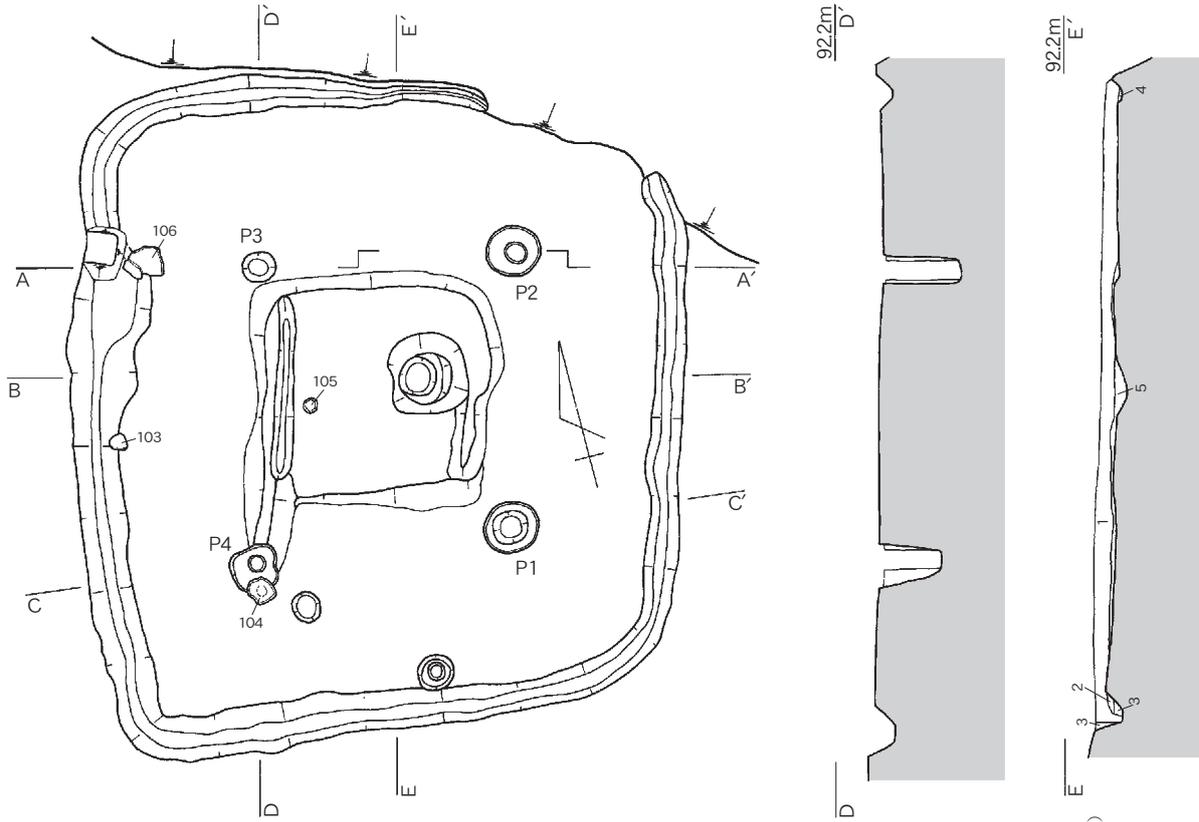
- 1. 壁面表土
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂 (小礫・黄色地山礫を含む)
- 3. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
- 4. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂 (根か?)
- 5. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂を含む)
- 6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫・黄色地山礫を含む)
- 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂を含む)
- 8. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト質極細砂
- 9. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂



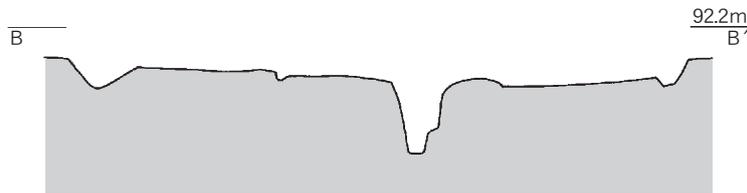
- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂 (粗砂～小礫を含む)
- 2. 2.5Y5/3 黄褐色 極細砂～細砂 (粗砂～中礫を含む)
- 3. 2.5Y5/4 黄褐色 極細砂 (粗砂を含む)
- 4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト質極細砂
- 5. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
- 6. 2.5Y5/4 黄褐色 極細砂～細砂 (粗砂～中礫を含む)
- 7. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂を含む。炭を少量含む)
- 8. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
- 9. 5Y6/2 灰オリーブ 細砂～極細砂
- 10. 2.5Y5/4 黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
- 11. 10YR5/6 黄褐色 細砂～中砂



SH0203



- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| 1. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄橙色岩粒含む) | 6. 10YR2/2 黒褐色 シルト |
| 2. 10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6黄橙色シルト混層) | 7. 10YR2/2 黒褐色 シルト (極細砂含む) |
| 3. 10YR4/1 褐灰色 シルト (10YR8/6黄橙色シルト混層) | 8. 5B6/1 青灰色 シルト (極細砂含む) |
| 4. 10YR8/6 黄橙色 シルト | 9. 10YR8/8 黄橙色 砂質シルト (小礫多く含む) |
| 5. 10YR3/1 黒褐色 シルト (極細砂多く含む) | 10. 10YR7/4 にぶい黄褐色 砂質シルト (小礫含む) |

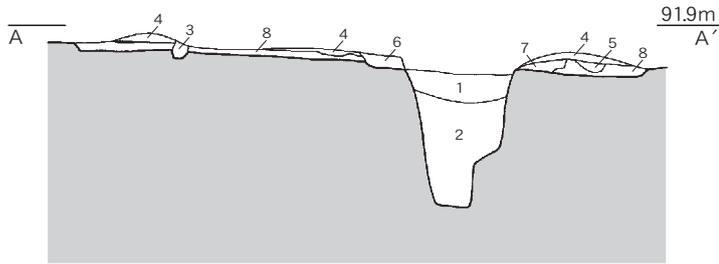
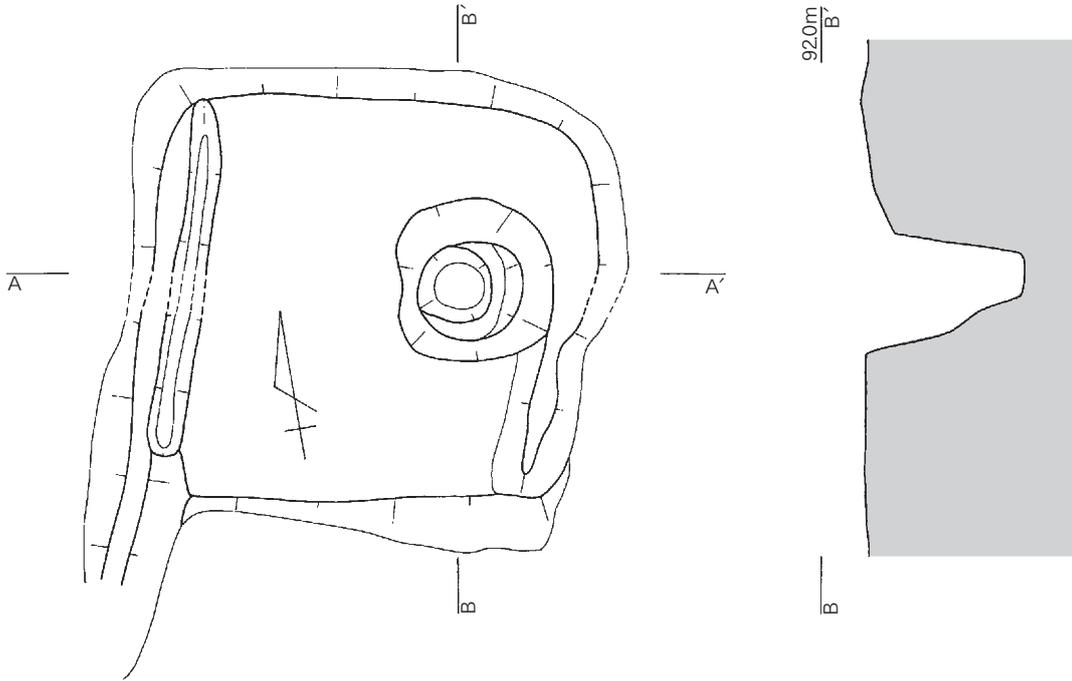


- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄橙色岩粒含む) | 5. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄橙色シルト含む) |
| 2. 10YR3/1 黒褐色 シルト | 6. 10YR8/8 黄橙色 シルト (褐灰色シルト含む) |
| 3. 10YR2/1 黒色 シルト (10YR8/8黄橙色シルト混層) | 7. 10YR8/8 黄橙色 シルト (褐灰色シルトブロック状に含む) |
| 4. 10YR8/8 黄橙色 シルト (褐灰色シルト少量含む) | |

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂 (粗砂~小礫・地山ブロック含む)
 2. 2.5Y6/4 にぶい黄色 シルト質極細砂
 3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト質極細砂
 4. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂 (粗砂~小礫含む)土壌化
 5. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂 (中央土坑)



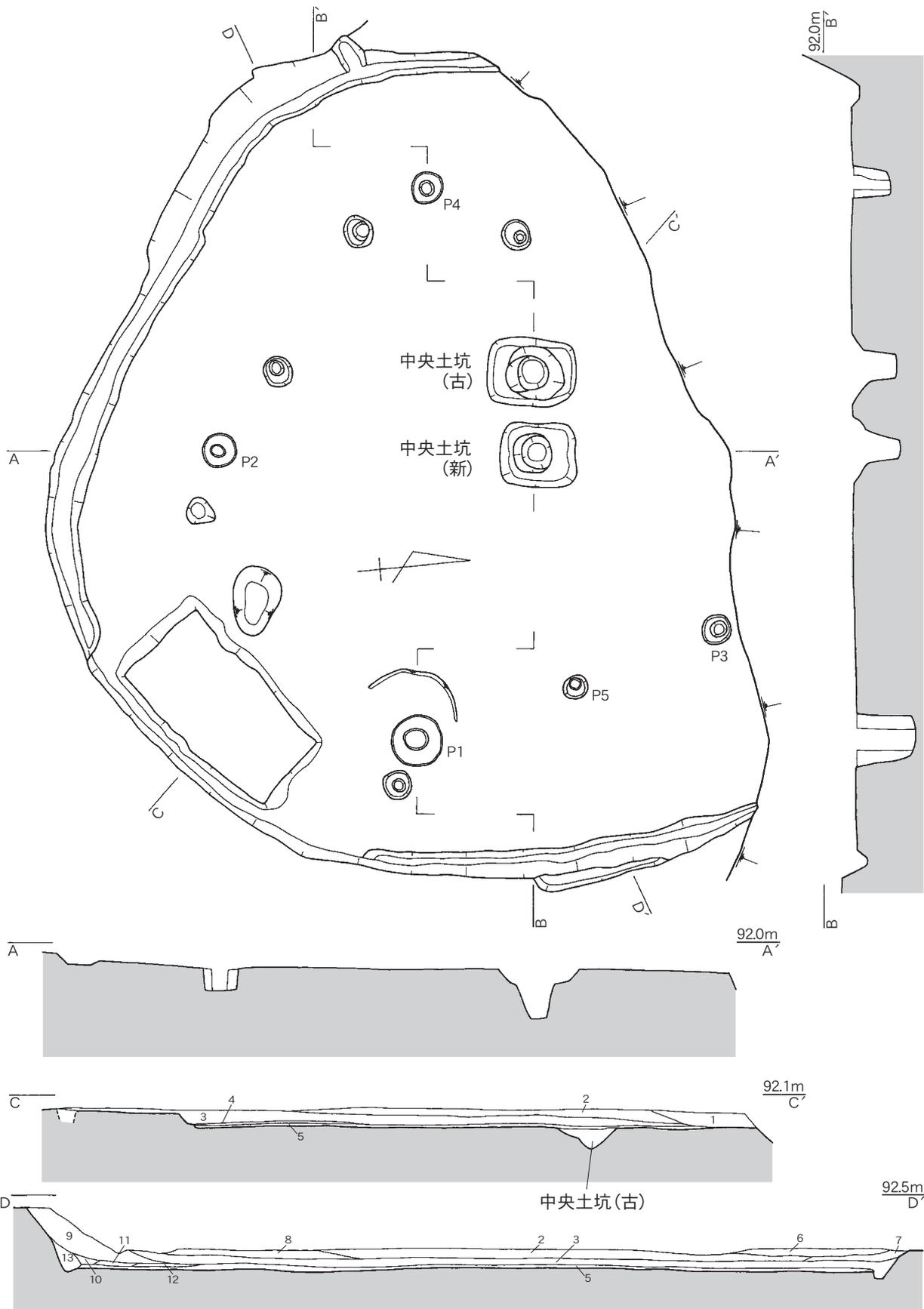
B地区



- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 (粗砂・小礫・炭化物含む)
- 2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 極細砂 (粗砂・炭化物含む)
- 3. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂
- 4. 10YR8/8 黄橙色 シルト質極細砂
- 5. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂
- 6. 10YR3/1 黒褐色 シルト (10YR8/8黄橙色シルト混層)
- 7. 10YR8/8 黄橙色 シルト質極細砂 (根による攪乱)
- 8. 10YR8/8 黄橙色 シルト質極細砂 (地山)

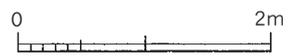


SH 0 4 中央土坑



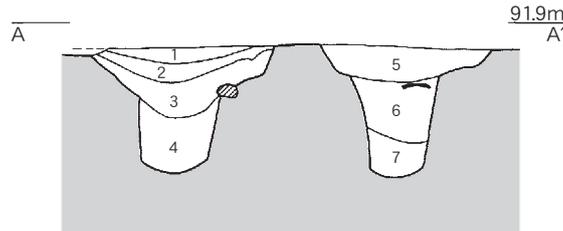
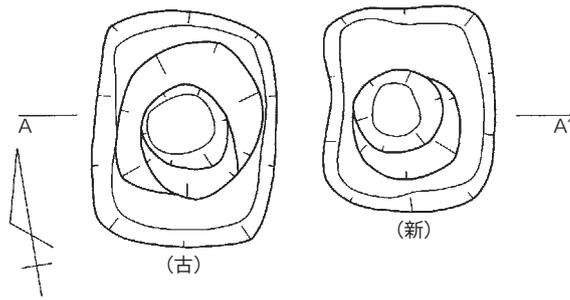
- 1. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (砂礫・黄色岩粒・粗砂多く含む)
- 2. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト (砂礫・黄色岩粒・粗砂多く含む)
- 3. 10YR3/2 黒褐色 シルト (砂礫・黄色岩粒・粗砂・炭化物・焼土多く含む)
- 4. 炭化物層
- 5. 7.5YR7/8 黄橙色 細砂 (貼床)
- 6. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (小礫多く含む)
- 7. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (径5cmまでの礫・粗砂~極細砂含む)
- 8. 10YR7/8 黄橙色 シルト (10YR4/2灰黄褐色シルト混層。粗砂・小礫含む)

- 9. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト (径1cmの小礫・黄橙色岩粒・粗砂多く含む)
- 10. 7.5YR5/1 褐灰色 シルト (小礫・粗砂含む)
- 11. 10YR8/6 黄橙色 極細砂 (灰色シルト混層)
- 12. 10YR5/1 褐灰色 極細砂 (上面に黄橙シルト(貼床?))
- 13. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト (黒褐シルト混層)



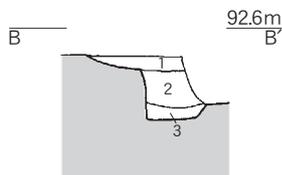
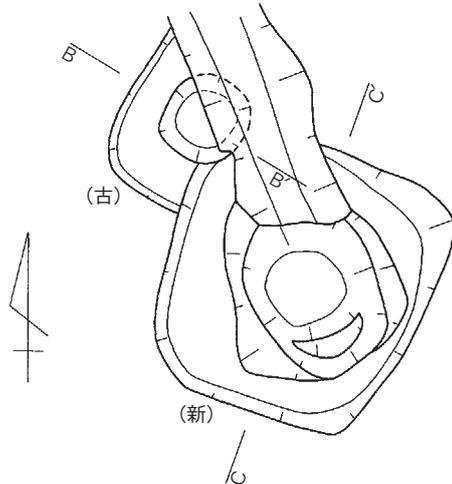
B地区

SH05 中央土坑

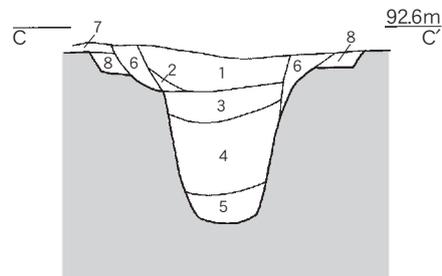


1. 10YR4/1 褐灰色 シルト (炭化物・焼土多く含む)
2. 10YR8/6 黄橙色 シルト (小礫含む)
3. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄橙色シルト少量・径2cm大までの礫含む)
4. N4/ 灰色 砂礫 (黒褐・黄橙色シルト含む)
5. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト (小礫・極細砂～中砂多く含む)
6. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト (径5cm大の礫少量・極細砂～細砂・焼土炭化物多く含む)
7. 10YR4/1 褐灰色 シルト (粗砂までの砂多量・黄色岩粒含む)

SH07 中央土坑



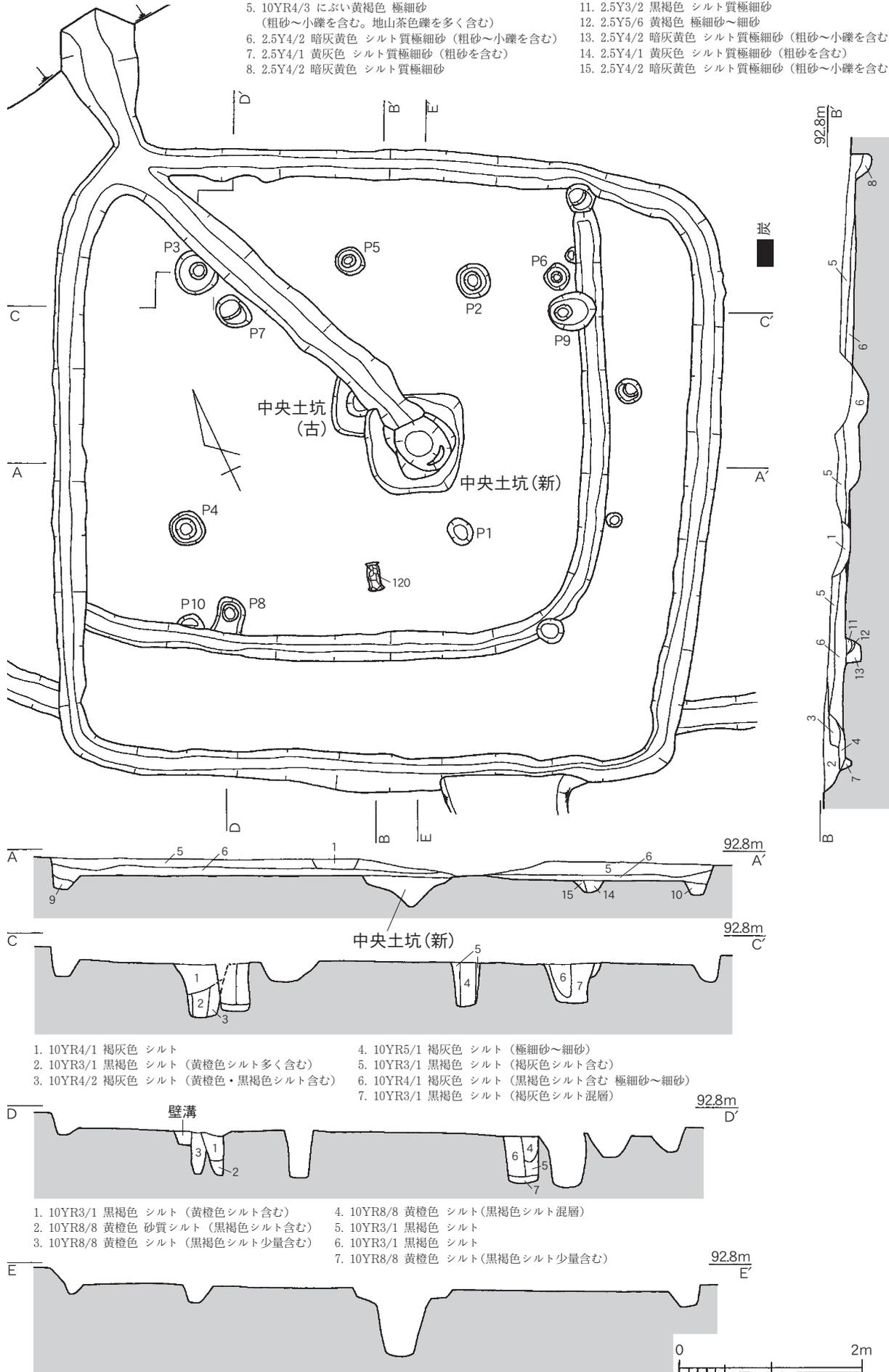
1. 10YR6/1 褐灰色 シルト (浅黄橙色岩粒多く含む)
2. 10YR8/4 浅黄橙色 岩粒 (黒色シルトブロック含む)
3. 10YR2/1 黒色 シルト (褐灰色シルト含む)



1. 7.5YR5/1 褐灰色 極細砂 (黄色岩粒含む)
2. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト (黄橙色シルト混層)
3. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (黄色岩粒・小礫・極細砂含む)
4. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (黄色岩粒・小礫・極細砂・黒色シルトブロック含む)
5. 10YR6/1 褐灰色 シルト (黄色細砂ブロック含む)
6. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト (黄色シルトブロック含む)
7. 10YR8/8 黄橙色 シルト (黒色シルト含む 極細砂)
8. 10YR8/8 黄橙色 シルト (褐灰色シルト混層)



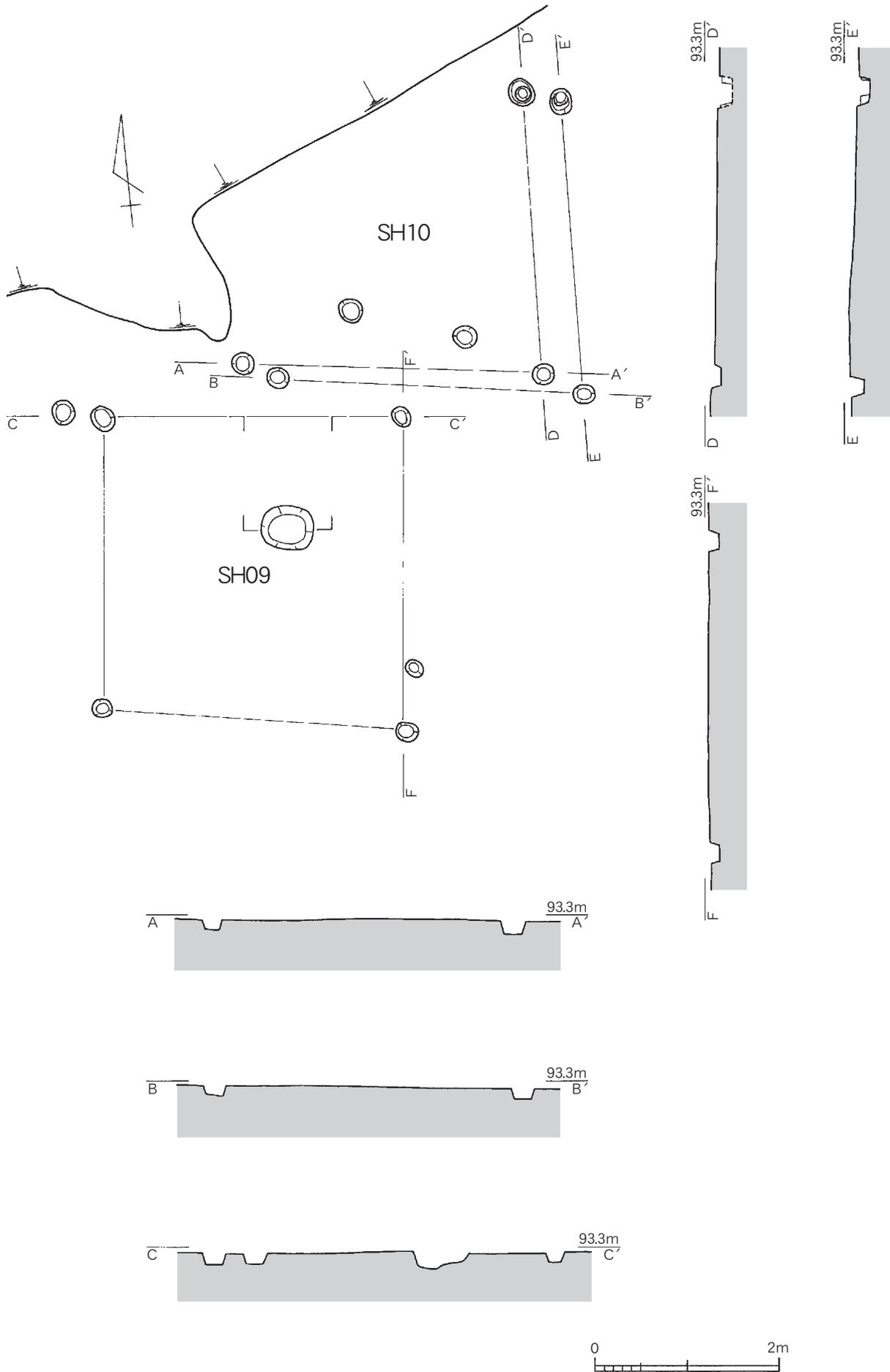
1. 攪乱
2. 2.5Y5/3 黄褐色 極細砂 (粗砂～小礫を含む) SH06上溝
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細砂～シルト質極細砂 (粗砂～小礫・炭を含む)
4. 炭
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂 (粗砂～小礫を含む。地山茶色礫を多く含む)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
7. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂 (粗砂を含む)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
11. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質極細砂
12. 2.5Y5/6 黄褐色 極細砂～細砂
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)
14. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂 (粗砂を含む)
15. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む)



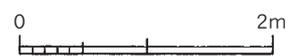
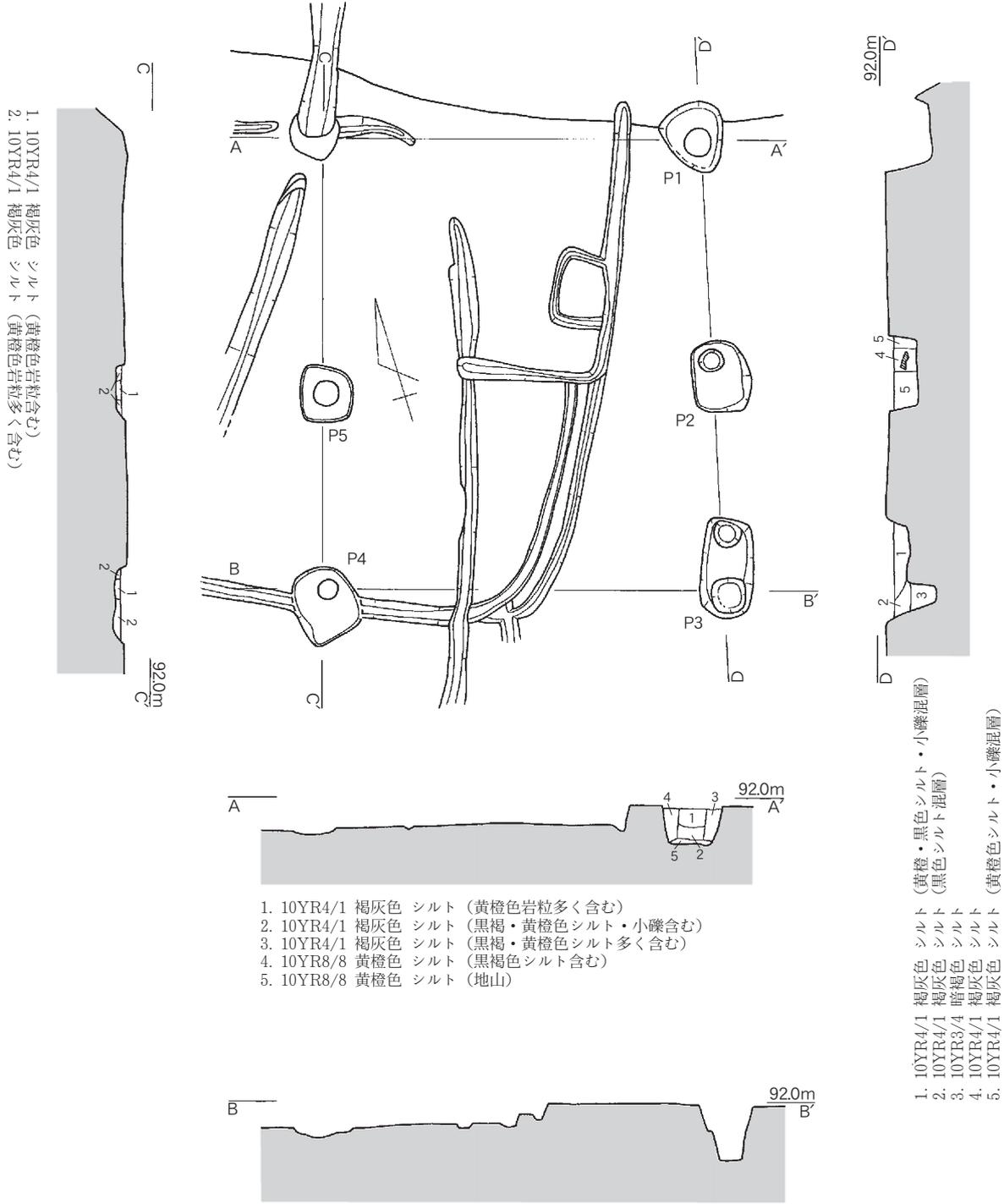
1. 10YR4/1 褐灰色 シルト
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄橙色シルト多く含む)
3. 10YR4/2 褐灰色 シルト (黄橙色・黒褐色シルト含む)
4. 10YR5/1 褐灰色 シルト (極細砂～細砂)
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト (褐灰色シルト含む)
6. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黒褐色シルト含む 極細砂～細砂)
7. 10YR3/1 黒褐色 シルト (褐灰色シルト混層)

1. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄橙色シルト含む)
2. 10YR8/8 黄橙色 砂質シルト (黒褐色シルト含む)
3. 10YR8/8 黄橙色 シルト (黒褐色シルト少量含む)
4. 10YR8/8 黄橙色 シルト (黒褐色シルト混層)
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト
6. 10YR3/1 黒褐色 シルト
7. 10YR8/8 黄橙色 シルト (黒褐色シルト少量含む)

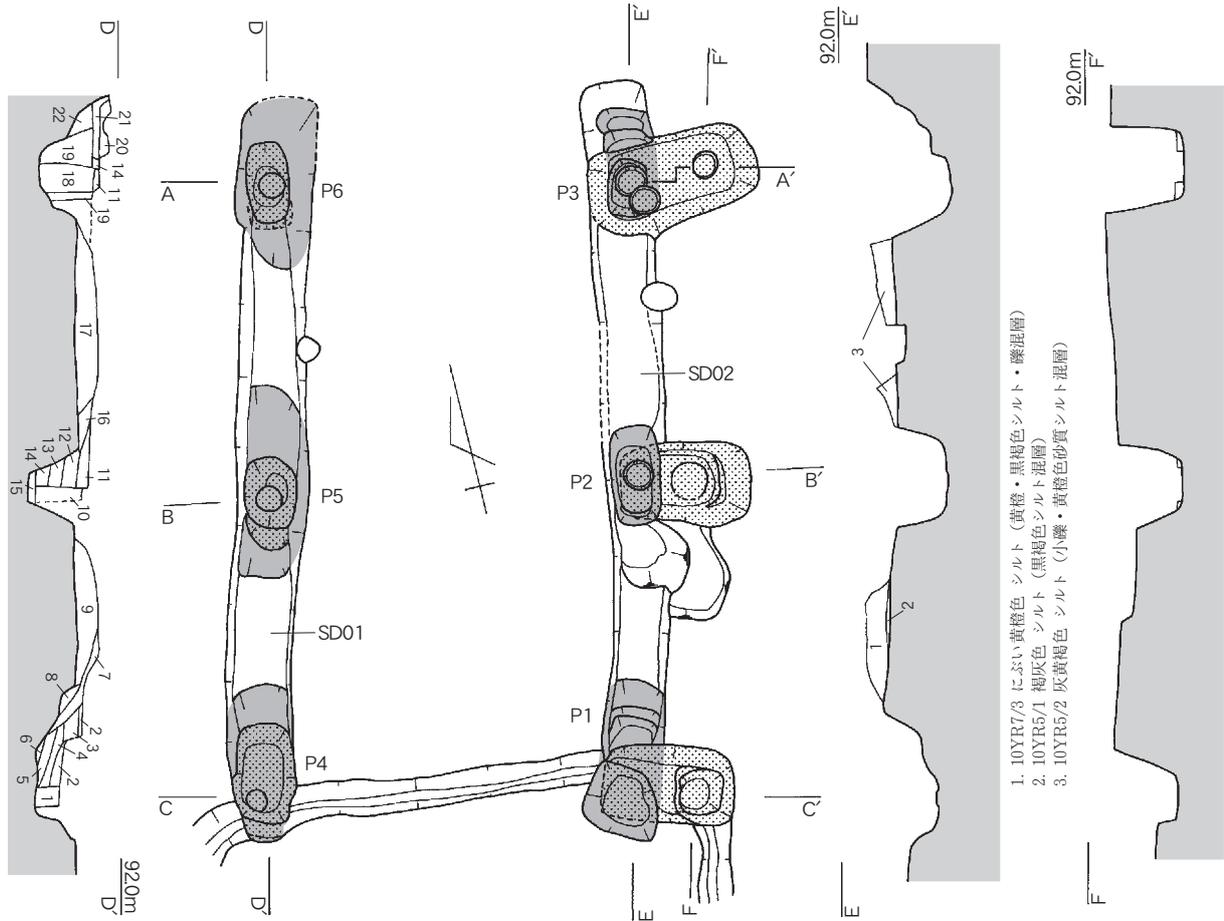
B地区



SH09·10



B地区



- 1. 10YR7/3 にぶい黄褐色 シルト (黄橙・黒褐色シルト・礫混層)
- 2. 10YR5/1 褐灰色 シルト (黒褐色シルト混層)
- 3. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト (小礫・黄褐色砂質シルト混層)

- 1. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄褐色シルト混層)
- 2. 10YR8/6 黄褐色 シルト (粗灰色シルト含む。小礫混層)
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト (黄褐色岩粒含む)
- 4. 10YR8/6 黄褐色 シルト
- 5. 10YR3/1 黒褐色 シルト
- 6. 10YR8/6 黄褐色 シルト
- 7. 10YR6/1 褐灰色 シルト (黄褐色シルト・小礫含む)
- 8. 10YR5/1 褐灰色 シルト

- 9. 10YR5/1 褐灰色 シルト (黄褐色シルト混層)
- 10. 10YR3/1 黒褐色 シルト
- 11. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄褐色岩粒・小礫含む)
- 12. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
- 13. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
- 14. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
- 15. 10YR8/8 黄褐色 シルト
- 16. 10YR5/1 褐灰色 シルト (黄褐色シルト・小礫混層)
- 17. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト (小礫・粗砂・黄褐色シルト混層)
- 18. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄褐色シルト混層)
- 19. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト (黒褐色シルト混層)
- 20. 10YR6/1 褐灰色 シルト (黄褐色シルト混層。粗砂・礫多く含む)
- 21. 10YR3/1 黒褐色 シルト
- 22. 10YR3/2 黒褐色 シルト (粗灰色シルト・礫少量含む)



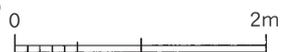
- 1. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄褐色岩粒・小礫多量に含む)
- 2. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄褐色岩粒・小礫含む)
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト (褐灰色シルト・小礫含む)
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
- 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト (褐灰色シルト・小礫少量含む)
- 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
- 7. 10YR8/6 黄褐色 シルト (小礫・細砂〜粗砂含む)
- 8. 10YR4/1 褐灰色 シルト



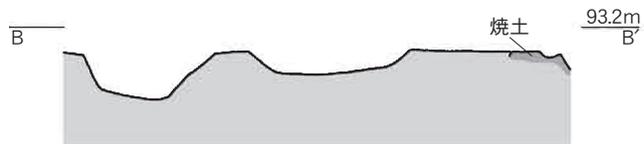
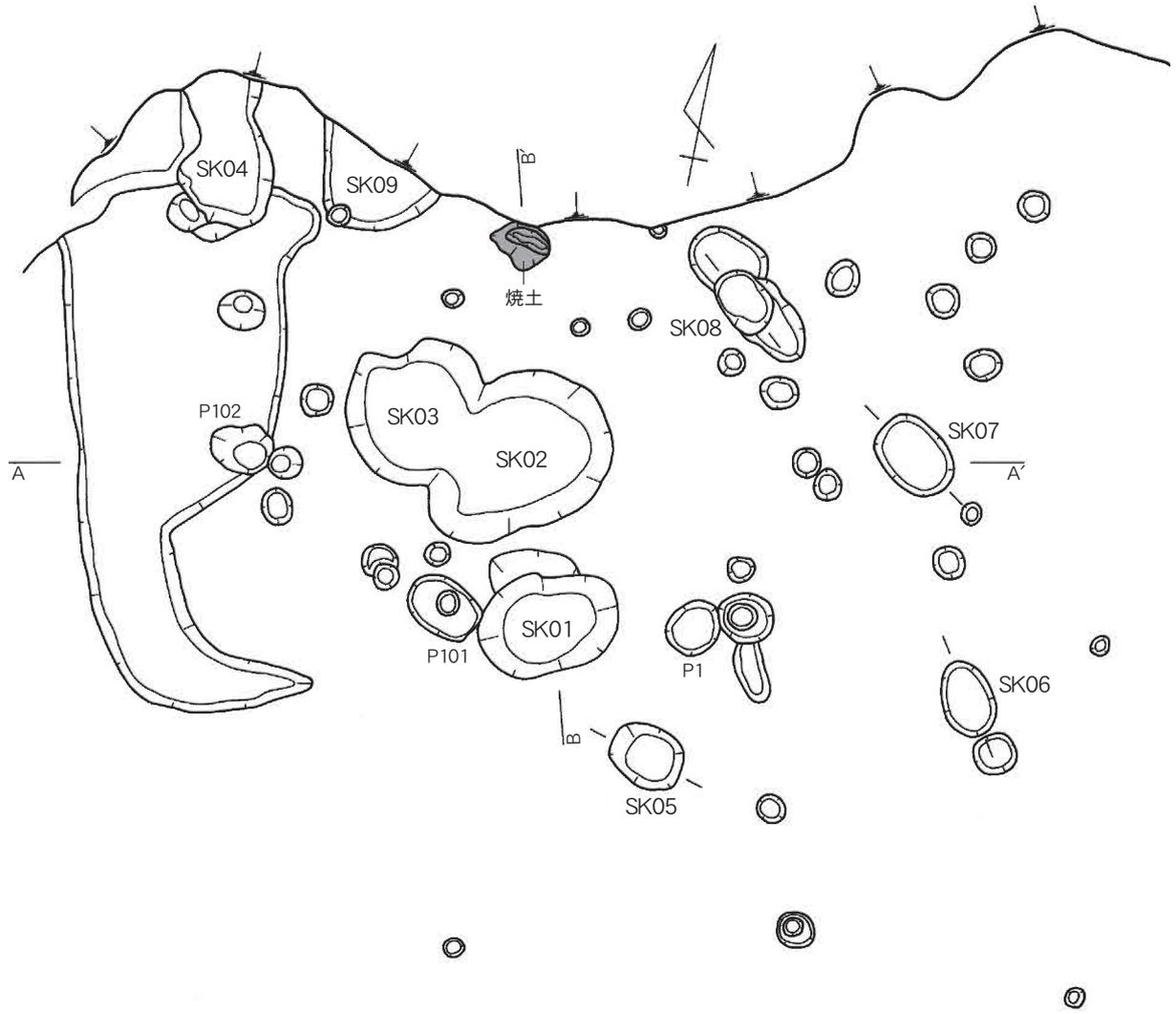
- 1. 10YR4/1 褐灰色 シルト (黄褐色岩粒・小礫含む)
- 2. 10YR4/1 褐灰色 シルト
- 3. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄褐色シルト・小礫含む)
- 4. 10YR8/6 黄褐色 シルト (褐灰色シルトとの混層)
- 5. 10YR8/6 黄褐色 シルト (黒色シルト・小礫多く含む)
- 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト (黒色シルト・小礫含む)
- 7. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト



- 1. 10YR2/1 黒色 シルト
- 2. 10YR8/6 黄褐色 シルト (褐灰色シルト・黄色岩粒の混層)
- 3. 10YR3/1 黒褐色 シルト (黄褐色シルト混層)
- 4. 10YR2/1 黒色 シルト (黄褐色シルト含む)

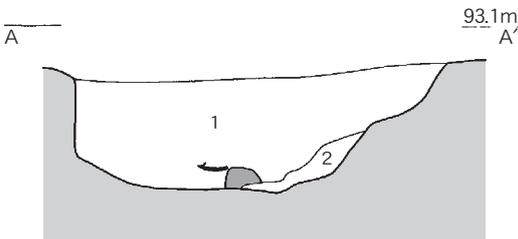
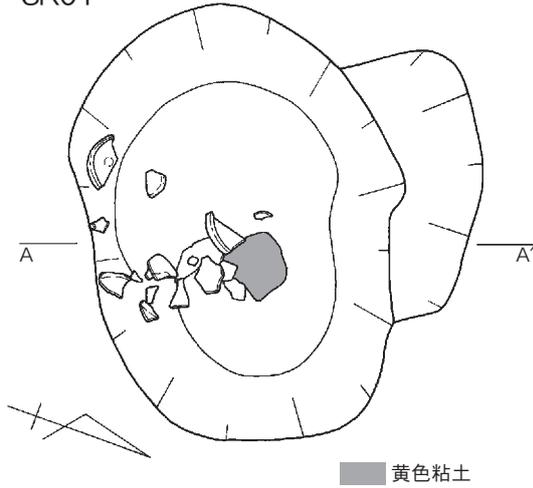


SB06



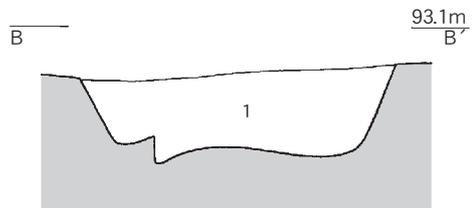
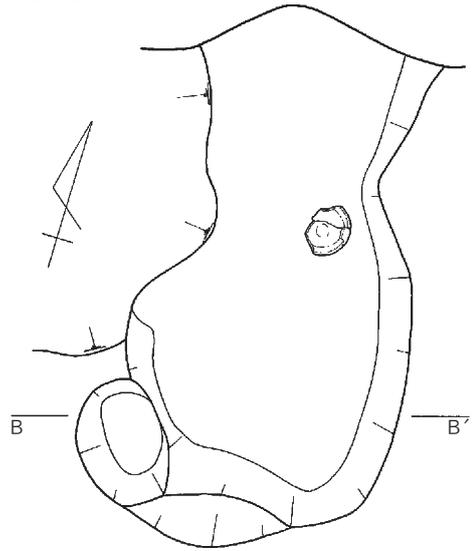
B地区

SK01



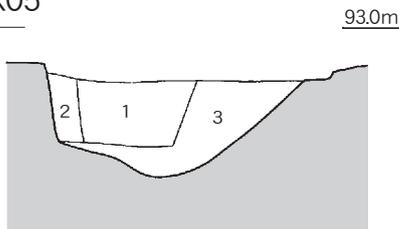
- 1. 10YR8/8 黄橙色 極細砂 (黒褐色シルト含む)
- 2. 10YR4/1 褐灰色 シルト (極細砂含む)

SK04



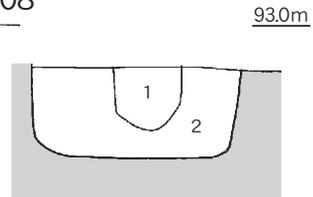
- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂 (黄色細砂ブロック少量含む)

SK05



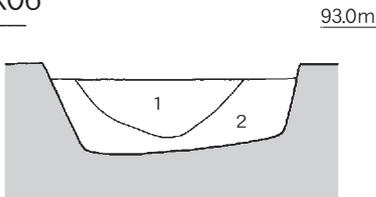
- 1. 7.5YR5/2 灰褐色 シルト (黒色・黄橙色シルトブロック含む)
- 2. 2.5Y8/6 黄色 シルト (灰褐色・黒色シルトブロック含む)
- 3. 7.5YR5/2 灰褐色 シルト

SK08



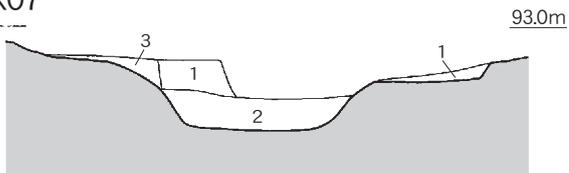
- 1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト (黄橙色ブロック含む)
- 2. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト (黄橙色ブロック含む)

SK06



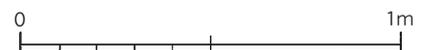
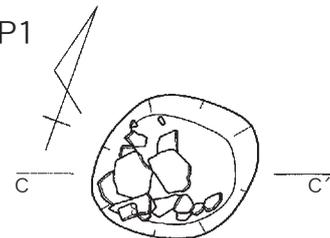
- 1. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト
- 2. 7.5YR2/1 黒色 シルトブロック (黄色砂質ブロック含む)

SK07

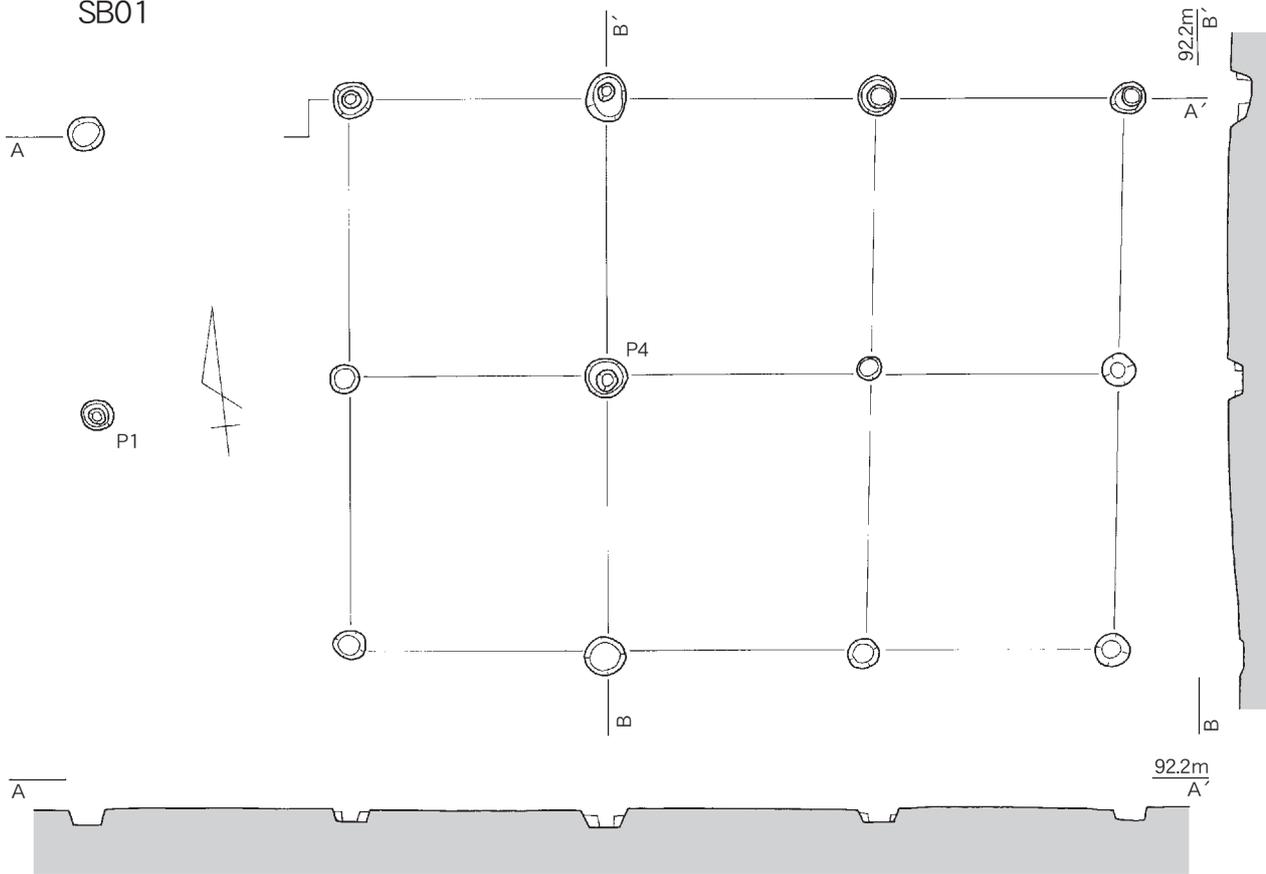


- 1. 7.5YR2/1 黒色 シルト (黄灰色極細砂ブロック含む)
- 2. 7.5YR1/1 黒色 シルト
- 3. 7.5YR2/1 黒色 シルト (黄色極細砂ブロック多く含む)

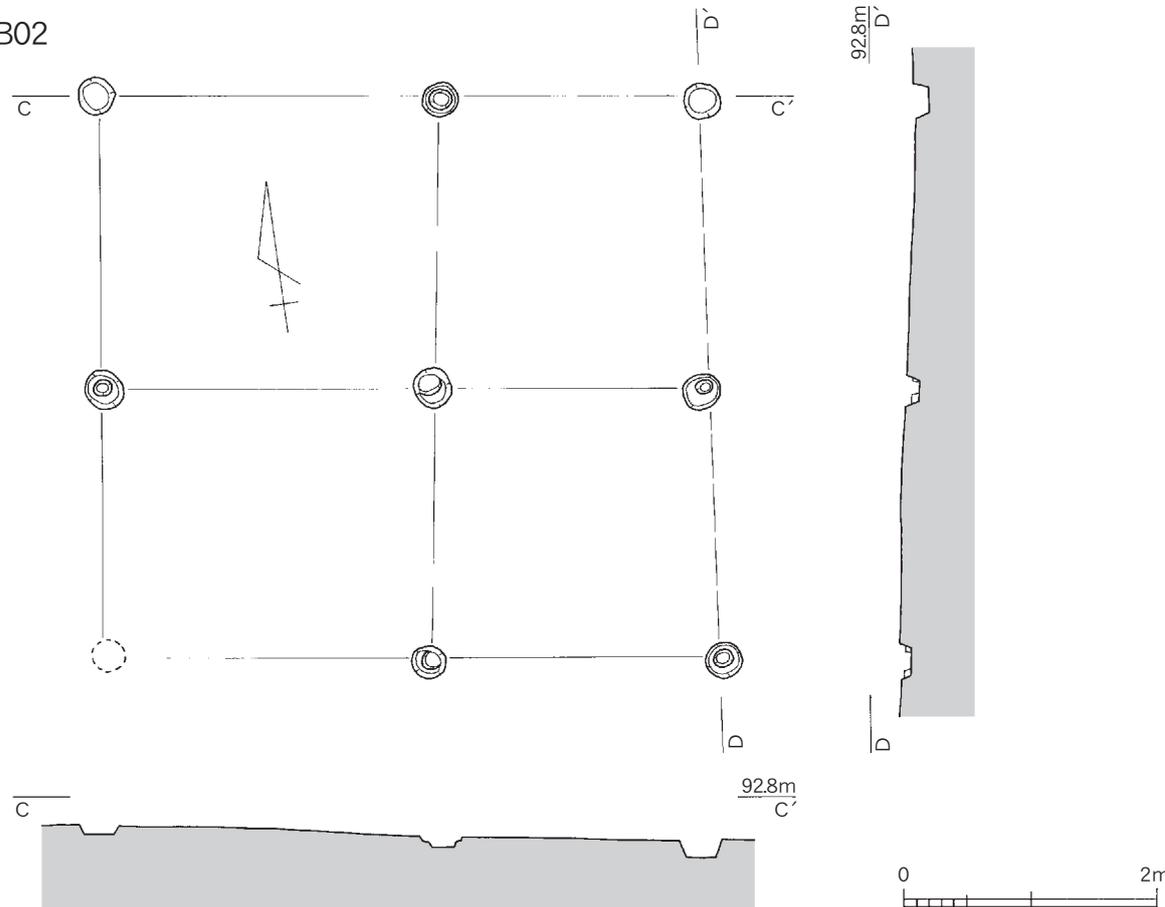
P1



SB01



SB02

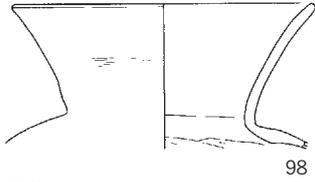
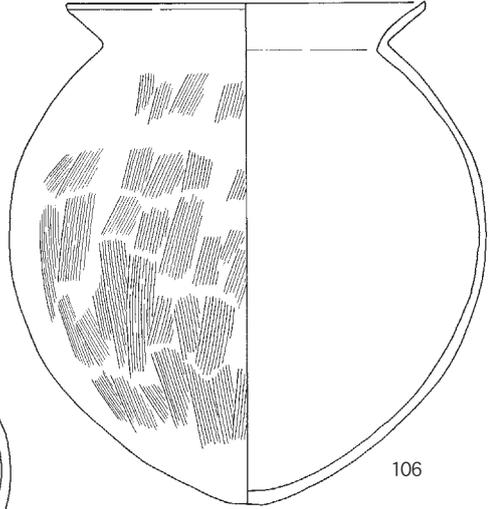
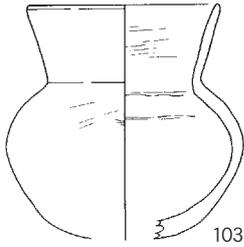


B地区

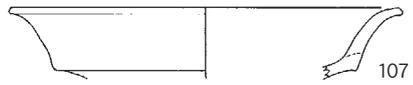
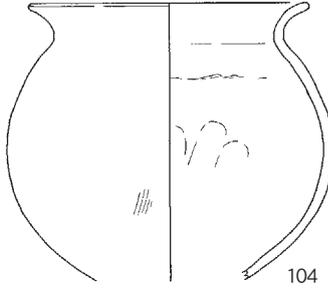
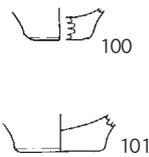
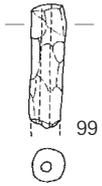
SH01



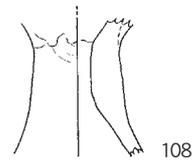
SH04



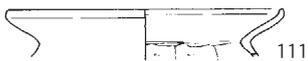
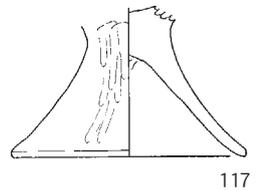
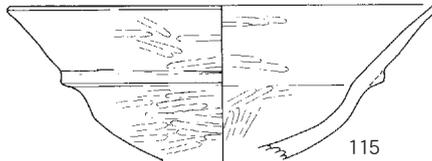
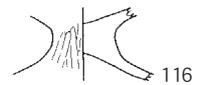
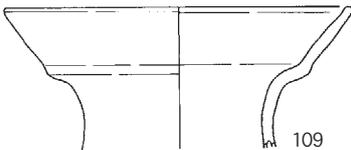
SH02



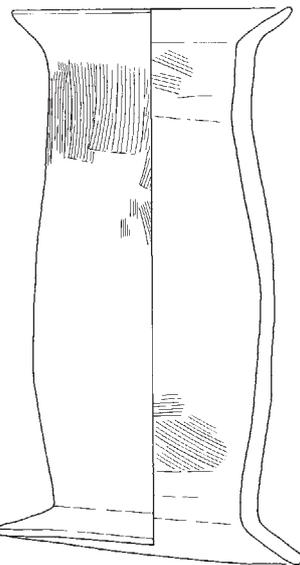
SH03



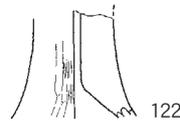
SH05



SH07



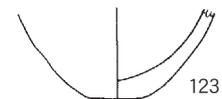
SB03



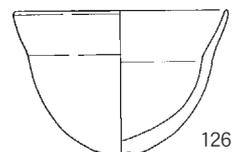
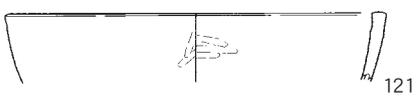
SH07



包含層

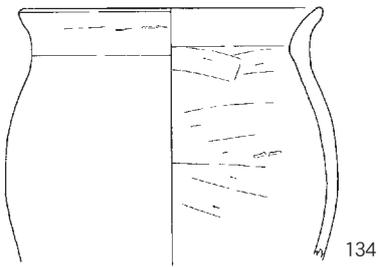
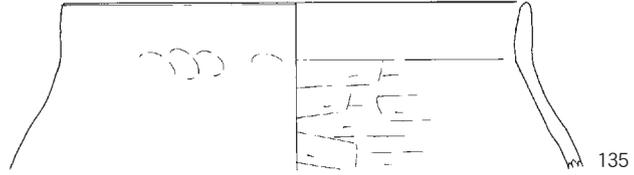
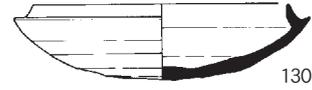
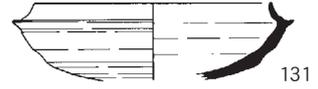


P11



出土遺物(1)

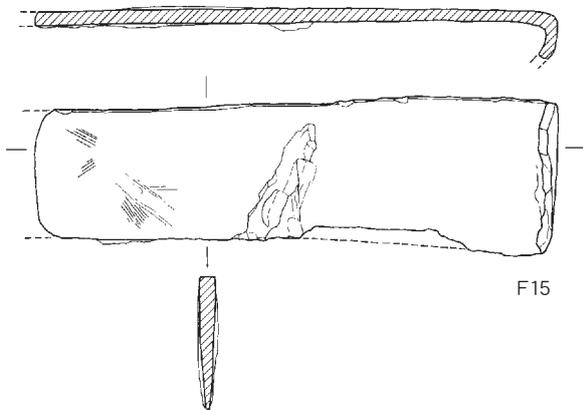
SH08



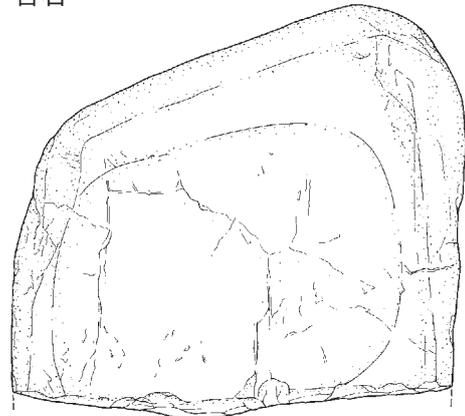
SB01



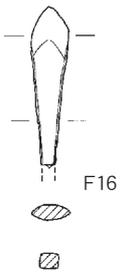
鉄鎌



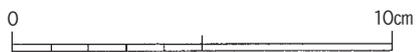
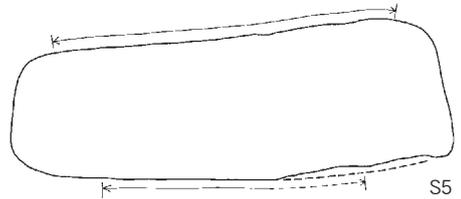
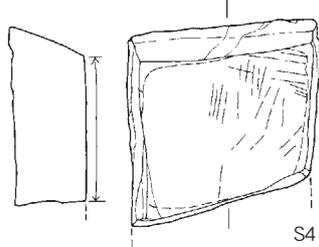
台石



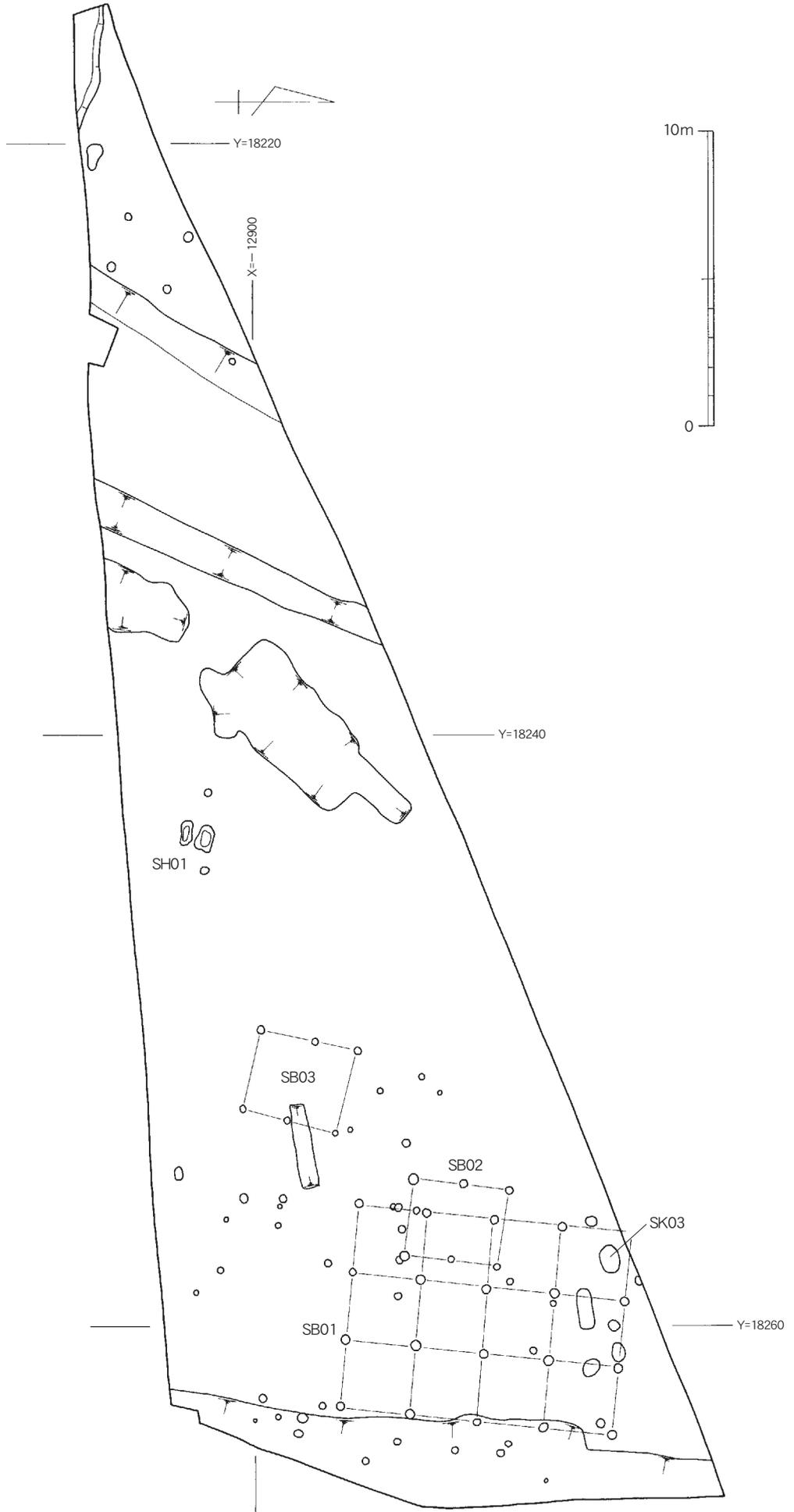
鉄鏃



砥石

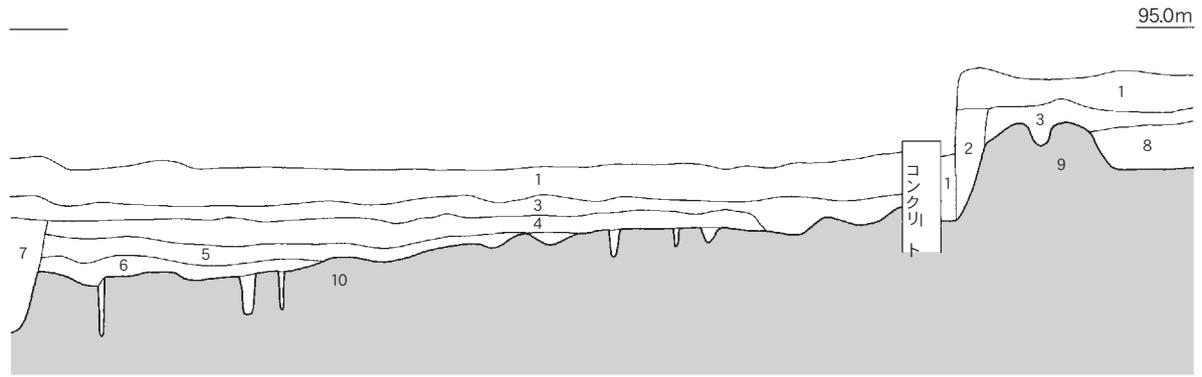


C地区

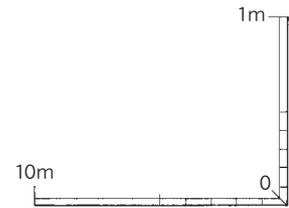


全体図

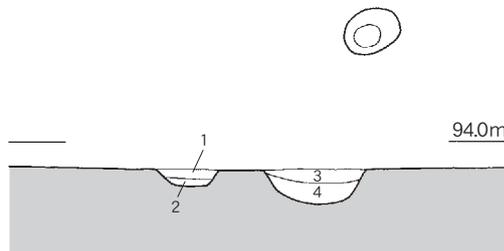
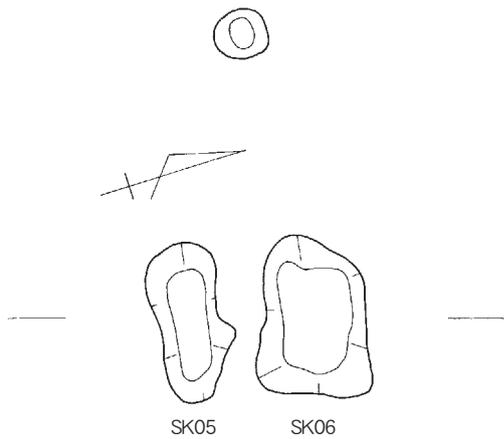
調査区南壁土層断面図



1. 耕作土
2. 暗黄灰色 シルト混じり極細砂 (石垣裏込め)
3. 暗黄灰色 粗砂混じりシルト質極細砂 (床土)
4. 暗黄灰色 シルト質極細砂 (旧耕作土・床土)
5. 暗灰色 極細砂質シルト (土壤層)
6. 暗灰褐色 シルト (土壤層)
7. 暗黄灰褐色 シルト質極細砂 (石垣裏込め)
8. 遺構埋土
9. 明灰色シルト (基盤層)
10. 暗黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂 (基盤層)



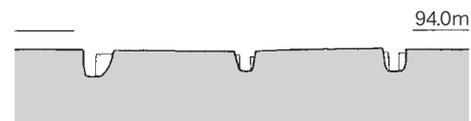
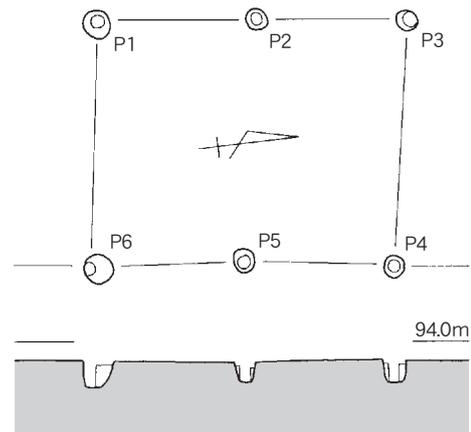
SH01



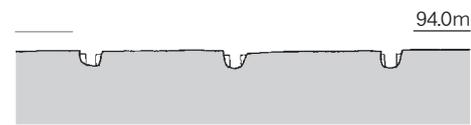
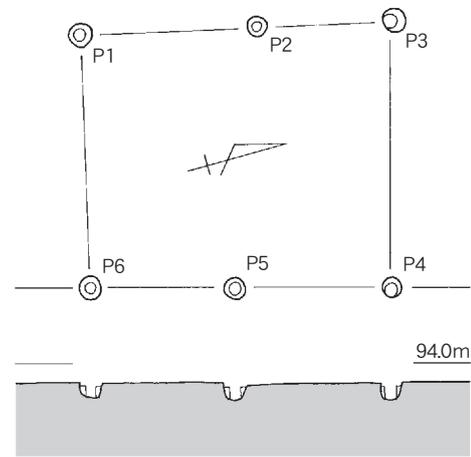
1. 黄褐色 シルト混じり黒灰色シルト
2. 黒色 シルト (炭層)
3. 黄褐色 シルト混じり黒灰色シルト
4. 暗黒灰色 極細砂混じりシルト



SB02

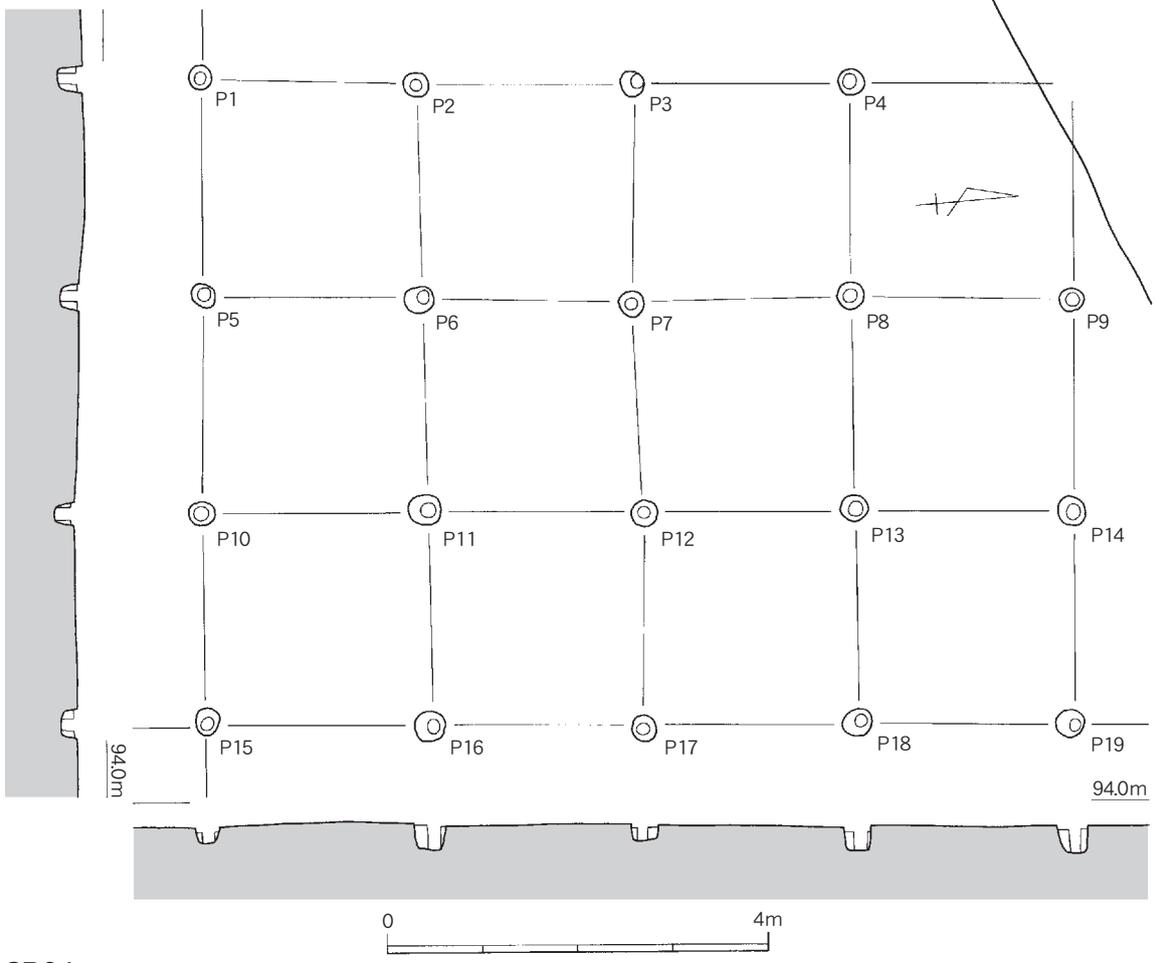


SB03

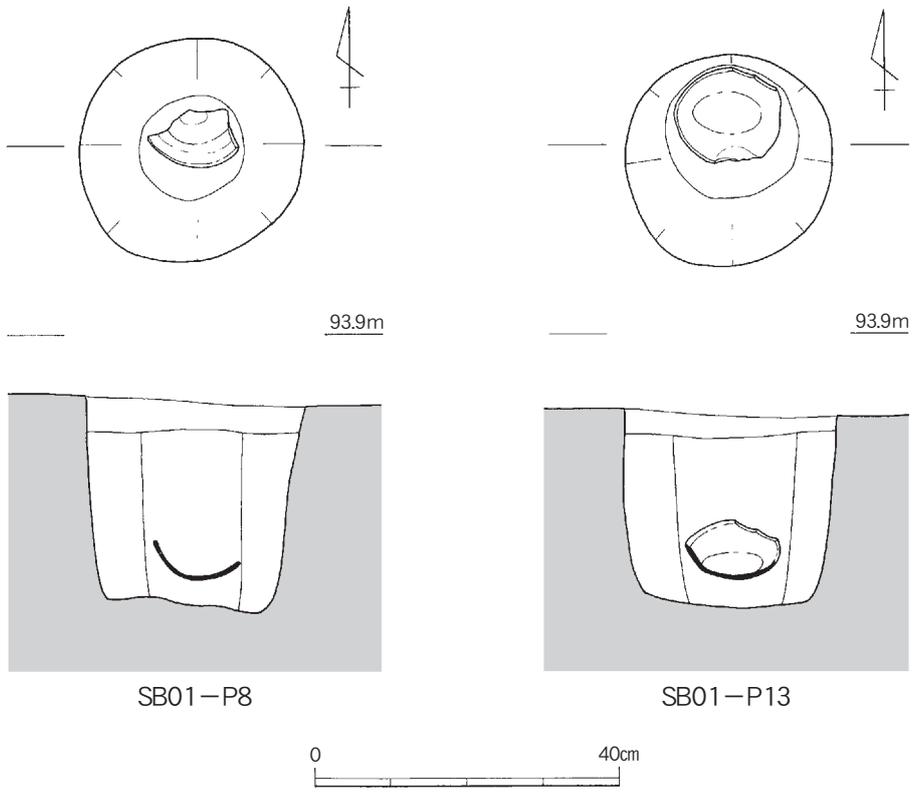


土層断面、SH01、SB02・03

C地区



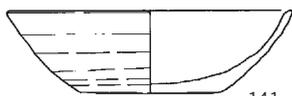
SB01



SB01



140



141

SK03

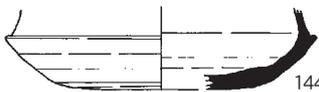


142

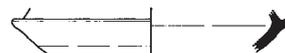
包含層



143



144



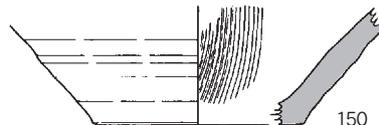
145



146



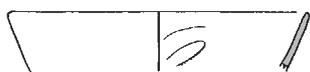
148



150



147



149



写真図版



遺跡遠景(東から)



遺跡遠景(南東から)



A地区全景(空中写真)

A地区



A地区全景(南西から)



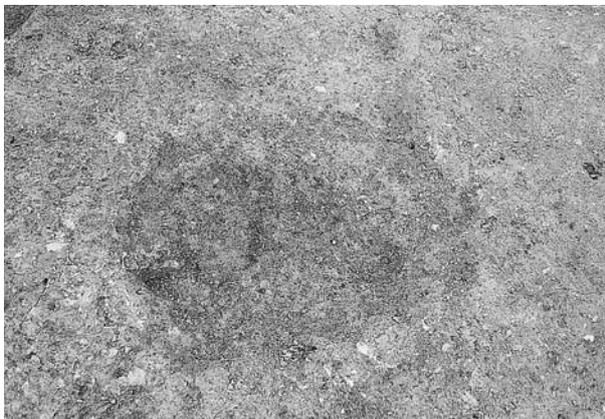
A地区全景(北東から)



A地区北半(南西から)



SH01 (南西から)



SH01 : SK01



SH01 : SK03

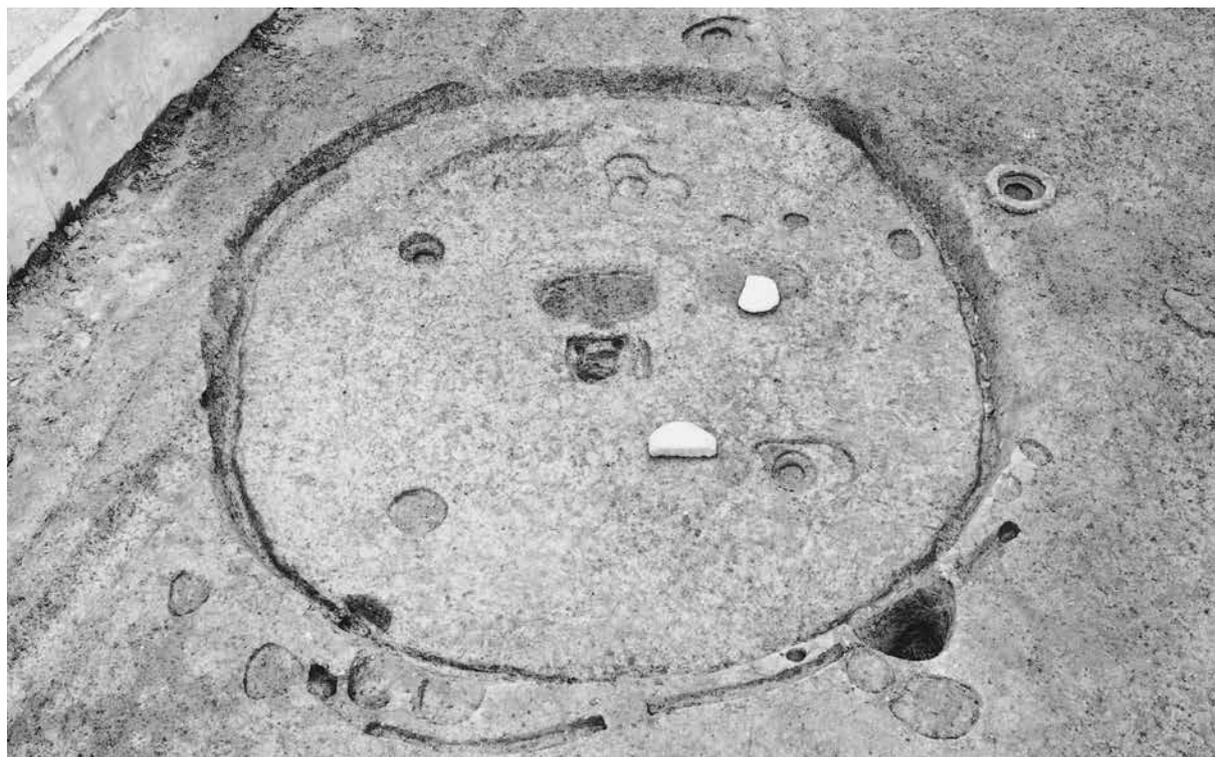


SH01 : P1



SH01 : P2

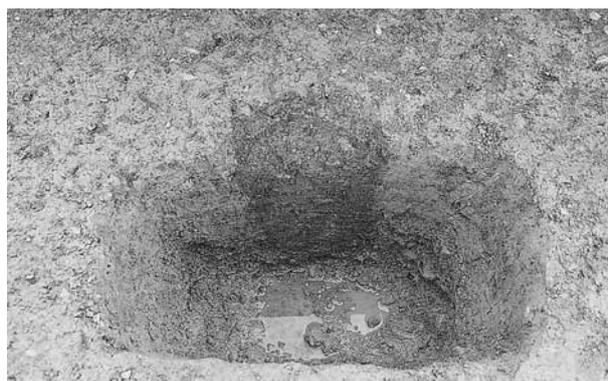
A地区



SH02 (北から)



SH02 中央土坑



SH02 : P1



SH02 : P2



SH03・04 (南から)



SH03 中央炉焼土(南から)



SH03 南壁際土坑



SH03 : P1

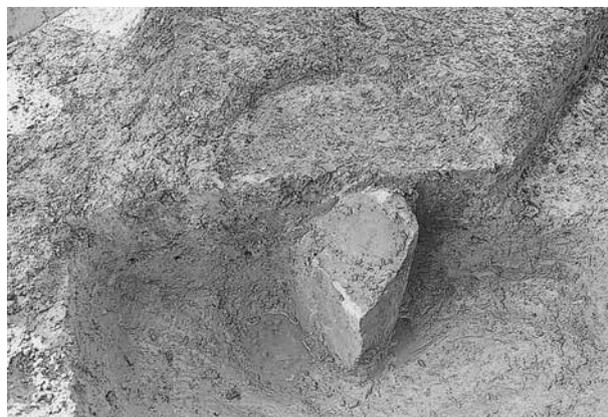


SH03 : P2

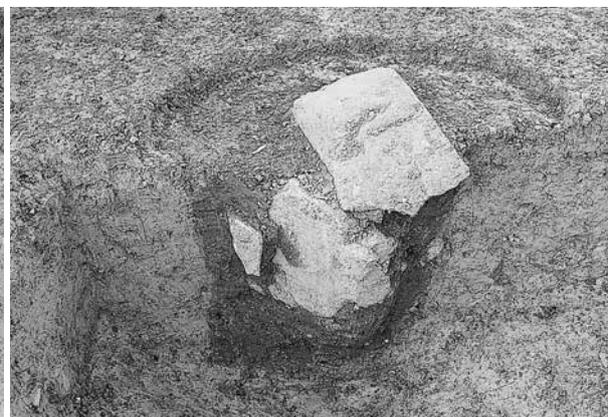
A地区



SB01・SA01・SD12・13(東から)



P31(SB01)



P46(SB01)



P45(SB01)



P32(SB01)



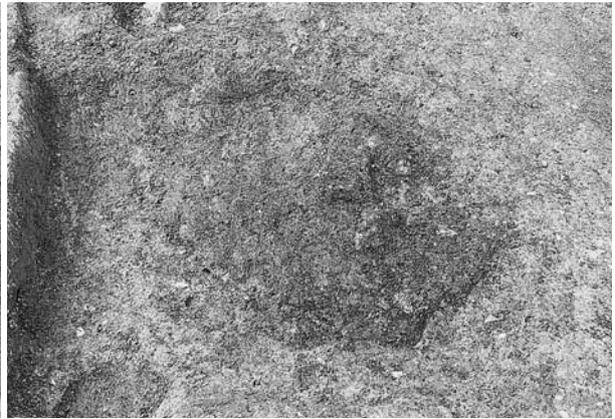
P 5 1 (S B 0 2)



P 5 3 (S B 0 2)



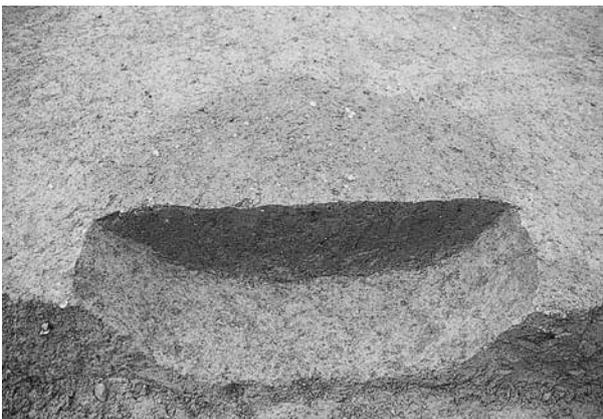
P 3 3 (S A 0 1)



S K 0 3



S K 0 6



S K 0 8



S X 0 1 (北東から)

A地区



谷部溝群(南から)



谷部溝群(東から)



SD01・02土層断面
(北東から)



SD06・07
(南から)



SD06 (南から)



SD09~11
(南西から)

A地区



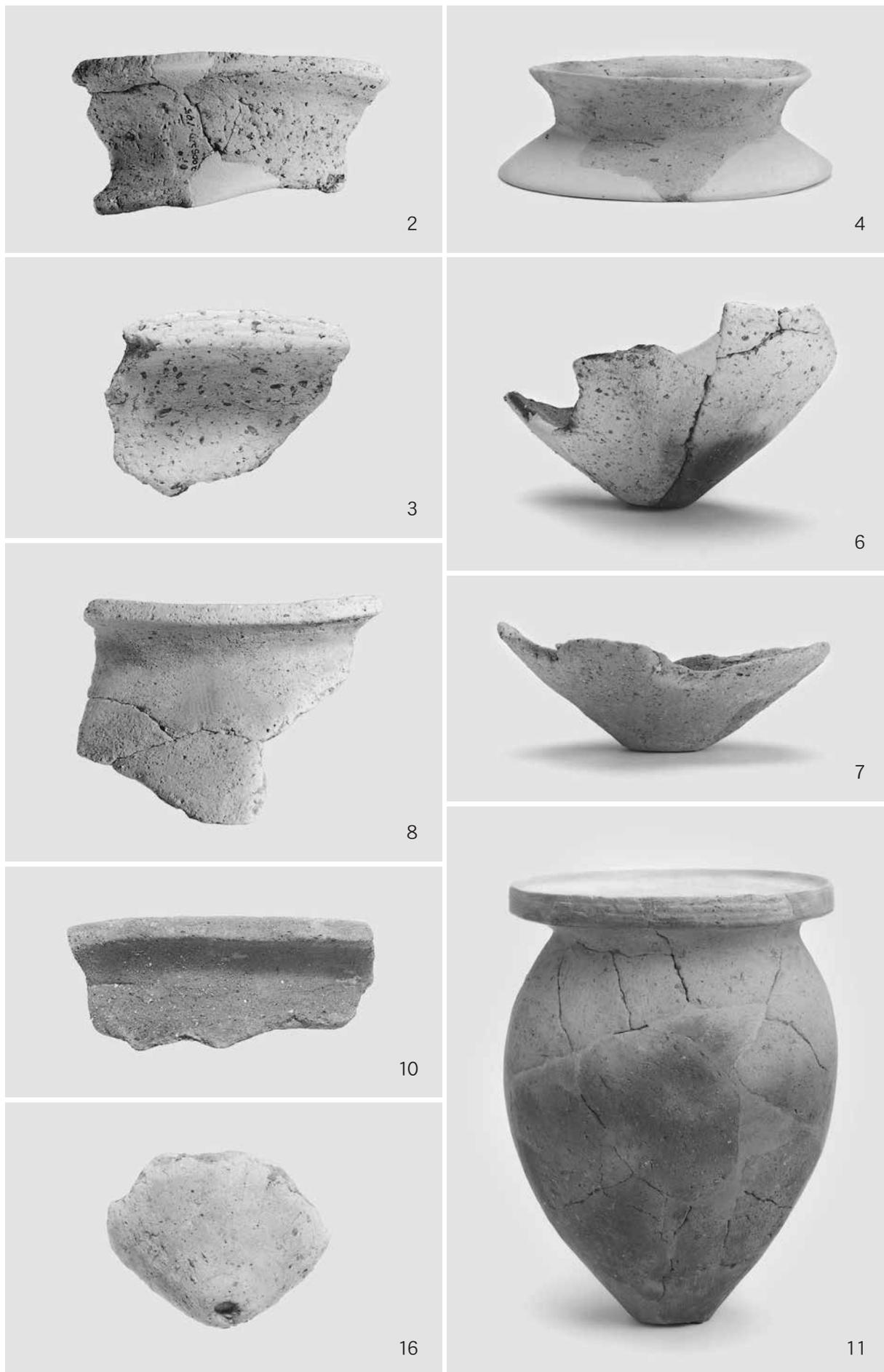
SD 12 (東から)



SD 13・14
(東から)



SD 13 東端
須恵器出土状況
(北から)



出土遺物(1)

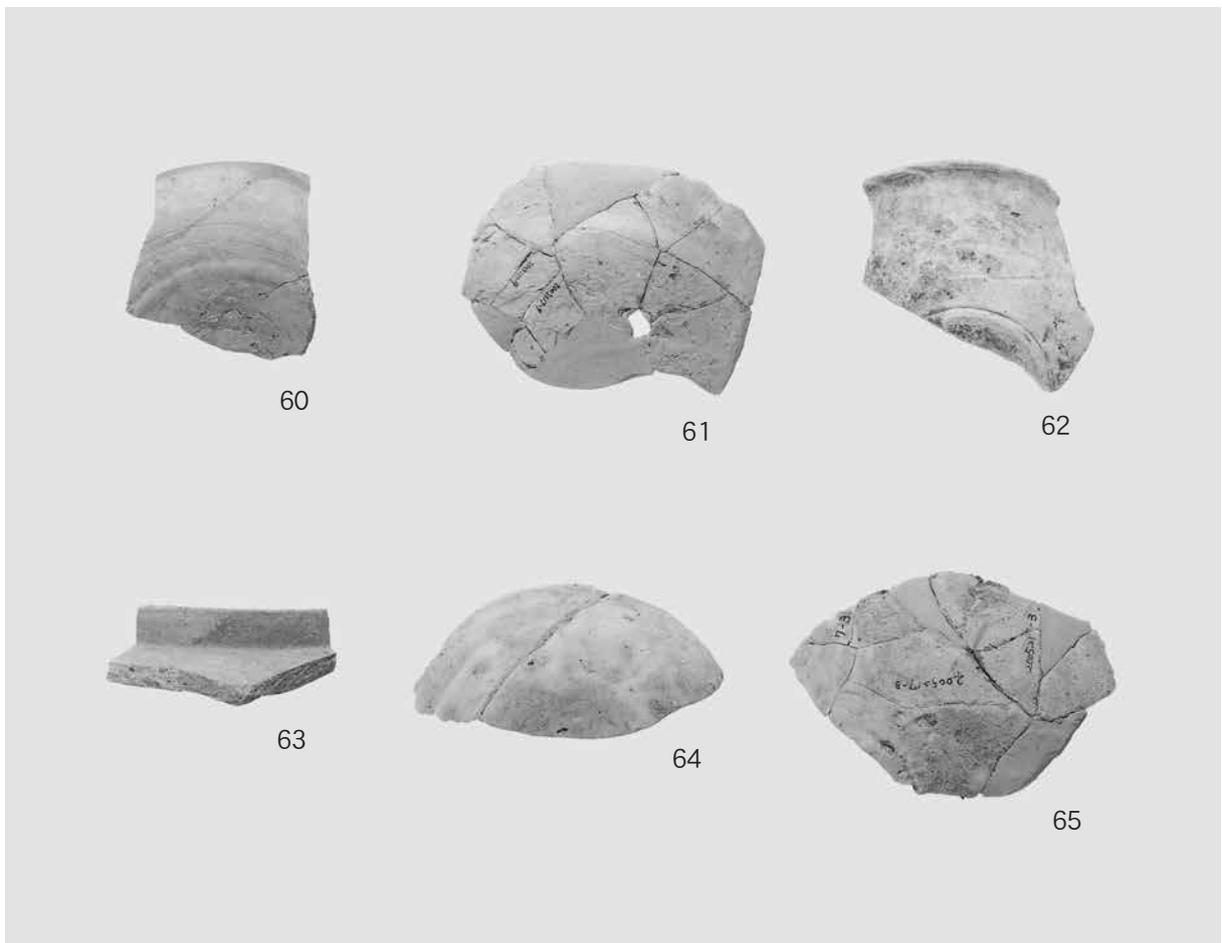
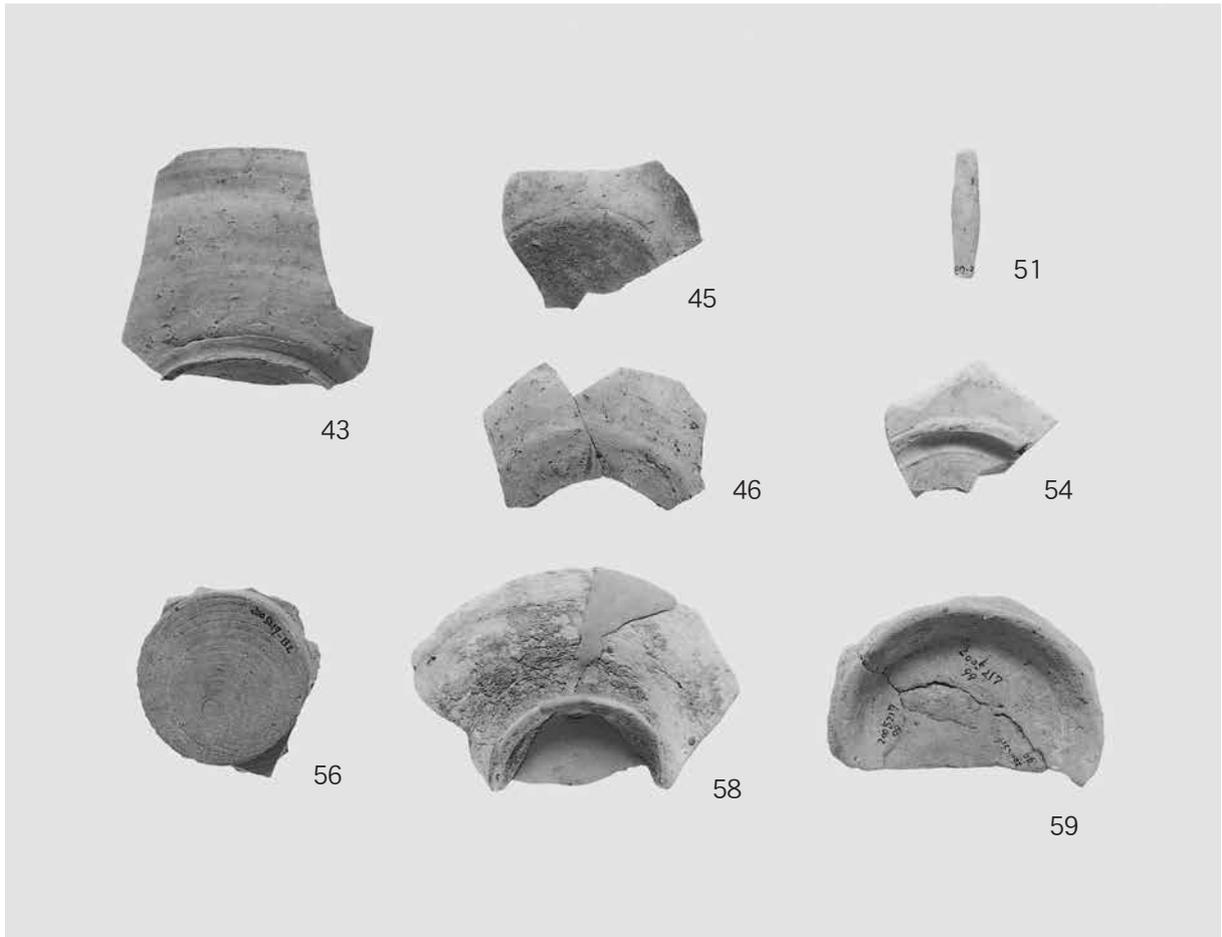
A地区



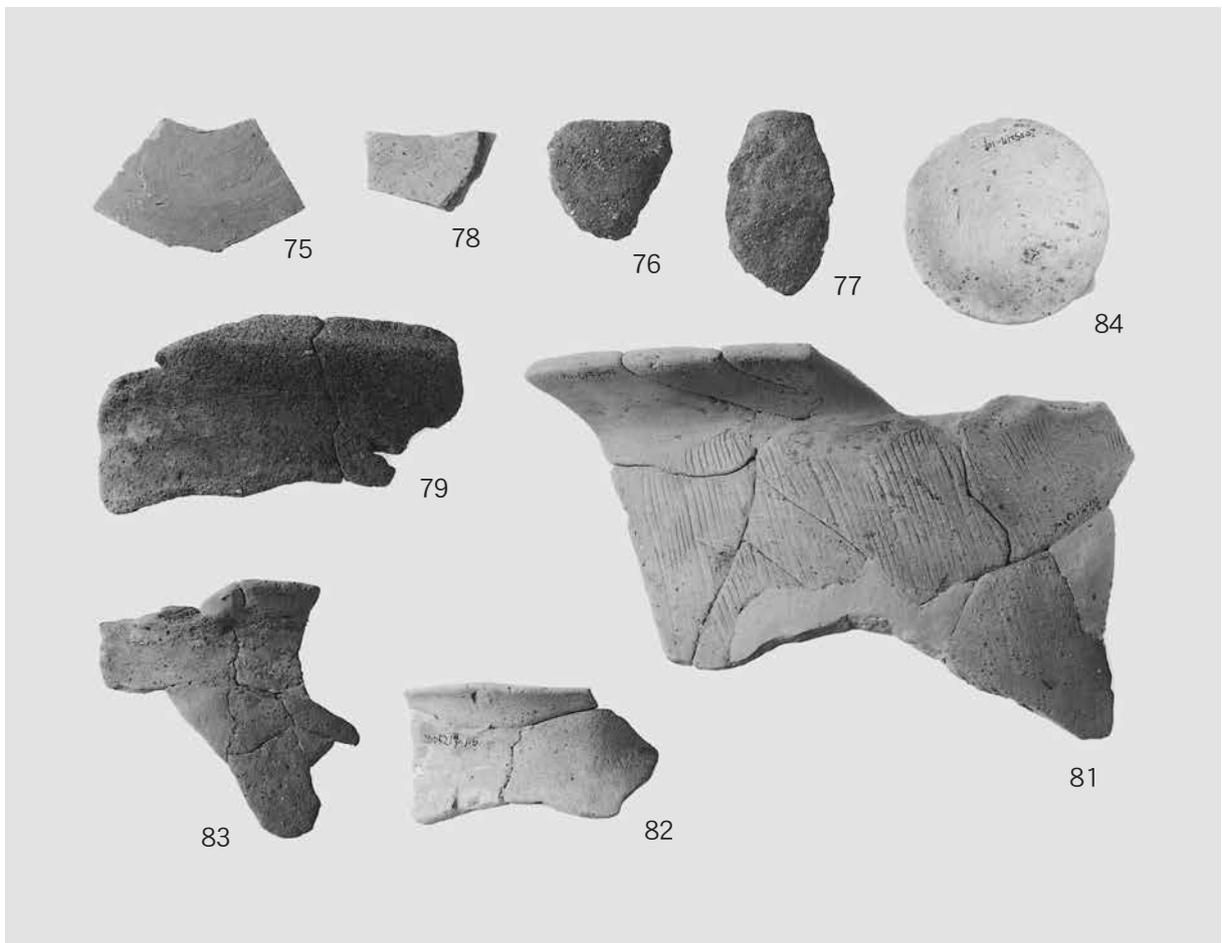
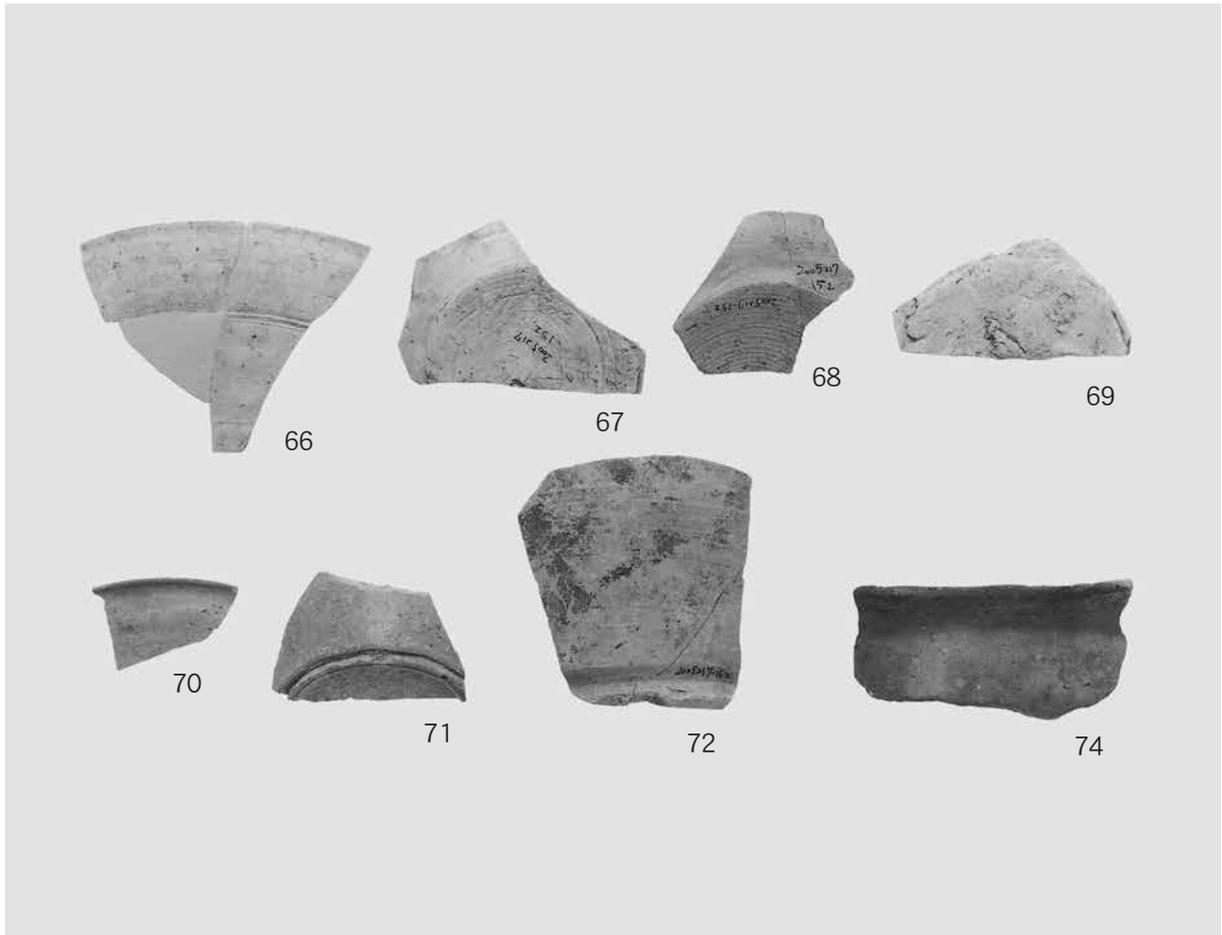


出土遺物(3)

A地区

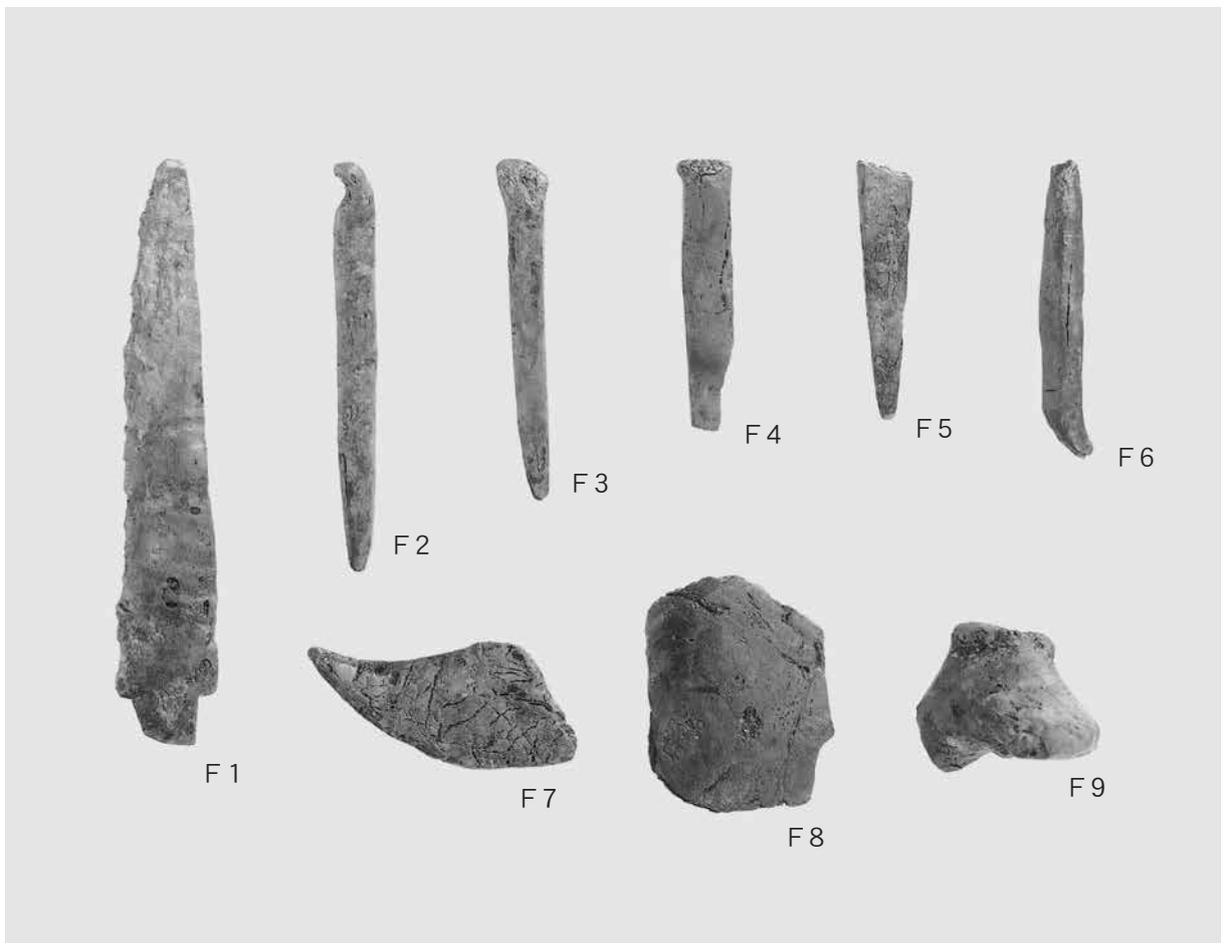
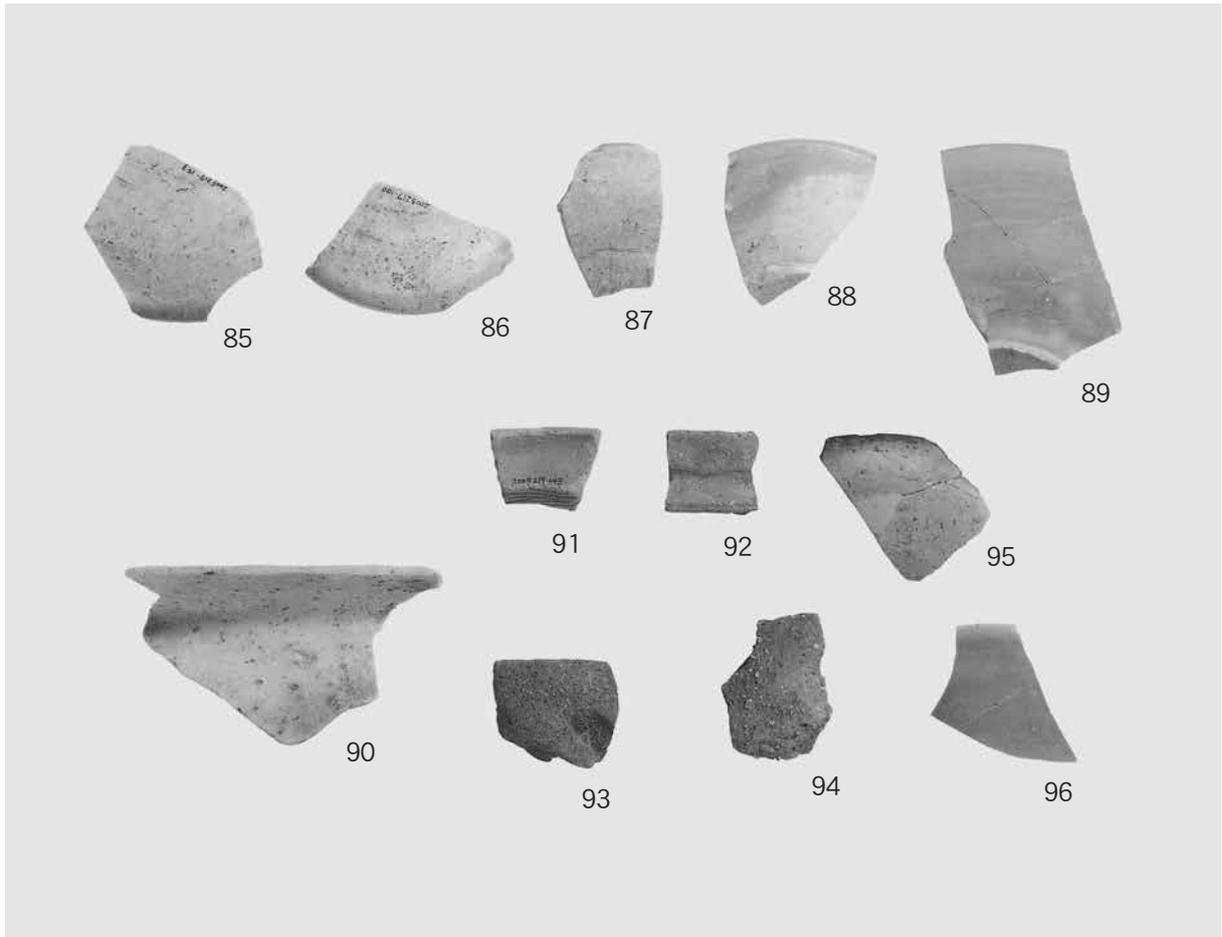


出土遺物(4)

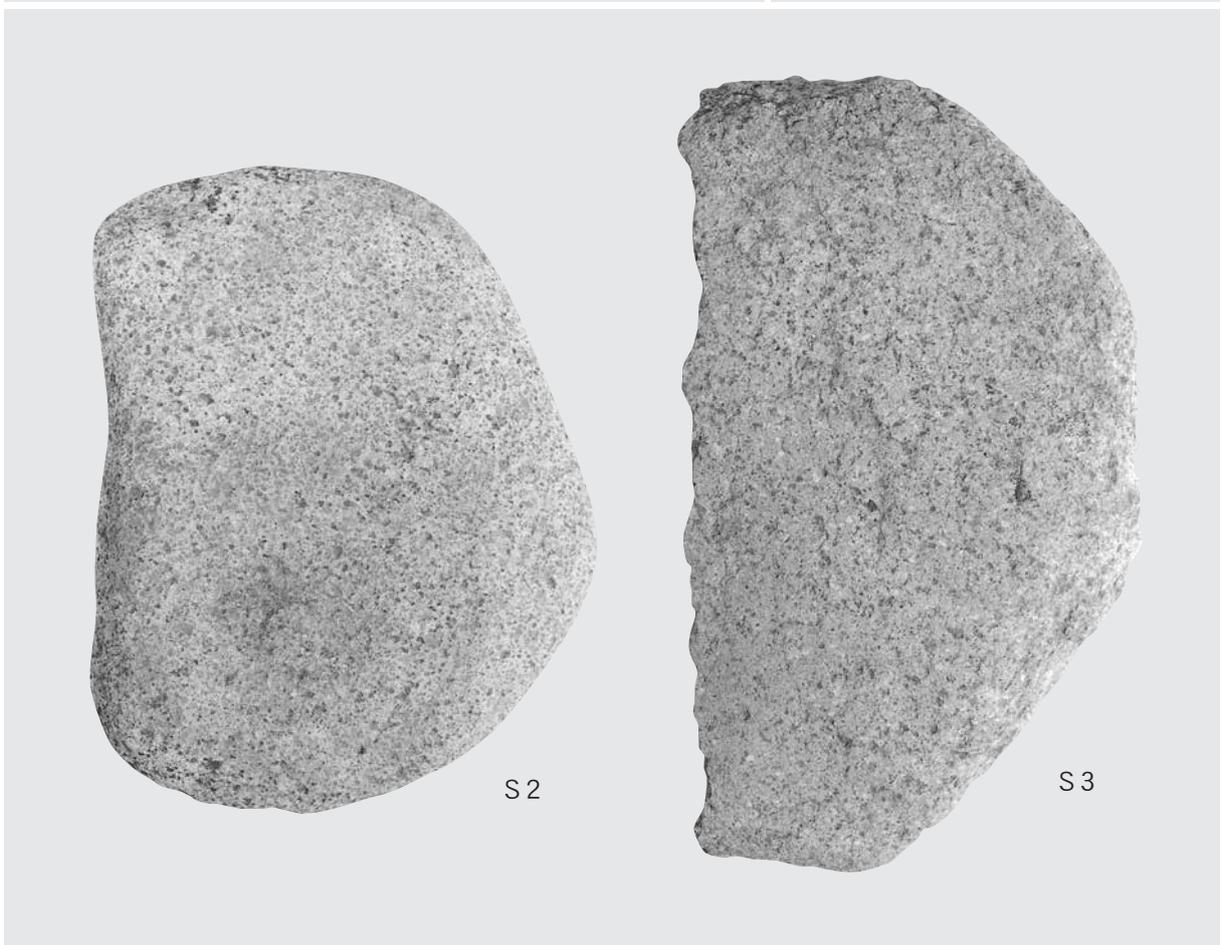
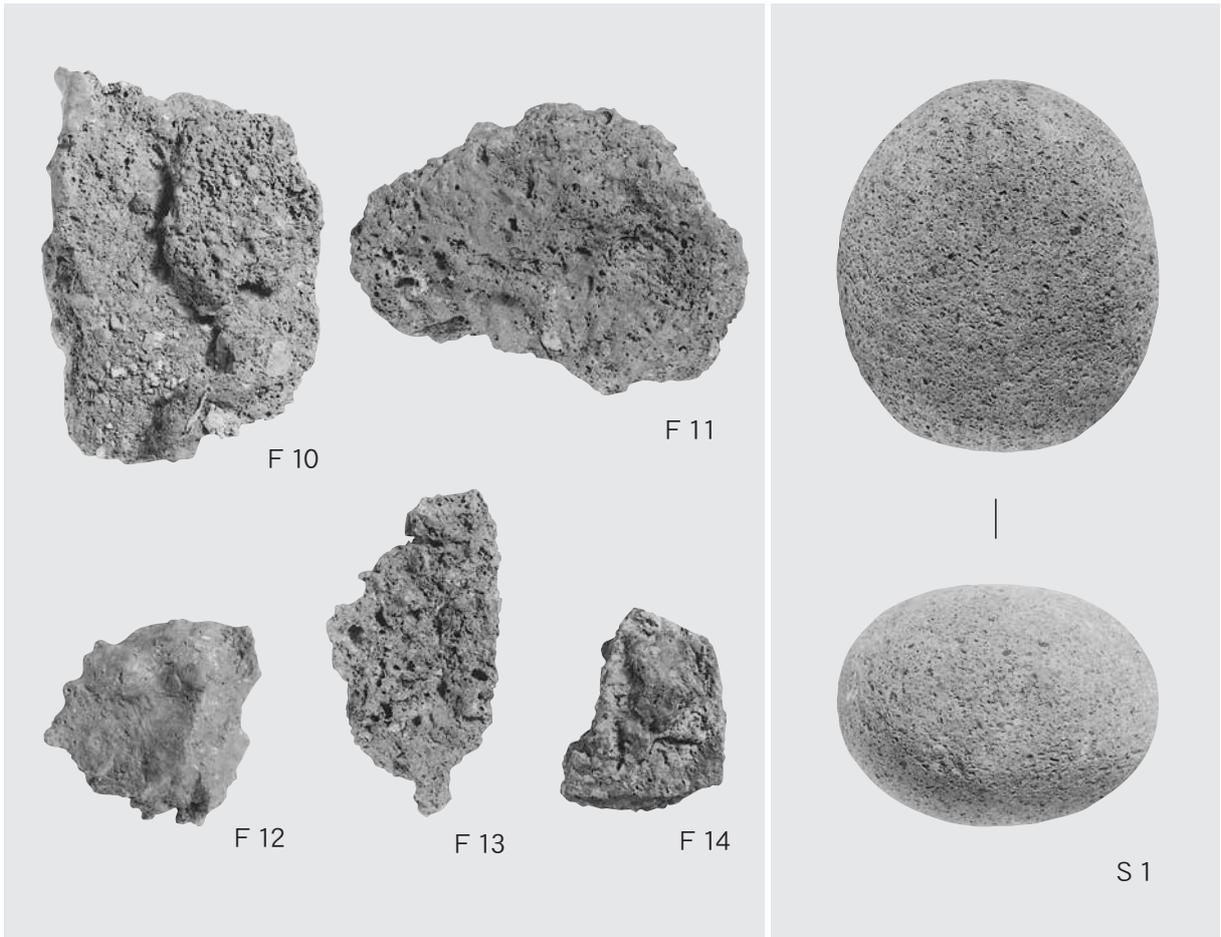


出土遺物(5)

A地区



出土遺物(6)



出土遺物(7)

B地区



B地区全景(空中写真)

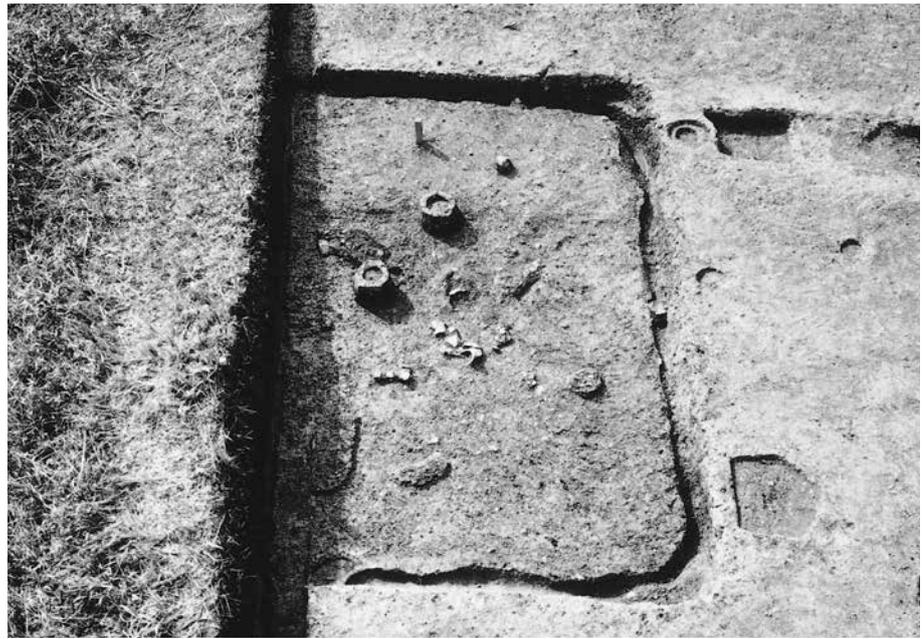


B地区全景
(空中写真)



B地区全景
(東から)

B地区



SH01 (東から)



SH02・03
(東から)



SH02・03完掘
(東から)



SH02 東壁際
屋内施設(西から)



SH03 中央土坑
(東から)



SH03 中央土坑
断面(東から)

B地区

SH03 屋内溝暗渠部
(南から)

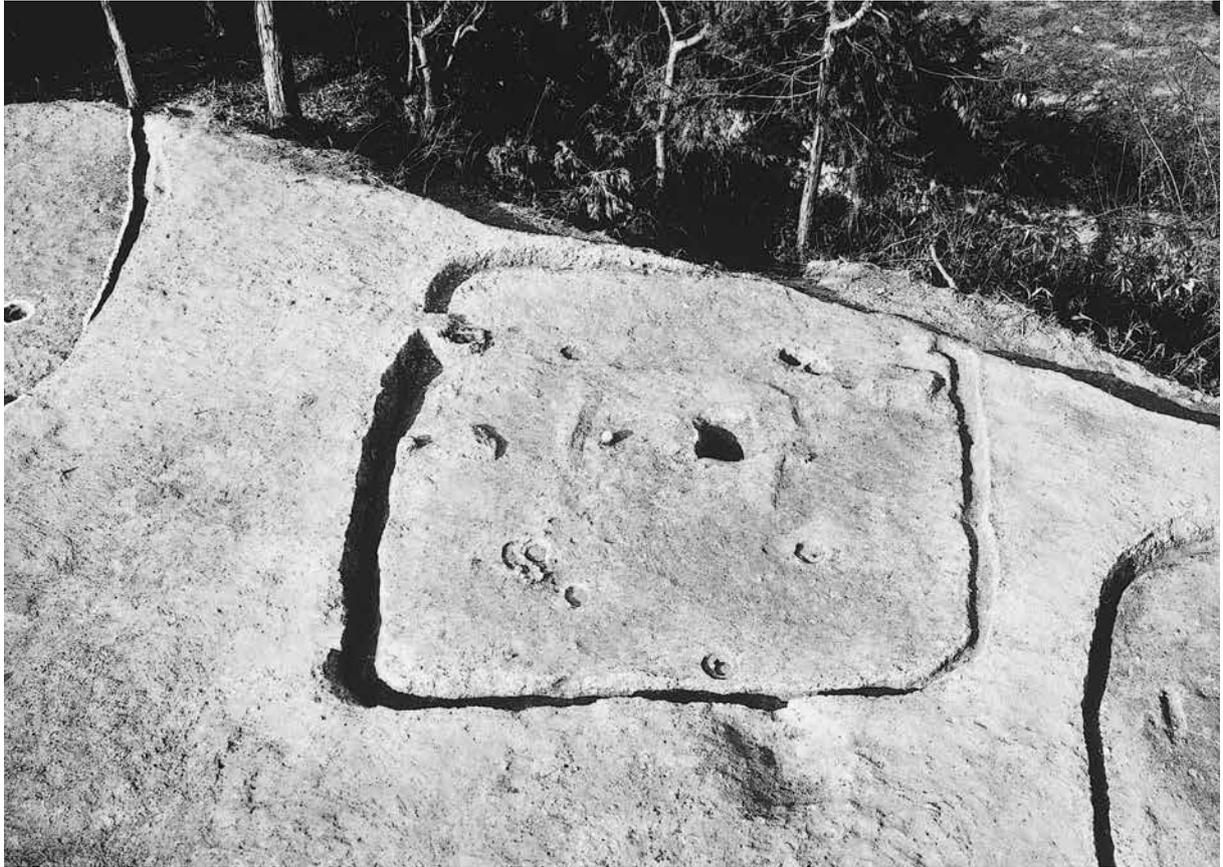


SH03 屋内溝暗渠部
(北から)



SH03 貼床断面
(東から)





SH04 (南から)



SH04 中央土坑(南から)



SH04 中央土坑断面



SH04 中央土坑周堤断面(南から)



SH04 中央土坑周堤断面

B地区



SH04 : P4



SH04 : P3



SH04 壁溝上黄色粘土(北から)



SH04 壁溝上黄色粘土断面



SH04 土器(104)出土状況



SH04 土器(103)出土状況



SH04 土器(106)出土状況



SH04 土器(105)出土状況



SH05 (南から)



SH05 中央土坑(新)断面



SH05 中央土坑(古)断面



SH05 : P1



SH05 : P2

B地区



SH07 (西から)



SH07 中央土坑
(東から)



SH07 中央土坑
断面



SH07 中央土坑(古)断面



SH07 : P1



SH07 : P2



SH07 : P3



SH07 : P4



SH07 : P5

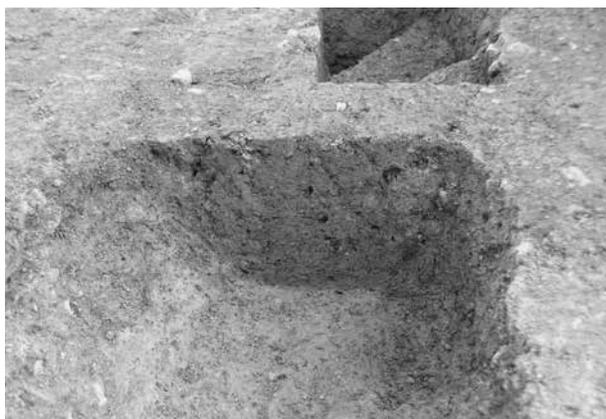


SH07 : P6

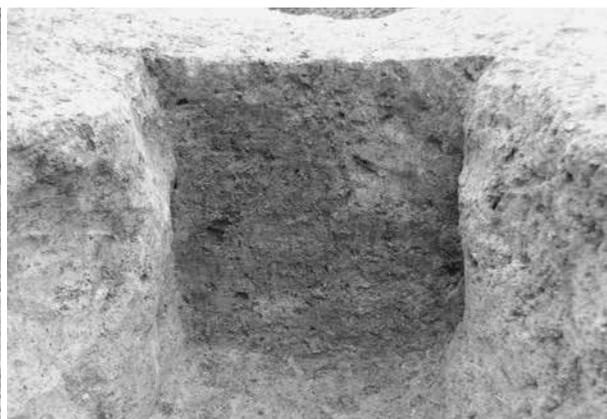


SH07 : P8

B地区



SH07 屋内溝断面



SH07 屋外溝断面



SH07 器台形土器(120)出土状況



SH07 外側壁溝上 鉄器(F15)出土状況



SH08・SK05~08(南から)



SH08 : SK01



SH08 : SK01断面

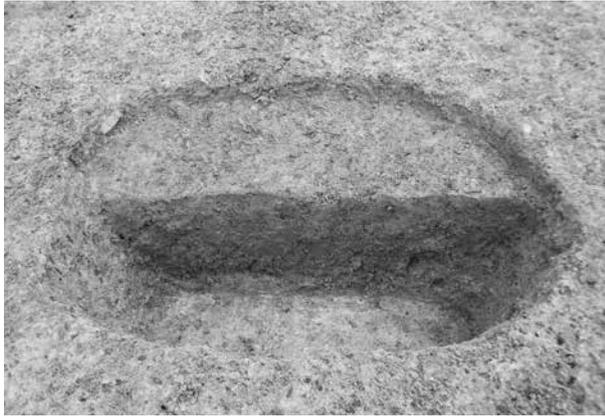


SH08 : SK04

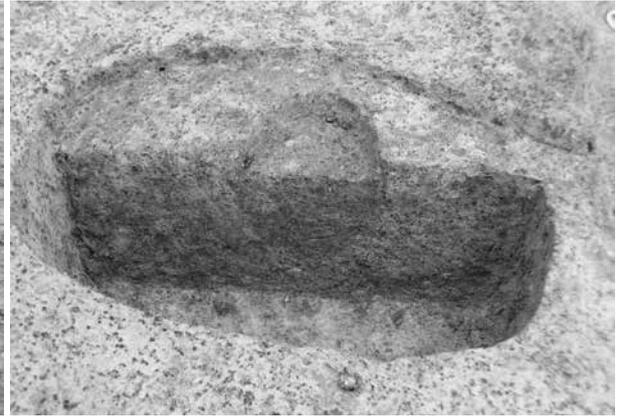


SH08 : SK04断面

B地区



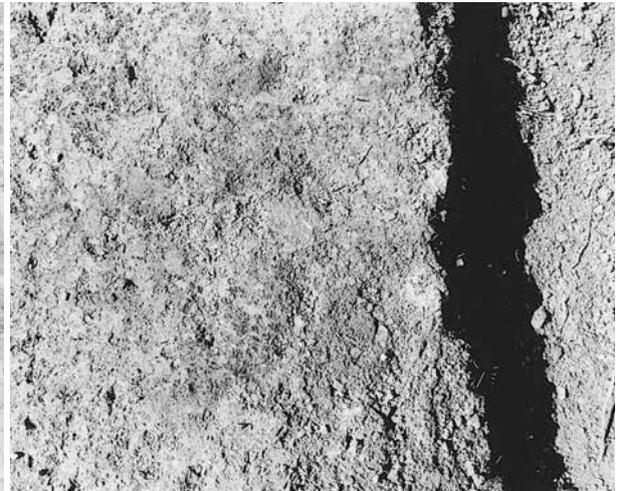
SK05



SK08



P1



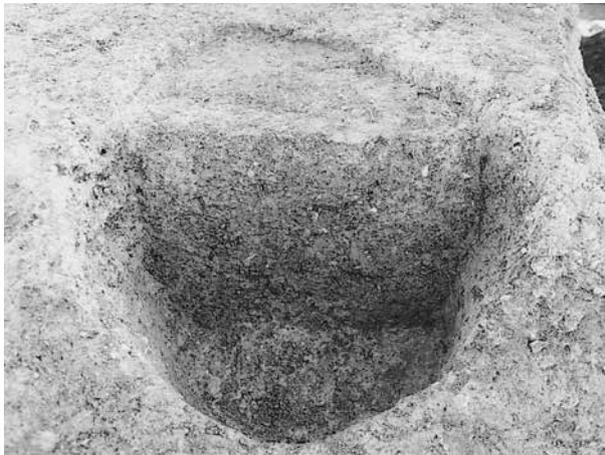
SH08 焼土



SH09・10 (南から)



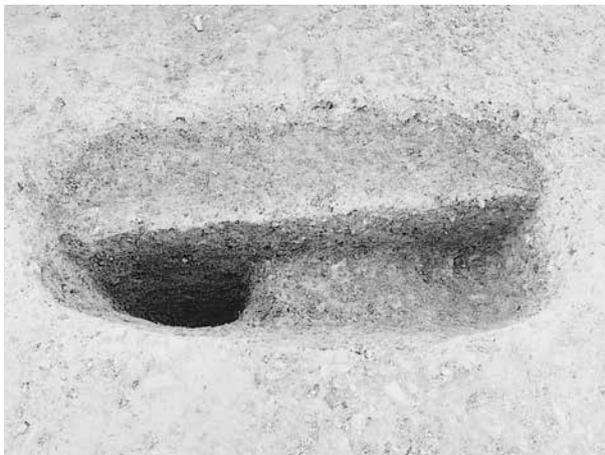
SB03 (南から)



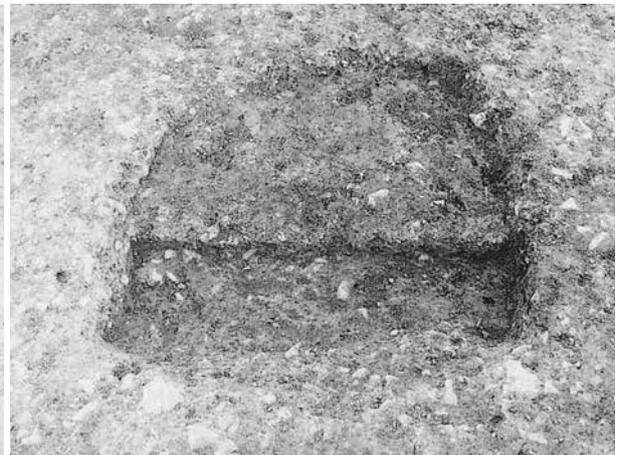
SB03 : P1



SB03 : P2

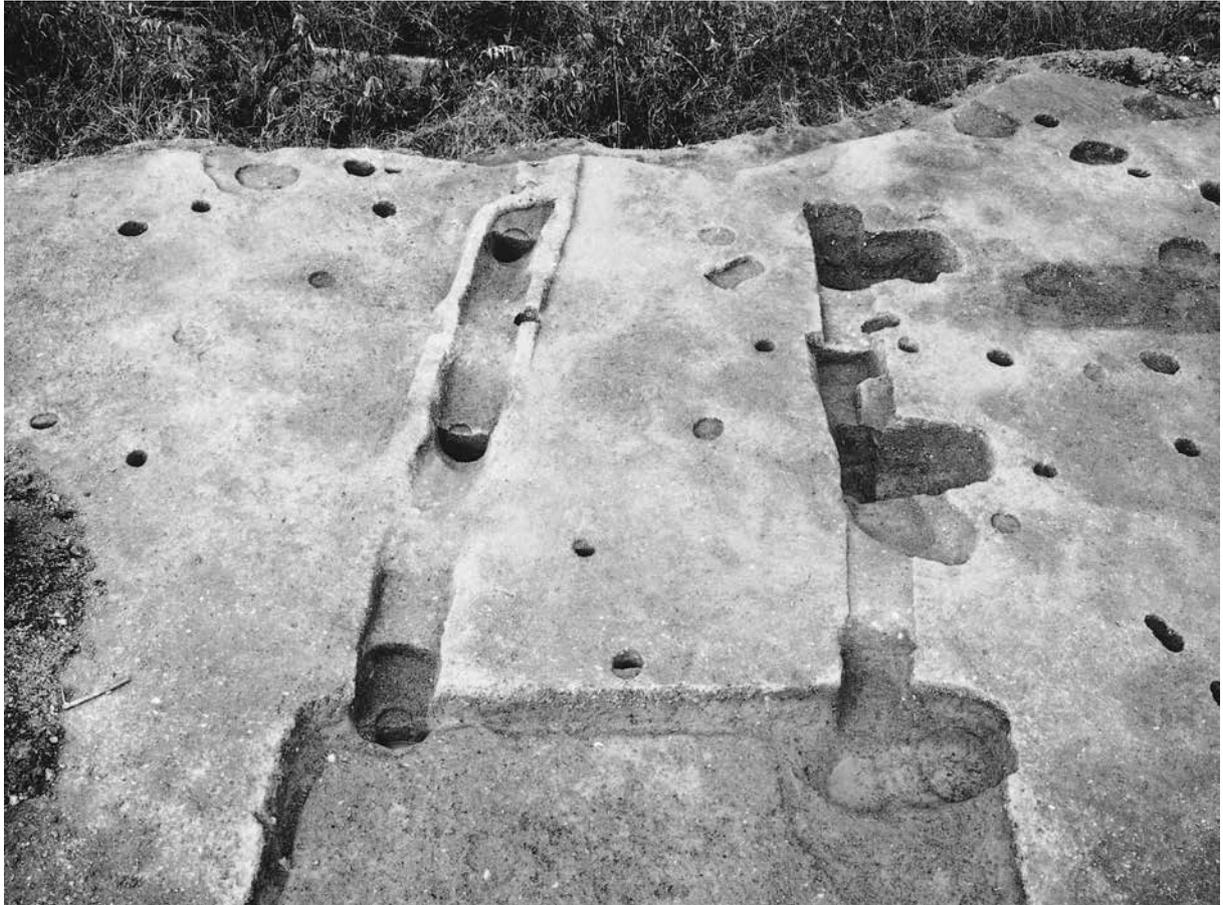


SB03 : P3



SB03 : P5

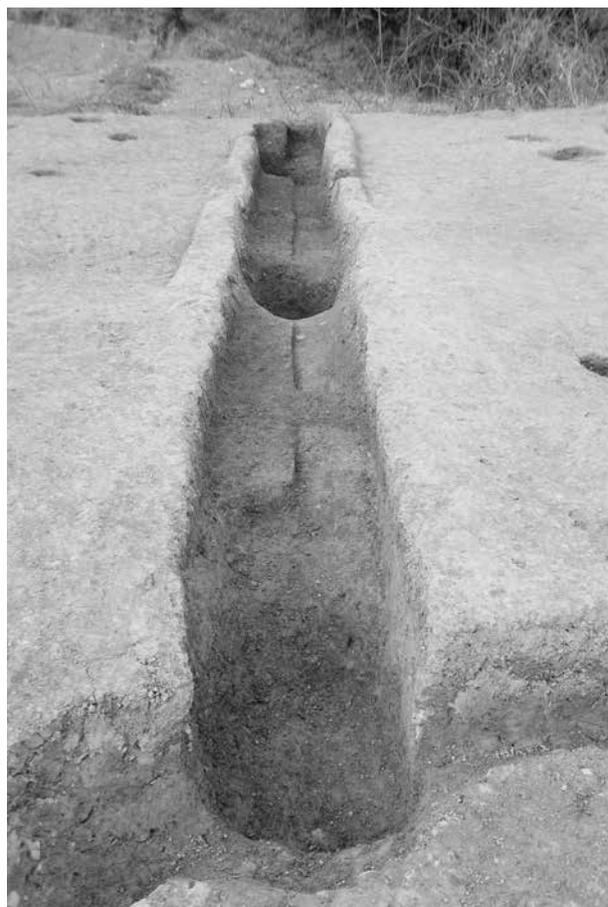
B地区



S B 0 6 (南から)



S B 0 6 完掘(南から)



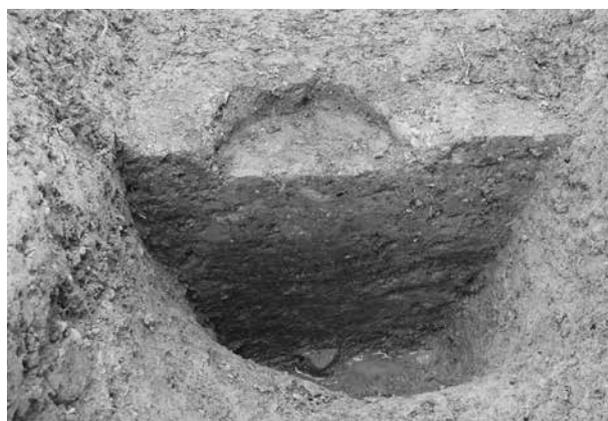
SB06 : SD01



SB06 : P4断面



SB06 : P4



SB06 : P5断面



SB06 : P6断面



SB06 : P5



SB06 : P6

B地区



SB06 : SD02



SB06 : P1



SB06 : P1



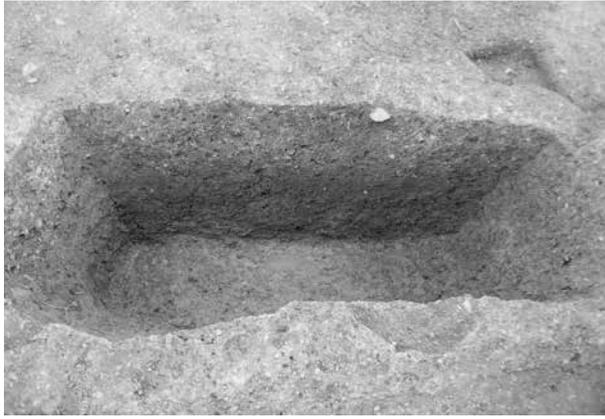
SB06 : P2



SB06 : P2



SB06 : P2



SB06 : P3断面



SB06 : P3



SB06 : P3



SB06 : P3



SB06 : SD01断面(南東から)



SB06 : SD01断面(P5・6間)



SB06 : SD01とP4断面



SB06 : SD01とP5断面

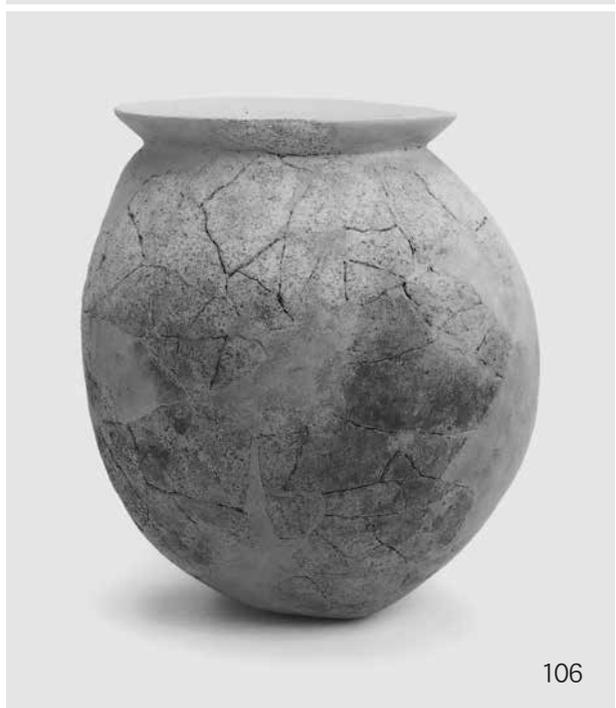
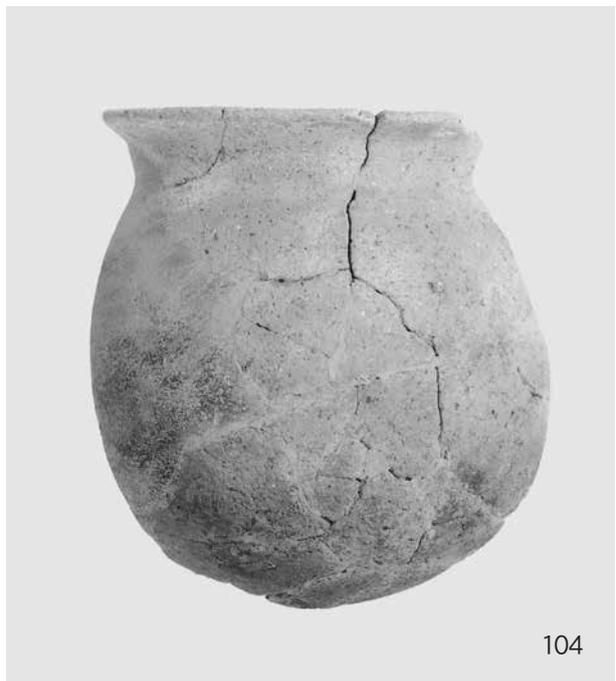
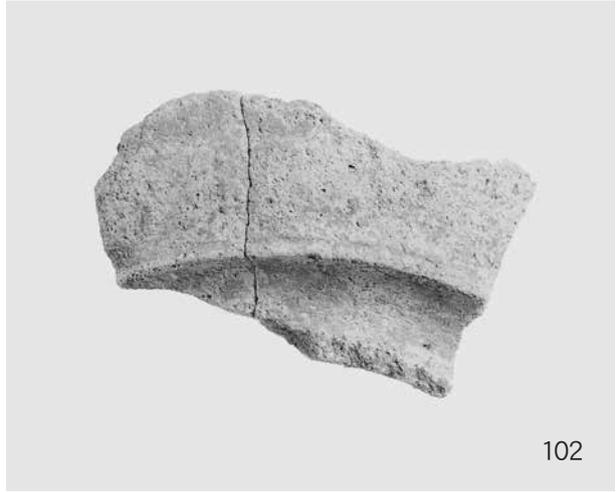
B地区



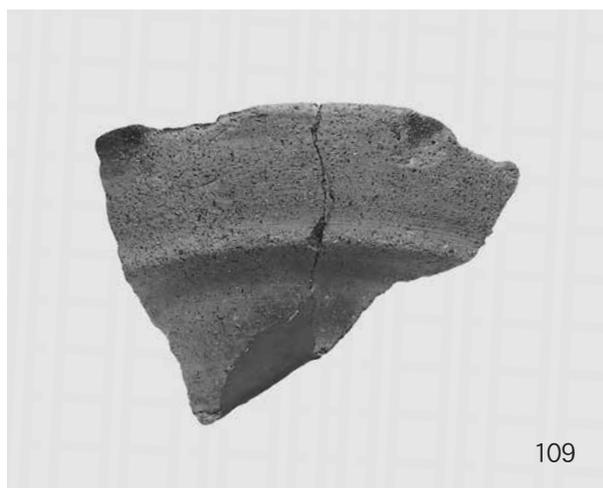
S B 0 1 (東から)

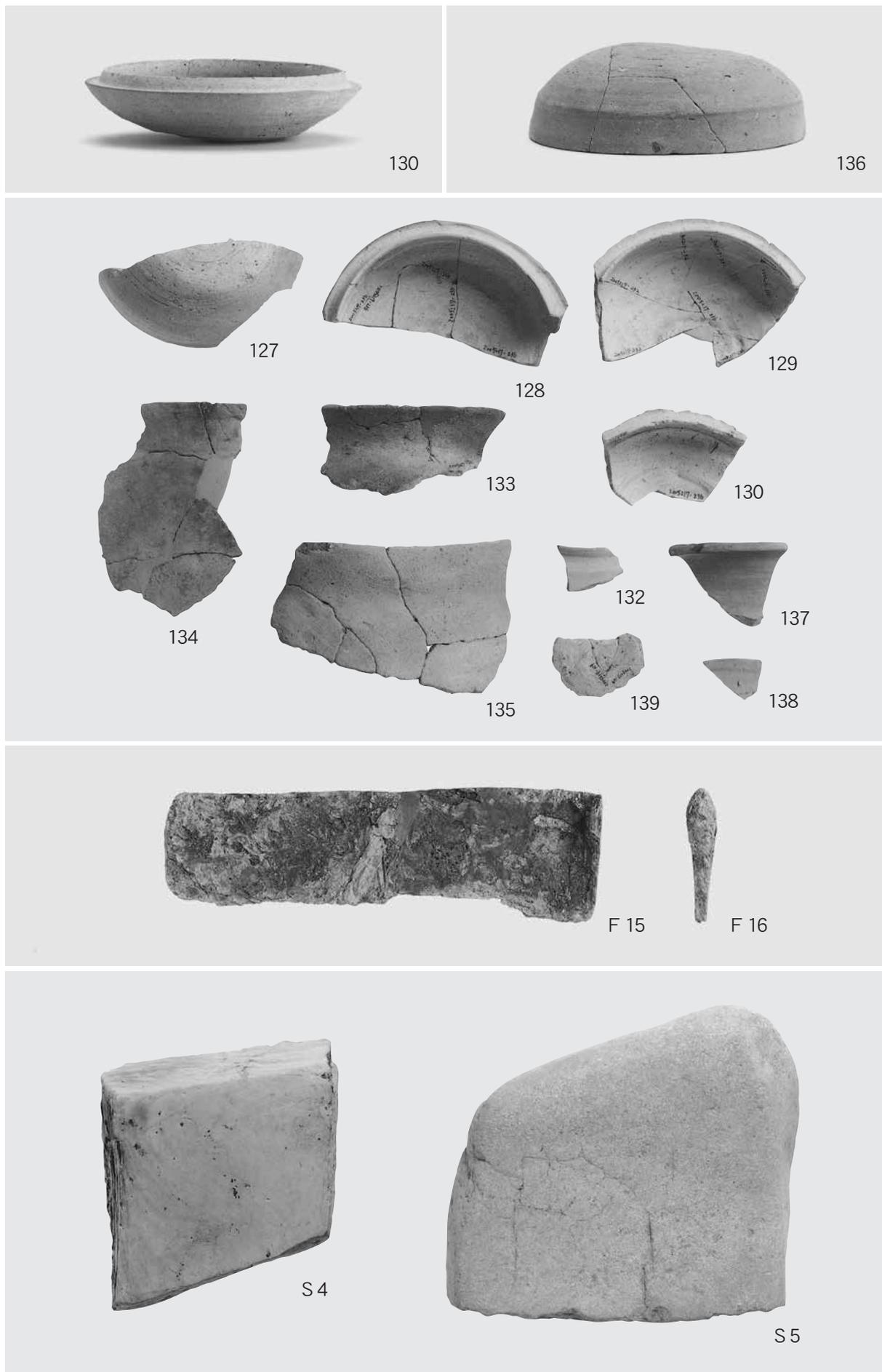


S B 0 2 (南から)



B地区



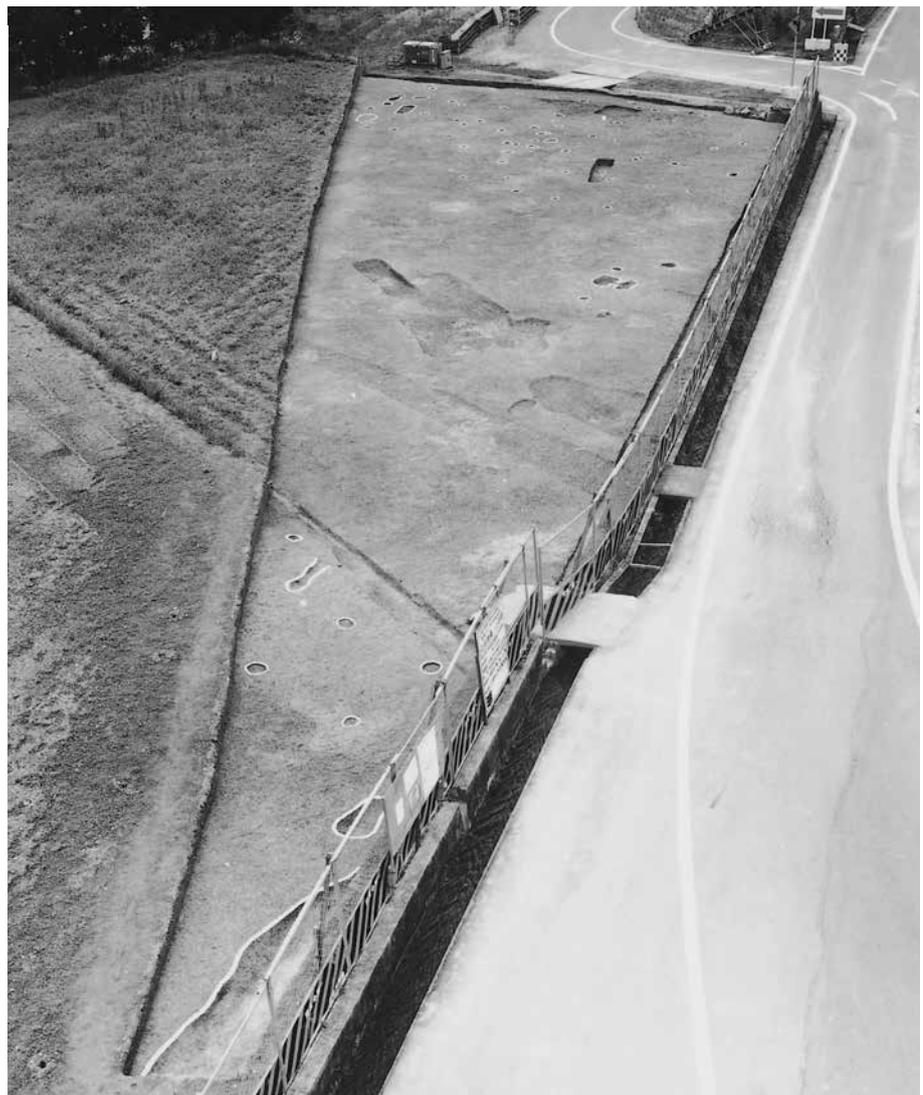


出土遺物(3)

C地区



C地区全景
上：(東から)
下：(西から)





SH01(東から)



SK05・06断面

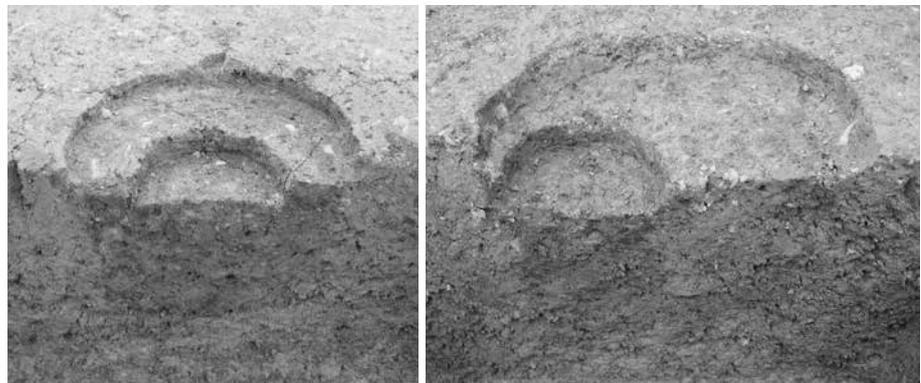


SK05・06

C地区



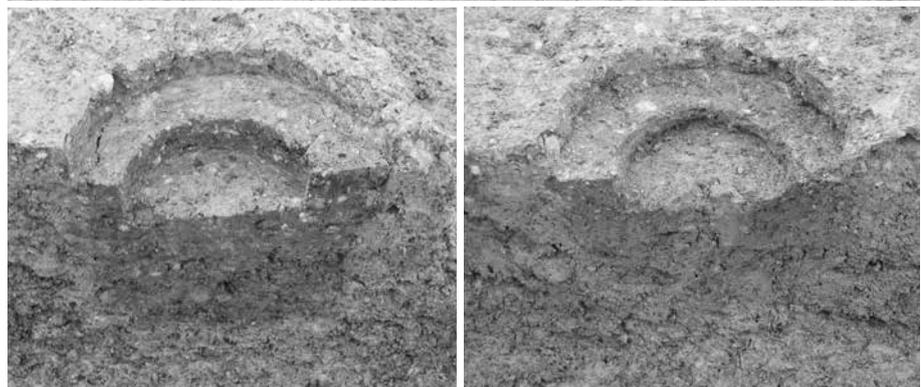
SB02 (東から)



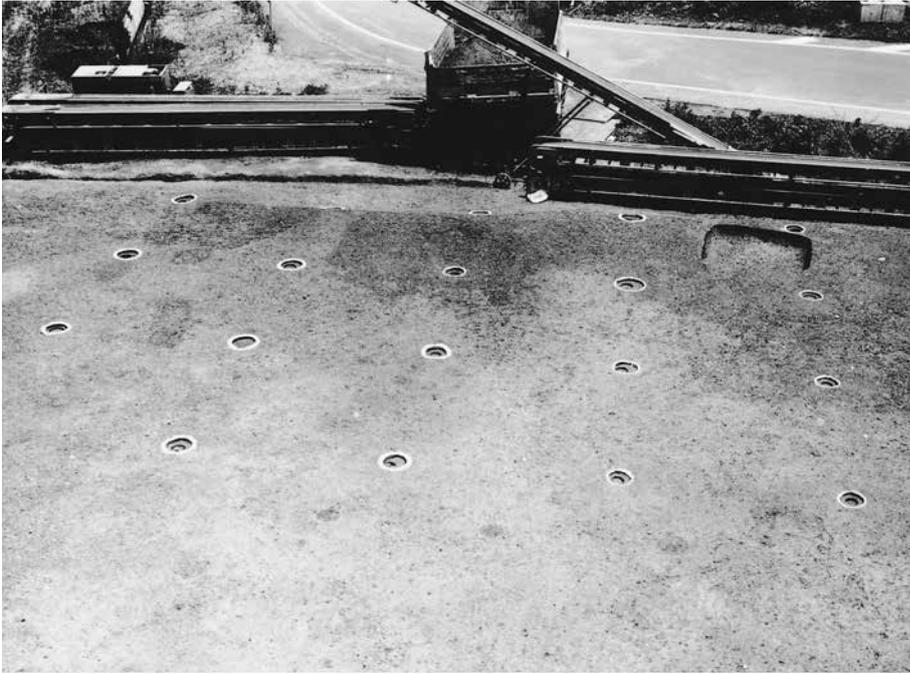
SB02
P2 (左)・P6 (右)断面



SB03 (東から)



SB03
P5 (左)・P6 (右)断面



SB 0 1 (西から)

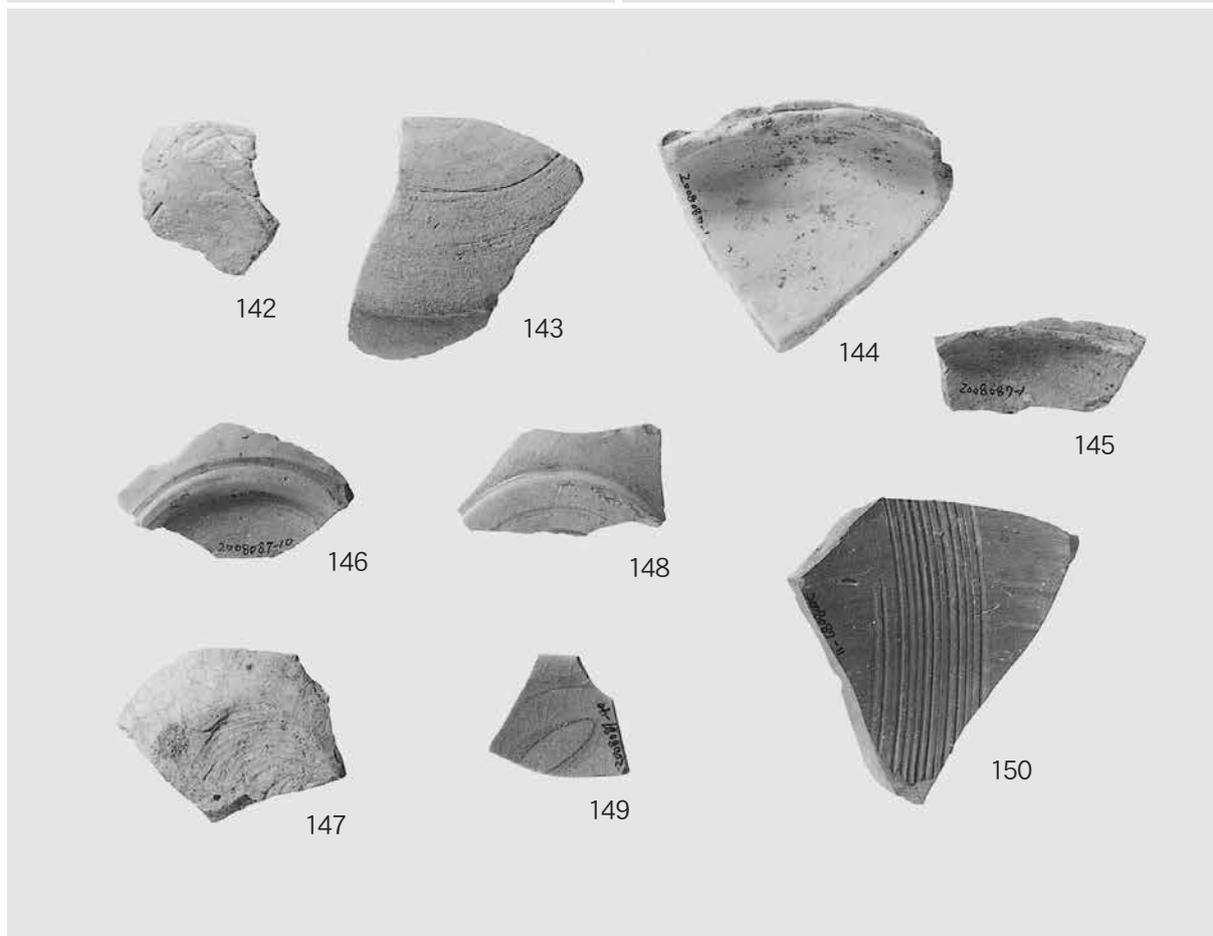


SB 0 1
P 8 (左)・P 13(右)断面



SK 0 3 (北から)

C地区



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみひじもりのうえいせき							
書名	上比地森ノ上遺跡							
副書名	(主) 相生宍粟線道路等活力基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第373冊							
編著者名	吉識雅仁 山田清朝 池田征弘 上田健太郎							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-341-7711							
発行年月日	平成22(2010)年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上比地 森ノ上遺跡	兵庫県 宍粟市 山崎町 上比地	2822278	530238	A地区 34° 59' 2" B・C地区 34° 59' 6"	A地区 134° 52' 81" B・C地区 134° 53' 6"	第1次 平成18年1月19日 ~3月24日 第2次 平成20年6月18日 ~7月17日	2,744㎡	(主)相生宍粟 線道路等活力 基盤整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		調査期間		特記事項
上比地 森ノ上遺跡	集落	弥生時代 ↵ 古墳時代・平安時代		竪穴建物・ 掘立柱建物・ 土坑・溝・ 柱穴		弥生土器・土師器・ 須恵器・緑釉陶器・ 鉄製品・石製品他		
要約	弥生時代後期後半から古墳時代前半の竪穴住居跡、平安時代前半、平安時代末～鎌倉時代の建物跡を検出。 弥生時代後期後半の住居内から朱生産に使用された石臼が出土。							

※ 緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

－追記－

本書の編集を担当された吉識雅仁調査専門員は平成22年2月1日（月）早朝に急逝された。本書第5章まとめの原稿の執筆をほぼ終えられた直後であった。



本館整理室にて（2008年4月）

兵庫県文化財調査報告 第373冊

宍粟市所在

上比地森ノ上遺跡

（主）相生宍粟線道路等活力基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22(2010)年3月18日発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号
TEL 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 明石市樽屋町6番6号
